設

超克

倉田百三著

525
126

内容

善と福との一致に就いて……一頁
——序に代へて——
人間主義と超克主義……二三
卑しむべきものに就いて……五一
——嘘言に就いて——告げ口に就いて——或種の謙遜に就いて——高ぎりに就いて——卑怯に就いて——或る種の贅澤に就いて——陰吝に就いて——大食若しくは貪慾に就いて——色慾に就いて——賢淫に就いて——或る種の表出に就いて——懶惰に就いて——自卑に就いて——
心なき業に就いて……一四五
經濟的制約に就いて……一七六

住友務氏寄贈書

國立國會圖書館
41.1.29

685437

強くなる道……二〇一
——ソクラテス的勇氣に就いて——
善と其の實行に就いて……二二六
「せずにはゐられない」行爲……二三九
「古風」に對する愛に就いて……二六二
猿之助の俊寛を觀て……二七九
震災所感……二八五
人間苦より放たるゝ道……三〇七
——或る人の問に答へて——
女性美の種々の段階に就いて……三一六

善と福との一致に就いて

——序文に代へて——

私は今私の全生活の基礎を定める一つの根本假定を置かうとして居る。私は此れを今は信仰と云はないで假定と云つて置く。其れは此の假定が先きで崩壞する事を豫期して用心する爲ではない。私は今此の假定が私の今後の精神生活の内で、崩れる事は無いと信じて居る。然し此の假定を今私の精神生活の基礎に置いた許りで、未だ其の上に立つて生活し、其の體驗を重ねる事に依つて、生き生きと其の眞理である事を實證しない前に、此れを信仰と名づける事に氣がひける爲に、假定と云つて置くのである。私は今謙遜な、實に根深い確かさのある、然し平靜な心を以て此の假定を置く。其れは善と福との一致と云ふ觀念である。素より此の觀念は此れ迄とても自分にフレムドであつたのではない。さうあるべき筈のもの、さうあり度きものとしては、私の倫理的思想の内に深く横はつてゐた。又正統派の宗教家及び常識的な市井の善人には此れを信じて居る者

が少くない。然し私は此れ迄未だかつて一度も其れが事實であるとして信じ、從つて其の上に精神生活を据ゑようとした事はなかつた。其れは何故であるか。其れは此の地上の生活の相を見る時に必ずしも善人が惡人よりも幸福でなく、善と惡とが各々其の度に從つて福と禍との結果を得て居ないと云ふ事實を認識してゐるからである。素より善人が榮え、惡人が滅ぶ事實は此の世に於ても到る處に此れを視、法律や演劇に於いて其の原理が行はれて居る事は、動かすべからざる事實である。然し嚴密にさうであるか。例外はないか。此れと正反對の結果を生じて居るやうな例はないか。又善が福であつても其の善の度に比例して福であるか。又或る惡人が一層大なる惡人より、より多く禍ひである如き例はないか。かく吟味する時我々は地上の生活に於て、善と福との嚴密なる一致の事實を認める事は不可能である。故に我々は、市井の愛すべき善人の此の信念を遺憾ながら粗大なるもの、若しくはお目出度きものとして、受け容れる事が出來ない。善を愛し、惡を憎む正義感（ゲレヒテイツヒカイツン）の實に旺盛なるリップスも其の「倫理學の根本問題」の中に次の如く云つてゐる。

此處に「何の水をも濁さぬ」一人の「善」人がゐる。彼は自分の「役目」以外のことは何も考へたり爲たりしな

いために、その長上から喜ばれてゐる。彼は道德的に貧弱であるが、この貧しさは彼の意識には上らない。彼の周圍にには物質上道義上多くの窮乏がある。併し彼はその前に眼を瞑る能力を持つてゐる。從つて彼はこの儘の自己と世界とに甚だ滿足して居る。更に運命も亦彼に恩惠を垂れる。彼は常に健康であり、如何なる災厄も彼の爲慣れたる生の歡樂を脅かさない。此の如くにして彼は高齢に達する——此の如きは人の最も幸福なりとする者の一人である。併し何人も道德的偉大を以て彼に許さない。

此處に又一人の人があつて自ら高き道德的理想を掲げる。さうして愈々猛烈にその實現を追求すれば益々苦く彼は裏切られる。彼は世界に於ける物質上並びに道義上の窮乏を見て眞底から之と惱みを等しくすることを避ける事が出來ない。さうして自己の本質の缺陷に對する意識も亦これに劣らず彼を苦める。而も亦外部的災厄さへ彼を追求するのである。彼の最も愛する者は彼から奪ひ去られる。彼は遂に不幸の中に窮死する——或人は彼を呼んで愚人と云ふ。或人は之に反して此處に高貴なる者が沒落したと云ふ。

最も善き者は最も幸福な者であるといふ命題は此の如き事實に如何に適用さるるか。確にそれはさうあるべきことである。併し實際さうであると云ふのは無慈悲な、殘酷な無情な樂天主義である。

——阿部次郎氏要譯

かくの如きは我々が欲すると欲しないとに拘はらず、現前の事實である。故に此れを變更する

事は出來ない。我々は只此れに順應する事が出來る許りである。然らば我々の精神生活を此の事實に順應せしめる道は如何であるか。其れは次の三つあるのみである。第一は善と福とは一致しないことを信じて、其れにも拘はらず、善を追求する道である。第二は善が福に一致する限りに於いてのみ、善を追求する道である。第三は此の事實あるにも拘はらず、猶善と福との一致を可能ならしむる如く世界觀を擴張する事である。我々は此の三つの道の中何れを選ぶべきであらうか。私は人間の本性に最も適合する、最も合理的なるものとして、第三の道を選ばざるを得ないものである。私は此れ迄此の三つの道を明瞭に區別して其の一つを選擇する事なしに、曖昧なる態度をとつて來た。然し今自分の態度を明瞭にしなければならない時期が來た。其れを明瞭に選擇して斷乎として決心しない限り、今後の自分の精神生活を支へる事が出來ない事を感ずる。今ソクラテス的勇氣を以て自分の爲すべき事をなさんと欲する時、それには其の豫件として、其の事が合理的でなければならないことを知つた。(「强くなる道。」參照)。合理的でない限り、合理的でない處に眞の勇氣は生れない。故に此の三つの道の中、私は今最も合理的なるものを選擇して、此れを根本假定として、其の上に私の精神生活の基礎を置く事を決心したのである。然らば何故に第三の道を自分の本性に適する、最も合理的なるものと判斷するのであるか。其の心的過程は次の如くである。

先づ善が福と一致する限りに於いて、善を追求すると云ふ事は、私を滿足させない。此れは倫理學上所謂功利主義であるが、其れが個人的功利主義たると社會的功利主義たるとを問はず、其れは本質的に支持すべからざる立場である。其れは既に倫理學上見事に論破された立場である。善と幸福と一致する限りに於いて、善を追求すると云ふ事は、畢竟善を其れ自身の爲に追求するのでなく、幸福の手段として追求するのである。故に其の人にとつて價値があるのは、幸福であつて、善ではない。若し善がかくの如く其れ自身の價値を持たざるものであるならば、我々が善に對してかく迄感ずる內面的の感動は何處から生じるのであるか。然も幸福と矛盾して爲さるゝ善に對して特にかくの如き內面的感動を感ずると云ふ事實は如何に說明すべきであるか。私は善に其れ自身の價値を與へずには居られない。幸福は善の觀念と快樂とを結合したものである。故に若し善の其れ自身の價値を認めないならば、福とは畢竟快樂の事である。然るに快樂は其の發生の過程として、欲望を豫想する。欲望が充足された結果快樂が生ずるのである。我々が求め

るのは其の欲望の對象である。故に福と一致する限りに於いて善を追求すると云ふ第二の道は不合理である。其れは假令最大多數の最大幸福を追求する場合と雖も同樣である。

次に善と福とが一致しないものとすれば、私は善そのものゝ權威を感ずる事が出來ない。素より福を目的として、其の爲に善を求めるのではない。然し善が福と一致しない如き世界秩序に於いて、善を究極目的として追求する勇氣が支へられないと云ふ事は、果して我々の我が儘であらうか。弱さであらうか。私は最深の反省を以てして、其れを當然であると思はずにはゐられない。若し善が此の世界の、從つて我々の生活の究極目的であるならば、其の結果が福と一致すべき筈のものである。若し此れが一致しないならば、此の事は其の事自身が善が究極目的でない證據である。故に何ものをも犧牲にして此れを追求する必要はない。更にその究極目的が福と一致しない如き世界は、疑ひもなく不合理な世界である。世界秩序が不合理であると云ふ事は、其の世界に於いて我々が何事をも眞面目に努力する價値がないと云ふ事である。我々が自主的に服從すべき義務が存在しないと云ふ事である。從つて何ものをも捨てゝ善を追求すると云ふ事も義務でなく、必要でなく、且つ甲斐のない努力である。かくの如き世界に於いては、唯一の合理的

なる生活法は、總ての眞面目なる努力を捨てゝ、只自己の欲する儘に――恐らくは快樂を追求する事である。其の快樂に或る變化と明暗とを與へんが爲に、――結局快樂の量を大ならしめる手段としてのみ、善を追求する事である。即ち第二の道に歸着する。然るに第二の道が合理的でない事は前述の如くである。更らに善と福とが一致しないとすれば、我々がかくの如くして追求する義務と、必要と、甲斐のない善に對して、我々がかく迄感ずる內面的な、涙ぐましき、且つ嚴肅なる感動を說明する事が出來ない。或人は恐らく其れはかくの如き感動が認識の誤謬より生じたる迷妄であるとなすかもしれない。然し果してさうであらうか。我々が他人の善行に對して持つ賞讚、自己の善行に對して自ら勞ふ心、福を棄てゝ善に殉じた善行に對して持つ感動は、迷妄より生ずるものであらうか。此の說明は自分の內面的經驗と一致しない。故に我々にとつて可能なのは、結局善と福との一致を可能ならしむる如く、世界觀を擴張する第三の道の他にはない。即ち此の地上の生活以外に我々の死後の世界を認めて此の地上の生活に於いては、善と福とは嚴密には一致しなくても、全世界過程に於ては嚴密に一致する事を假定するのである。即ち靈魂の不死、來世の存在を假定するのである。かくて善と福との嚴密なる一致を信じて善を追求す

るのである。云ふ迄もなく此の事は福の爲に善を求めるのとは全然別事である。我々の追求するのは善そのものであるが、善そのものが世界の究極目的であるが故に、必然的に福と一致するのである。換言すれば我々が善と福との一致を要求するのは、善が此の世界の究極目的である事の證據を求めるのである。幸福の爲に善を求めるのではなく、反對に、前に述べた如く、幸福の爲に善を求める第二の道に滿足する事が出來ないが故にこそ、善にそれ自身の價値を與へんが爲に此の如き要求を生ずるのである。約言すれば善の價値と權威の客觀的保證を求めるのである。善が必然的に福であるが如き合理的なる世界秩序の中に於いて、初めて我々は善を追求する合理的勇氣を持ち得るのである。此の如きは、決して我々が肆意を以て我が儘に假定するのではない。其れはカントが、「實踐理性批判」の中に明晰に且つ嚴密に論證してゐる如く、我々の道德意識の事實そのものが、其の成立の爲の必須の條件として、其の客觀的實在性を假定せずには居られない、實踐理性の要請(ポスツラート)である。其れは我々が只主觀的にさうあり度いと願ふ丈けではなく、又さうありさうに思へる丈けではなく、さうなければならない、さうある事を要するからである。我々は其れが如何なる內容のものであるかを、理論理性の對象として認識する事は出來ない。然し此れ

が客觀的に實在してゐる事丈けは、實踐理性の對象として要請する事が出來るのである。(カント「實踐理性批判」第一部第二章參照)。我々は靈魂の不死と、來世の存在を此れ以外の根據から論證する事は不可能であり、且つ此れ丈けで充分である。此の外の根據に於いては、我々は積極的に其の存在を論證する方法を持たない。只其れを否定する根據を否定し得る消極的論證をなし得るのみである。然し此の消極的論證は決して無効ではない。其れは我々の精神生活を唯物化から防禦し、宗教意識を迷妄であるとなすが如き越權と誤謬とから、我々を救ふには充分である。即ち我々は普通に來世の存在をあり能はぬ如く考へるのは、如何なる根據に依るのであるか。其れは自然科學的認識の爲である。然るに我々は自然科學的認識の對象の性質、及び其の方法論上の吟味に依つて、其の限界を知り、其の限界以外に於いての適用を當然に拒否する事が出來る。其れは自然科學の價値を認めないのではなく、自然科學の性質が其の如き約束のものなのである。故に我々は、來世の存在を否定する常識的根據を否定すべきである。素より此の事は何等積極的なる肯定の根據を含んでは居ない。かくの如き肯定の根據はその否定の根據と共に自然科學の、一般に理論理性の、能力の限界を超えるのである。かくて我々は知識的には只實踐理性の必然的

要請としてのみ、靈魂の不死と來世の存在とを肯定することが出來るのみである。然し乍ら、我々は單に此れを理性の要請としてのみならず、此れを信仰する事が出來る。即ち此れを論證せんとする要求を捨てゝ、信ずる事が出來る。かくの如き信仰は素より主觀的である。從つて其の客觀的妥當性を他人に論證し、若しくは要求する事は出來ない。然し我々は、他人に對する論證や、要求を放棄するならば、主觀的信仰にて充分である。我々が靈魂の不死や、來世の存在を求めるのは、他人に論證し要求せんが爲ではない。自己にとつては、信じ得れば足りるのである。我々は自分一個には、明瞭である事實が、如何にしても他人に信ぜしめ得ざる場合がある。例へば無實の罪に問はれたものが、裁判官を説服して證據を擧げて論證する事が出來ないからと云つて自分が無罪である事を自信する事に差支へはない。然し乍ら、かくの如き信仰は、只肆意を以て、自分が主觀的にかく願ふ若しくはかくあるらしいと云ふ丈けでなく、客觀的にさうあるもの、として、自分一個には信じられるのでなければならない。凡そ如何なる信念も我々にとつて此れ以上の確かさを持つ事は出來ない。かくの如き信仰が客觀的事實でない事はあり得るであらう。然し其れ以上の確かさは、我々の能力の限界を超えてゐる。又宗教的、道徳的心情としては、此れ丈けで充分である。素より一つの道徳的心情は、其れが道徳的正に一致する時、初めて客觀的善となる。然し道徳的評價の對象となるのは、道徳的正を射當てる事ではなく、射當てんと欲する心情である(リップス倫理學根本問題第五章參照)。我々に可能なる事は道徳的正に一致せんとする最善の努力である。

自分は善と福との一致を可能ならしめる爲に靈魂の不死と來世の存在を實踐理性の要請として假定し、かくて其の價値と權威とを保證せられたる善を、合理的なる世界秩序の中に於いて、追求せんと欲するのである。此れが人間の本性に最も適合する合理的な道である事を信ずる。かくの如き善の追求の勇氣は全く合理的なる勇氣である。從つて自分が善と認識した以上、其の善を實行せざる事は恥辱である。今や私は此の實行を回避すべき何等の理由をも持つ事が出來ない。そして此れを實行する時、必然的に其の善に比例した福が生ずるのである。故に自分は其の事が善であると、知つた以上は、必然的に此れを實行する、德を持つ筈である。其の結果として、必然的に福を得べき筈である。只問題は自分が何が善であるかを知る事である。既に此れを知つたならば德と福とは必然的に伴ふ筈である。此れ智と德と福との一致であつて、ソクラテス的勇氣の生

ずる根據である。故に此の生活法に立つ時、自分にとつて第一に必要な事は、善に對する智慧である。「善とは何ぞや」と云ふ認識である。善の認識が誤謬である時、必然的に德と福とを得る事が出來ない。然らばかくの如き善の認識は可能であるか。其れは地上に於いては相對的にのみ可能である。完全なる善の認識は地上の人間の能力を超えて居る。リップスの云ふ如く、完全なる善の認識には、第一に人間の內にあり得べき凡ゆる動機と目的とを知らなければならない。更に其のそれ〴〵の動機と目的との客觀的價値の上置と下屬との關係を知らなければならない。更らに一つの目的の實現から生ずべきあらゆるあり得べき結果を知らなければならない。かくの如きは地上の人間の智見を超えて居る。故に我々は、完全なる善の認識に、地上に於いて達することは出來ない。然しカントの云ふ如く最高善の理念が、實踐理性の要請として、かくの如き完全なる善の認識の可能を要求せしめる。我々は行爲に於いて、最高善を究極目的としなければならない。其れ故に最高善の認識が可能でなければならない。我々は此の可能を假定して我々の最上の智見を盡くして、善を認識し、かくて認識したる善を實行しなければならない。其れが客觀的善に一致してゐる限り、福と一致する筈である、此れ以上の合理的なる道は我々に許されてゐないのである。素より善の認識は主觀的に各人にとつてそれ〴〵に異る善を認識するのではなく、客觀的に妥當なるものとして、認識するのである。故に其れは初めより各人に各個の異りたる善を認めるのとは全然別である。併し乍らそれにも拘はらず、認識する主體は依然として主觀なるが故に、善の認識は其の人の智見の完全となるに從つて相違してゆく事はあり得る。此の意味に於いて、自分は今日善と認めるところのものを將來認め得ざるに到る時があるかも知れない。又其の反對もあるかも知れない。自分が此處で假定するのは善と知つた限りは其の善を實行し、其の結果が必然的に福と一致すると云ふ事である。此の原理そのものは、不易なるものとして假定するのである。今私は此の假定の上に私の精神生活の基礎を置かんと決心する、人は或ひは其れを自分の爲に危ぶむかも知れない。然し私は私の最善の反省を以てして、自分が此の決心を後悔する時が來ることは考へられない。何となれば、若し善と福とが嚴密に一致しないものとすれば、かくの如き世界を自分は合理的と感ずる事が出來ない。從つて自分にとつて可能なる生活法は個人的快樂主義に歸着する。若し自分が他日この決心を後悔する事があるとすれば、只個人的快樂主義の立場に立つ場合のみである。社會的幸福主義は、善と福との一致を信じない限り必然的に個人的

快樂主義に徹底すべきものである。成る程個人的快樂主義の見地よりすれば、自分の今の決心程愚かなるものはないであらう。然し乍ら個人的快樂主義は、靈魂の不死、來世の存在を要請する事が出來ない。其れを要請し得るものは、道德的意識のみであるが故に、此の主義は畢竟此の地上のみに於て、出來得る限り自分の快樂を追求する生活法となる。そして若し來世が存在しないならば、自分にとつて此の生活の快樂は追ふても、追はなくても、どうでもいゝ事にすぎない。我々が若し明日死ぬる事が確かであり、そして來世が存在しない事も亦確かであるならば、我々は所謂 "Eat and drink, for we shall die to-morrow." と云ふが如き快樂の追求をなすであらうか。私はさうするとは思はない。私は屹度快樂を追ふ根氣さへも持たないであらう。然も個人的快樂主義は社會生活に於いては、其の手段としての勤勉や善を必要とする。然もかくの如き勤勉と善とは、內面的の喜悅なく、機械的に只手段としてのみなされなければならないが故に、其れは純粹の苦痛である。然も其の結果として味ひ得る快樂は、極めて少く、不安定であり、且つ其れ自身が他の苦痛を誘起する。其れは堪へ難き生活である。私は寧ろ手を拱いて死を待ち度い。況して私の恐らくは短かい生涯に於いて、猶更である。然も私は自ら殺す術を知つてゐる。そして其れを自分に禁止する何等の道德的根據をも、其の立場からは生ずる事が出來ない。

私は今善と福との一致の假定の上に立つて生活を初めんとするに當つて、かくの如き生活法が私の現實生活の事實として、如何なる結果となつて現はるべきかを二、三の例に就いて演習して見たい。

自分が若し他人から罵詈された時は如何であるか。若し其の罵詈が自分の人格に相當してゐるならば、其れは當然である。自分の爲すべき事は其れに相當せぬやうに自分の人格を向上せしめる努力をする事である。素より罵詈されたるに依つて精神的及び物質的に自分は禍ひを受けもするであらう。然し其の禍ひは自分が當然忍ぶべきものである。此れを忍ぶ事が出來ないのは、蟲の良さである。其の蟲の良さが通過するならば、合理的ではない。又此の場合假令自分が其れに相當してゐるにもせよ、他人を罵詈する事は、罵詈者の不德には相違ない。然し其の不德は其れに相當した報いを受けるのである。自分が其の不德に復讐する必要はない。我々は何の爲に他人の此の報いを希望せねばならないのか。其れが自分に何ものを與へるのか。他人の禍ひに依つて我々は積極的に何ものをも得るのではない。リップスが云つてゐるやうに復讐と毀傷の悅びとは

實際ある事と、其の感情との一種の錯覺にすぎない。合理的なのは、只罵詈者が不德であり乍ら自ら愉快を感じてゐるといふ道德的不合理に對する不平のみである。然し其の不平は今や無意味となつた。故に自分は罵詈者に對して怒り、若しくは憎むべき理由を持たない。其れは罵詈者にとつて禍ひである。故に自分が若し其の禍ひの爲に罵詈者に同情する事が出來るならば——それは出來ねばならない筈である——其れは積極的に善である。そして其れは福を結果する。又此の場合他人の罵詈が自分の人格に相當してゐないならば、自分の人格は毫末も損傷されるのではない（「强くなる道」參照）。そして其の爲に受けた精神的及び物質的の禍ひは、自分が不當に受けたる禍ひであるが故に、自分の不當に受けたる福の償ひになるであらう。此の場合罵詈者は益々不德である。しかし其れに對して如何なる態度を取るのが合理的であるかは前述の如くである。

此處に若し不義の快樂が自分を誘つたならば如何であるか。例へば美しき女があつて、自分を誘つたとする、自分は彼女の肉體の美に惹き付けられる。然し彼女の精神の卑しさを嫌惡する。全體としての彼女の、女性としての人格は、自分を惹きつけない。換言すれば、自分は彼女を戀愛しない。然し其れにも拘はらず彼女の肉體のみを切り離して對象とするならば、換言すれば彼女

を人格としてゞはなく、肉欲を滿足せしめる爲の物として對する時、充分に自分を牽きつける。然も其事は彼女を苦しめない。寧ろさうされる事を反つてよろこぶ。其爲に彼女は自分にとつて恰も美しき玩具の如く見える。然も自分が彼女の誘惑を斥ける時、彼女は反つて苦痛を感ずる。かくの如きは、今の自分には力ある誘惑である。然し自分は他人の人格を物として取り扱ふ事の罪惡である事を確知してゐる。其れに依つて自分は相手を侮辱する事を確知してゐる。そして彼女がそれを苦痛と感じないのは、彼女の罪惡である事をも確知してゐる。自分が彼女の誘惑に從ふならば、自分も彼女も共に罪惡を犯す事を確知してゐる。然も其の誘惑を斥け難いのは何故であるか。其れはその罪惡感が弱いからではなく、其の快樂が著しく强いものだからである。然し其の不義の快樂は必ず報いられる。此の誘惑を斥ける事は苦痛と闘つてなす積極的善である。其れは福をうける。此の全身を衝動せしむるが如き快樂も猶且つ此れを斥けた方が自分にとつて福なのである、又相手を其の罪惡から防ぐ事は彼女の當座の苦痛であつても、實は彼女の爲に福である。素より此の場合禍と福とを計量して後者を選ぶのではない。罪惡を斥けんとする道德的意志が我々の無智に依つて、阻まれる事を防ぐのである。

更らに第三者が第三者に對して犯す罪惡に對する時如何であるか。例へば前の例に於て、かくして自分が其の誘惑を苦闘を以て斥け、其の純潔を保ちたる女を何の苦もなく他人が玩んだならば如何であるか。此の事の豫見は、我々の誘惑を一層強きものとするのである。此の場合我々の苦痛は、自分が善の爲に逸したる快樂を惜しむ心と、他人が惡の爲に得たる快樂を妬む心とに依つて、二重に強められたる道德的不合理に對する不平である。凡そ道德的不合理に對する不平の苦痛は、凡ゆる苦痛の中にて最も堪へがたきものである。其れは何ものに依つても償はれる事が出來ない。我々の精神の力のみを以て此の苦痛を忍耐する事が出來ると思ふのは人性を理解せざる者である。只我々が善と福との一致を信ずる時にのみ、償はれる事が可能である。即ち此の場合他人の不義の快樂は實は他人にとつて禍なのである。故に我々は自分の妬みと惜しみとが自分の無智である事を信じ、自分の不平を消す事が出來る。そして他人の禍ひに對する同情を感ずる事が出來る筈である。

かくの如く我々の態度の驚くべき變化は、只我々が善と福との一致を信ずるか、信じないかに依つて生ずるのである。然も此の一致は何故に信じられないのであるか。此れを信じる事は、さまで甚だしき妄想であるか。其れに就いては私は前述の如き根據以上を擧げる事が出來ない。そしてそれだけで自分にとつては充分であると感ずる。人は或ひは善と福との一致を信じなければ善を勵む事の出來ない心を功利的であるとするかも知れない。然し其れは實に怖るべき事を知らないものである。道德的不合理に對する我々の苦痛は、精神の力を以て忍耐し得ないものである。其れは人性の能力の限界を超える。然も此の苦痛は、正義感が强ければ强い丈け、益々高まるのである。此れを堪へ得ざる事は不名譽ではない。堪へ得んとする事は無理である。不合理なところに眞の勇氣は出ない。善と福との一致を、我々が要求せずにゐられないのは我々が快樂を其の報いとして要求するからではない。實に此の道德的不合理に對する我々の合理的なる不平から癒やされんが爲めである。聖書の中にあるキリストの「復讐は我れにあり、我れ必ず報いん。」と云ふ語や、又「天に於て報い多ければなり。」と云ふ語を捉へて、其れを以て、キリストを功利的であると云ふ人がある。然し乍ら、此れはキリストの心を解せざるものである。我々が善と福との一致を知つてゐたからと云つて其れは福の爲に善をなすのではない。善はそれ自身の爲になすのであるが、善が福と一致しない事が我々の正義感を滿足せしめないのである。キリストの「福

等かくするは彼等の頭の上に火を積むなり。」と云ふ語は決して復讐心からではなく、只かくの如き正義感のみより發したのである。然らざれば「惱め責むる者の爲に祈禱せよ」と云つた心と一致しない。此の二つの語は外見上自家撞著であるけれども、實際は同一なる正義感から發し得るのである。若し善と福との不一致を信じながら、猶善に勵む勇氣が人間に堪へ得ると云ふものがあるならば、其れは實に怖るべき思想である。かくの如きをこそ自分は眞の意味の傲慢であると云ひ度い。

此處に於いて自分はかのダンテの神曲の煉獄の觀念に正しき意義を感ずる。宗教意識に於いて必須の二つの條件は如何なる罪惡も必ず審判される事と、及び如何なる罪惡も必ず赦免される事とである。私が「眞心がなくてもいゝと云ふ意味に就いて」の中に書いた如く、我々が實際に一度び爲したる善惡の行ひは嚴肅に記錄さるべきである。其れは消し去る事は出來ない。天國は正義感と矛盾する事は出來ない。故に我々が天國に入る迄には、我々の罪惡は淨められるを要するのみならず又償はれなければならない。其れは卽ち煉獄である。自分は何等かの形に於て此の煉獄がなければならない事を感ずる。卽ち我々の不義の快樂は、不當の苦痛に依つて償はれなければならない。我々は罪惡を犯さないわけにはゆかない。然し我々が殉教や、正義の爲に受けたる苦痛、又他人の無智や誤解に依つて——卽ち一般に不當に受けたる苦痛は其の償ひとなるであらう。かくて此の生涯のみならず、天國に到る迄の凡ゆるあり得べき全世界過程に於いて、償はれなければならない。我々の救ひとは、我々が必ず天國に入り得るやうに、定められてゐる事である。「此の儘でいゝ」と云ふ安心立命は、我々が如何やうなる過程を通してにもせよ、兎も角も、天國に到り得るやうに定められてゐると云ふ信仰である。其れは我々の現在の狀態如何に拘はらず、信じ得べき事である。しかもその過程は不合理ではあり得ない。我々が若し自分の罪を淨めず、償はずして、淸淨となり切らずして天國に入る事が許されるとすれば、それこそ不合理であつて、天國の莊嚴と調和しない。我々は我々の究極の目的である、我々に定められてゐる惠みなる樂園が、完全なる事を望むべきであらう。然らば我々の罪を淨めず、償はずして、天國に入る事を許さるゝ事を望むべきではなからう。然らば自分は神曲の永遠の地獄を合理的と感じ得るか。私は其れは不合理と感ぜざるを得ない。其れは神の惠みと調和すると感じられない（此等の事に就いては他日書くであらう）。然し乍らかくの如きは我々の想像にすぎない。來世の形態に就いては、

我々は如何なる認識をも得る事は出來ない。只我々は其の條件を道德意識から要請する事が出來るのみである。然し乍ら私が善と福との一致を假定し、從つて必然的に來世を假定するのは、カントの哲學や、自然科學の限界の上に支へられて、初めて生じ得るのではない。自分の道德意識がそれを假定せずにはゐられないのである。從つてカントの哲學や、自然科學の限界が如何に動搖するにせよ、自分の道德意識の本質が變ぜざる限り、其の本質に必須なる此の假定が動搖する事は無い。上來私は此れを假定と云つて來た。私は此れを斷乎として信仰と云ひ得る時の來らん事を衷心から願望する。其れは今後私が此の假定の上に實生活を營む時、其の體驗を重ねるに從つて、其の眞理としての內面的活用（ウィルクング）が、自分をしてかく云ひ得る實力を感ぜしめるやうになるであらう。自分は其れを熱願する。

（一九二三・一一・一五）

人間主義と超克主義

我々の精神生活とは生命の超克的努力の過程である。我々が現にあるところの狀態と當にあるべき狀態との對立、卽ち現實と理想との對立が存在する事は精神生活の豫件である。我々の精神生活は此處から出發する。精神生活とは現實を理想に一致せしめんとして、念々に現實を超克して行く生命の營みの過程である。併し乍ら理想と現實との對立は如何にして生ずるのであるか。此の對立が豫件であるとすれば、其れは同時に又與件でなければならない。我々の現實は固より我々にとつて與へられたるものである。然らば我々の理想は此與へられたるものに對して、未だ與へられざるものであるか。然り、其れは少くとも現實と同じ意味に於いて我々に與へられたるものではない。其れは未だ與へられざるものであるが故に我々は此れを獲得せんとして努力するのである。併し乍ら理想は又異なれる意味に於いて依然として我々に與へられたるものである事を忘れてはならない。其れは考へ得べきもの、一つの狀態として思ひ浮かべ得るもの、我々に取つて現實たり得べき筈のものとして我々に與へられたるものである。「積極道」の中に書いた如く

生命の内容をなすものは方向を附せられたる可能性の形に於ける與材である。我々の現實は此の方向を附せられたる可能性を帶びたるものとして、已に理想的要素を具へて居る。則ち當にあるべき狀態に到達せんとしつゝある一つの狀態である。此の可能性と方向とも亦我々に取つて與へられたるものである。理想とは此の與へられたる方向に與へられたる可能性を發展せしめたる究極として、我々が思ひ浮べざるを得ないところの狀態である。此の意味に於いて理想も亦現實と同じく我々にとつては與材であり、其れ自身に――其れが到達される事なしに――實在性を持つて居る。此の方向と可能性とを、換言すれば、理想的要素を除外する時、現實とは與へられたる事實でなくして、抽象的概念である。我々の本性が至上善に到達せんとする可能性を與へられて居るならば、此の可能性を認めずして我々の現實と云ふものは何所にも存在しない。我々が如何に醜く、惡しきものであつても、我々の現實は單に醜く、惡しきものではない。我々の現實とは至上善に到達せんとする可能性を帶びたる醜く、惡しきものである。逆に云へば、醜く、惡しき段階に於ける至上善に到達せむとする可能性である。眞に具象的に我々の現實の事實を考へる時、我々は現實に此の理想的要素を含めなければならない。此の理想的要素を認めざる者は反つて現實に徹底せざるものであると云はなければならない。現實主義が如何に徹底しても此の意味の理想的要素を否定する事は決して出來ない。現實主義が理想主義を排斥する事の正當なのは、此の可能性の眞に開發したる段階と、未だ開發せざる段階とを精確に辨別せずして、唯だ其の可能性を强調する事に依つて、其れが恰も已でに開發したるかの如く考へて努力を怠る理想主義を排斥する場合のみである。反對に其れが未だ開發せざる故を以て此の可能性其のものを排斥し去らむとする時、かゝる現實主義は不當である。何となれば其れは充分に現實的でないからである。我々は我々にとつて現實なる此の可能性の方向を洞察しなければならない。當に開發すべくして、未だ開發せざる可能性、即ち我々の現實の構成要素として、現實の中にたゝみ込まれて居るところの理想を承認しなければならない。其れは我々の現實の中に眠れる像である。此の像を呼び醒まして、我々の現實なる醜き、硬き材料なる石を、一つの美しくして生々としたる彫像に完成せしめんとして、念々に努力して行くところに我々の現實の意義がある。理想が到達せられたる時にのみ現實の價値があるのではない。現實は念々に價値がある。それは恰も理想が到達せられたる時にのみ價値があるのではなく、到達せられつゝある念々に價値があるのと同樣である。何んと

なれば生命とは、成長して行く過程の全體であるからである。理想も現實も等しく我々にとつて所與である。造化にとつては其の創造のモチーフと材料とである。其一つをも缺く事は出來ない。故に我々の現實は此の可能性の發展の或る段階として悉く其れ〴〵に價値を持つて居る。併し乍ら其の可能性の發展の度に比例して價値の高下の差別がある。其れ〴〵の段階に於いて善であるが、至上善の段階に達する迄は止る事は出來ない。往相の世界に立つ時(「道心の三つの相に就いて」參照)、善とは至上善の段階のみであつて其れ以外の階段には多少とも惡と醜とを含むで居るからである。故に我々は不斷に現實の狀態を超克しつゝ至上善の狀態まで登攀せむとして努力しなければならない。至上善の世界とは我々にとつて考へ得べき生命の最後の分化發展の狀態である。其時我々の生命は最も豐富に、最も力强く、且つ最も調和したる狀態にあるものとして我々が思ひ浮かべ得る處の一つの計畫、構圖である。故に我々にとつて理想とは一つの試みの下圖の如きものである。併し乍ら其れが如何に下圖であつても我々の人格が最も完全なる狀態に達し得る爲めには、必ずそれに據つて、其通りを實現せざるべからざるが如き或者である。故に理想は、未だ實現せられざるものであつても、我々にとつて動かすべからざる價値を持つて居る。否

むしろ我々が念々に實現し行く現實は、此の理想に依つて、初めて價値あるものとして允許されるのである。其處に動かすべからざる理想主義の根據がある。故に我々が人格の完成を志して精神生活を營む時我々の肆意を以て或る階段の人格を撰びそれを以て安んずる事は出來ない。我々が既に人格の完成せる狀態として或る理想を思ひ浮かべ得る限りは、其の理想に到達せむとして不斷に登攀しなければならない。素より假令理想に到達し得ざるも、人格はそれ〴〵の段階に於いて其の價値を持ち得、然も其の段階に特殊なる美と味ひを持ち得る。例へば我々が人間(ヒューメン)らしさと呼ぶところの人格の或る階段は、充分に我々を惹き着けるに足る美を持ち且つ其の段階でなければ現はれない特殊な味ひを持つて居る。其れは寧ろ我々に最も親しき(ファミリアー)、其の世界にあつて最も「我が家に在る思ひ」のする、溫かき呼吸を感じ、また此のなつかしい地の匂ひのする段階である。我々は其の特殊の味を人間味と呼むで此れを愛する。此の世界に在つては、我々の怒りや、憎みや、嫉妬や、激情や、哀訴や、一言に約せば人間性の缺點も、溫かく受け容れられる。我々は人間としてかくの如き缺點を持つが故に、他人のかくの如き缺點にも同情する事が出來る。侮りをうけて怒る者や、戀慕して嫉妬する者や、悲しみに打たれて哀訴するものを見る時、我々は

其の心持ちを身にしめて同感する事が出來るが故に、此れを裁くよりも此れに愛を感ずるのである。併し乍らニイチエが「人間性は超克せらるべき或るものである」と云つたやうに我々は此の人間性の段階を以て滿足すべきではなく、此れを超克してより高き段階に登攀しなければならない。例へば嫉妬して居る自分の相を淺ましきものとして、又哀訴して居る自分の相を弱きものとして斥け、自分の矜りに堪へ得る丈けの段階に迄登攀すべきである。此處に我々の超克的努力が始まるのである。我々が此の人間性の段階に終始して、より高き段階を欲しいならば、それは自我感情の稀薄なるものである。我々は時代の或る反動的趨勢や、個人の生長の或る閲歴に依つて、特に此の人間性の段階に惹き着けられる時期があるものである。そして其の時期は確に必要である。少くとも此の段階を一度通過しないならば、如何なる高き段階に於いても、貧弱にして狹隘なるものとなるであらう。即ち超人としては其の洞察と憐愍との對象の缺乏となり、聖人に於いては其の包攝と慈愛との世界の行きわたらぬものとなるであらう。併し我々があまりに長く此の世界に足を留めすぎ、其の味に馴染みすぎるならば、我々の人格は高貴なるものとなる事から妨げられるであらう。我々は人間性の自然を無視する僞善や、地の味ひを解せずして徒らに雲の上の事のみを說く或る時代の思想の潮流に食滯する時、反動として人間性に無邪氣となり、率直となり、地の味に執着せむとする傾向を生じる。今日の時代を支配して居る現實主義はかくの如き反動の一種の現はれである如く見える。併し乍ら人間性の段階は我々が其れを通してより高き段階に登るべき一つの段階である事を忘れてはならない。それは我々が一度把握して後超克すべき段階である。我々が後に見殘すべき一つの世界である。精神の海を渡らむとする者は多くの港々を經て、彼岸に達しなければならない。我々が船出して、一つの港に碇泊しても、やがては其の港を後ろにして航路を進めなければならない。例へば此處に一人の人があつて、自分の醜さや弱さを隱さずして隣人に打ち開け、或は訴へるとする。其時其人は愛らしく、人間らしく見えるであらう。かくの如き人は又其の人間らしき態度に依つて、恐らくは仲間をつくるであらう。そして其の仲間同志の間に於いては、其の弱さと醜さとは互の同情と親密とを釀し、愛と相互扶助さへも生じるであらう。それは少くとも自己の醜さと弱さとを隱蔽し、防衛する僞善者が虛僞な社交を以て、冷やかに相反目するよりも確かに人間らしいことである。併し乍らかゝる仲間の世界に於いては其處に相互の缺點と弱さとを是認し合ふ卑しさがある。此れを鞭打たぬ姑息がある。

其の溫かき空氣の中には、かのツアラツストラが極力卑しむだ處の「同情」に依つて、相互の醜さ醜さを相殺し、帳消して一層高き世界に向かつて登攀する勇氣を蝕ましむる一種の黴を含む濕氣がある。例へば、かくの如き人間らしき仲間が火鉢を圍んで親しく語り合つたとする。其處では女の話や、金の話や、其他樣々の、常に我々の心を捉へて居て然も高尚ではない處の話が、樂々と話し交はされる。然もかくの如き世界に於いては、眞面目なる話は「氣障」として排斥せられる。女が欲しいと告白する事は欲しくないやうな面をすることよりは確かに人間らしいであらう。然し自分が女がほしいからと云つて、他人も欲しいだらうと忖度し（假令それが當つて居ても）、其の告白を强ひるが如き、所謂人間らしき態度は卑しい。自分の內なる肉欲を超克せむとして努力して居る時、我々はかくの如く率直に女ほしさを口にする氣にはなれない。然も我々は女がほしくないのではないが故に、相手に對して反抗するわけにもゆかない。若し反抗すればそれは氣障なものとなるであらう。故に我々は苦笑を以て（恐らくは己れ自らに對する）、其の仲間を去るほかはない。かくの如くして人間らしき仲間は我々の超克的努力を阻み、かゝる努力者を孤立せしめる。又自己の價を低くして、矜りを傷つけて、他人の前に自分の醜さと醜さを露出して

て購ひ得る人間らしさは低卑である。其れは或る溫か味と、正直と、愛嬌とを具へて居るけれども、高貴ではない。現代の人々は此の高貴と云ふ言葉に對して、反感を持ちすぎて居る。我々は低卑を離れて高貴を願はれなければならないと云ふ當爲を如何なる時代と場處とを問はず、公々然として主張して差支へない。如何なる時代であつても、我々が低卑に安んじていゝと云ふが如き事は許されない。今日極めて不人望な此の言葉は、精神生活に於いて、苟くも人格主義の立場に立つ限り、決して離す事の出來ない概念である。今日に於いては、自分は寧ろ人間味と云ふ言葉に食滯する。若し人間味とは人間として自然に與へられて居る傾好性を現在の段階に於て是認し、それをして其の附せられたる方向に向つて發展せしめる事を遮斷する事に依つて生ずるものであるならば、かゝる人間味は懶惰若しくは偸安である。しかのみならず、それは又不自然である。我々は其の本性に從つて、自ら高貴を願ふやうに造られて居るものだからである。例へば嫉妬や、憎惡や、哀訴をそれ自身に是認するが如き事は許さるべき筈のものではない。我々は此等のものを人間性の或る段階として是認し乍ら、然も此れを低卑なるものとして否定し、自己の人格の矜りの爲に此れを克服せむと努力しなければならない。還相の立場に於いて許さるゝ此等の

ものも往相の立場に於いては此れを排斥し棄却しなければならない。かくして自分の後ろに見殘したる段階として、自分には許さずして、他人にはしばらく此れを許して、自己の觀照と慈愛との對象となさなければならない。人は或は他人に對して自分をより高き段階に置いて、觀照し慈愛するが如き事は僭越であると云ふかも知れない。互に仲間と共に手を取つて惱み、泣き、扶助する僚友の思想を悅ぶ或る種の人々は、かくの如き態度を他人に對して取る事も、他人より取らるゝ事も好まないであらう。併し乍ら精神の世界に於いては階級は嚴存する。一つの段階を超克して、より高き段階に登攀したる者は、自らより低き段階にある者に對して同悲よりも慈愛を、共に惱むよりも觀照せむとする立場に立つのは自然且つ當然である。人爲的な經濟的な階級でなく、德に據る階級は排斥すべき何等の根據も存在しない。若し他人から觀照され、慈愛さるゝ事を屑しとしないならば、自ら其の段階を超克することに依つて、其の傷ついた矜りを回復する事が出來るのである。固より斯の如き矜りの傷つけられたる感じは當然なものであつて、それを厭ふ心は正當である。只自ら低き段階に在り乍ら、此れを超克せむと努力せずして、只慈愛され、觀照される事のみを避忌せんとするは無理である。其れは恰も高き山に登りたる者に麓に在る者が低く見ゆることが止むを得ない如くに止むを得ない。聖人が我々に對して憐憫の情を催ほしたからと云つて聖人を責める事は出來ない。若し我々の矜りが傷つくならば、聖人の域まで登高する他はない。ダンテの「神曲」や、スエデンボルグの「天國と地獄」に於いて、天國にも階級がある如く、德の高さに從ふ階級は不合理ではない。一度人間性の味と美とを把握して後、此れを超克したる者は、自ら人間らしさに對して觀照と慈愛との心を起さないわけにはゆかない。嫉妬の苦しみを經て平靜に達したる尼は、戀の女を憐れまないわけに行かない。然も己れ自ら此れを超克したのは其の人間性の中に含まるゝ弱さと醜さとを自覺したるが爲であるが故に、人間性の段階にある人々に對する愛は彼等をして此れを超克せしめむとして勸進する行爲となつて現はれないわけにはゆかない。ツアラツストラが愛と同情とを區別し「其の同情を超えて一つの高處を持たざる總ての愛する者は禍ひなるかな。」と云つたやうに、我々は他人と同悲し、若しくは同じ心になるのみならば眞の愛ではない。眞の愛は其の中に同情を超えたる一つの高處を持たねばならない。故に一つの段階を超克したるものは其の段階に殘存せるものを眞に愛せむと欲する時、其れは手を取つて泣き合ふ同情でなく、鞭打ち、勵ます錨鎖とならねばならない。此の意味に於

いて、自分は彼の仲間若しくは僚友の感じを好まないものである。若し相互の醜さ弱さを互ひに是認し合ひ、他人を裁かざる事さ引き換へに、己れを裁かれざるこさの保證を得て、其處に同情さ親和さが生じたのであるならば、かくの如くにして生じたる平和は一つの秘密契約に依る妥協であり、此の妥協の上に成立する仲間は、恰も悪人さ悪人さが其の互ひの悪を是認し合ふ事に依つて造るさころの結社に似て居る。或ひは相互の秘密を握り合ふ事に依つて、傷物さ傷物さが一つに組み合ふ徒黨に似て居る。其れは一種の一致せる利害關係の組合である。我々は自分が罪悪を犯し、其の罪悪を他人に知らるゝ事を怖れる時、かくの如き仲間や、組合に加入せむこさを勸誘されるものである。其の間の消息は實に卑しく、且つ恐ろしい。自ら罪を犯す者は他人が犯すこさを喜ぶ。其れは仲間が出來るからである。其の仲間に依つて自分の罪悪が非難を免れ、又相手さ相殺する事に依つて其れが恰も罪悪ではないかのやうに見えるからである。其處には又人間性の或る哀れむべき弱さもある。誰れか自己の醜くき相を鏡に映して見る事を好む者があらう。我々は自分を糊塗し、僞瞞し、或ひは麻痺せしめて、自己正視の苦痛から免れ度くなる。あのストリンドベルヒの「ベリカン」の中に出る母親のやうに、他人も亦自分の如く罪を持つて居る事を知る事はせめて、自分の心の安息である。かくて罪のおさづれは善のおさづれよりも罪人に取つて慰安である。かくの如くにして我々は自己の醜悪を蔽ひ若くは糊塗せんさする偸安の爲にも仲間を求める。我々は又人間性の段階の美さ味ひさをその弱さ醜さに眼を塞いで、其の儘に是認し、强調せむさする爲にも仲間を求める。其處には最早前者の如く良心の苛責なく、寧ろ一種の道德的興奮に近き熱情を以て、我々の其の弱さ醜さを辯護せむさするのである。我々が超人的なるものに對して人間的なるものを、キリスト教的なるものに對して自然的なるものを、リフアインされたるものに對して粗野なるものを、貴族的なるものに對して民衆的なるものを擁護せむさする時、我々は常に或る道義的に近き熱情を持ち、且つ常に頽圍を形成する。文藝復興や、今日の民衆運動の如きも此れに屬するさ云つていゝ。かくの如き熱情ある民衆に對しては、此れに反對する、若しくは之を超越する者の聲は其の耳には響き難い。彼等には自ら内に持むさころの根據があるからである。然し乍ら、我々はかくの如き頽圍をも亦我々の眞實の登高を妨ぐる仲間の一種さして、卑しむこさを忘れてはならない。少くさも卑しみ得るに堪へる丈けの冷靜を持たねばならない。此の超越的態度なき者は眞に獨立せる精神生活を營み得ないものである、我々が

精神生活に於いて、最も警戒を要するのは「反動的態度」と「同情」とである。此の兩者は我々の眞理を視る眼を曇らせ歩みを本道より外らして迷惑せしめ、若しくは低回せしめる。共に我々をして主觀的偏局に陷らしめ、客觀的公正を失はしめる。我々は我々に先立つ時代が、又我々の住む時代が如何であるからと云つて、其れに反動して、自分の態度を偏局せしめてはならない。我々に先立つ時代が現實を無視して理想主義に走りすぎたからと云つて、我々の住む時代に理想を無視して現實主義に走りすぎなければならない事はない。我々の住む時代が地に着きすぎて天を忘れて居るからと云つて、自己が地を忘れて天につきすぎねばならない事はない。其處に時代の潮流に對して敏感すぎる者の偏局がある。精神生活者はあまりに潮の干滿に感じ易き河口湖の如く、若しくは外界の氣壓を感じ易き晴雨計の如くであつてはならない。自己が天地の間に絶對的に追究すべきものを追究し、取り容るべきものを、其の正當なる限界に於て、取り容れねばならない。自分一個に託されたる生命、魂を、天地の間に於いて、如何に生かし育てるかと云ふ事が、我々にとつて絶對的に必要なる事であつて、時代と社會とは此の絶對的條件に、正當に影響する權利を有する相對的條件にすぎない。此の意味に於て我々はすべからく時代を超越しなければな

らない。自分は寧ろ其の人の個人的一生の生長の歴史の上に生ずる「時代」の影響によつて規定さるゝ事を、內面的にして根本的なる精神生活者としての態度であると思ふ。例へば、青年時代と壯年若しくは老年時代とに於いて我々の思想が相違するのは、我々が一つの境地を一度把握したる後に非ざれば、他の境地に達する事能はざる根本的約束に基因するものだからである。自分の如きは自然主義流行時代に形而上主義者であり、人道主義の流行時代に人間主義であり、人間主義の流行時代に超克主義者となつて居る。此れは自分に取つては反動ではなく、必然的な動機に依つて、內面的連絡を以つて推移して來たのである。我々が年齢の變化や自分一個の直接の環境の狀態に從ひ、思想に規定を受ける事は、その個人的、心理的な點に於て、內面的根據を以つて居る。併し乍ら社會と時代との影響に依つて動かされ易い事は其の生活が外面的である證據であると云つていゝ。其處には可成りなギャップが存在する。社會や時代は素より我々の環境であるが、其れが我々の個人的生活に生々とした靈魂的な關係を持ち、我々の生活の方向を轉換せしむるが如き決定的動機となり得る力は、我々の戀愛の順逆や、肉身の生死や、愛の得失や等の個人的事情と比して、遙かに薄弱であるのが自然である。我々は精神生活の動機をかくの如き個人

的事情に持たずして、歴史と社會とに持つ者の心理にはそれが如何程眞實であるかに就いて、可成りな疑問を持たざるを得ないものである。素より社會と時代とを自分一個の問題として生々と感じ得る事は實に尊むべき事であつて、貶黜すべき何等の理由も存在せざるのみならず、自分の如くインマネントにすぎる者は、其れが生々と感じられない事を自己の缺點として恥ぢなければならない。併し乍ら自己の個人的、心理的體驗に對して純粹でなく、神經鈍き者が、社會と時代との潮流に對して純粹にして鋭敏なる感受性を持つと云ふ事は奇異なる現象である。それは寧ろ在り能はぬ事である。自己の個人的、心理的體驗に鈍感なる者が、其の空疎なる内面を塡充せむが爲に、社會と時代との情熱に藉口せむとすることは卑むべきである。況して其處には群衆心理に依る情熱と景氣とが存在するが故に、其れは自己の空疎なる主觀を糊塗するには絶好の材料である。かくの如くして時代と社會との情熱に憑かれたものゝ如く興奮する事は實に空しい。素より時代と社會との情熱は眞理なき處に起るものではない。併しそれはしばしば極めて一面的であり反動的である。我々は「もつともである」若しくは「無理もない」と云ふが如き立場に終始してはならない。此れ精神生活者が「同情」を警めなければならない所以である。「もつともである」事や、「無理もない」事に對する同情は、「併し正しくはない。」と云ふ立場を保留しない時、即ち「此れを超えて一つの高處を持たざる」時、それは一つの姑息である。我々は精神生活者としては、時代と社會とに對して自己の獨立せる足場に立つて、此れを取り容れ、若しくは排斥し得るに堪へる超越的態度を保たなければならない。かくの如き超越的立場が不可能であると云ふのものは、凡そ精神生活が不可能であると云ふに等しい。それは思想の根本約束であつて、若しそれを許さないならば思想の世界は消滅する。何となれば若し初めより必ず一つの定められたる結論に達せざるを得ない如く強いられて居るならば、其處に可能なるはたゞ方法論とプロパガンダとのみであるからである。如何なる立場をも若し否定せむと欲すれば否定し得る自由を約束として初めて思想の世界は成立し得る。此の意味に於て、思想は個人的であり貴族的でなければならない。貴族的とは其の思想の内容が民衆のそれと一致しないといふ事ではない。況して共通の對象を持たないと云ふ事ではない。只民衆のそれと共通すると否とに關はらず、其の獨自の權利と自由とを保留すると云ふにすぎない。「自ら省みて直ければ千萬人と雖も我れ行かん」とする根據を持つ事である。民衆を愛するとは民衆と同ずる事ではない。負ふべきものを負はしめ、醜と弱と

を超克せしめむとする事こそ愛である。例へば暴力を否定せむとする事は民衆が暴力を是認して居る時は無論のこと、此れを是認する事を以て一種の義氣となして居る場合に於いて、思想家のなさゞるべからざる愛、義務である。我々は民衆に對する愛の爲めに「同情」を壓へてかくなさなければならない。例へば我々が電車に乘つて、醉ひたる紳士が車掌を毆打するのを目擊したとする。其の時若し車掌が怒つて其の紳士を毆り返へし、此れを車外に突き飛ばしたとする。其時我々の同情は素より車掌に傾くであらう。若し其の車掌が自ら其れをよい事ではないと思ひ、又車内を騒がした事をすまないと思ひ乍ら、あまりの事に立腹したのであるならば、我々は此れを非難する感情を持たず、寧ろ「いゝ氣味であつた」と思ふであらう。否若し其の車掌があまりに自ら咎めるならば「其の位の事は關はないよ」と云つてやり度くなるだらう。併し其の車掌が其れを當然と思ひ、自らそれを正しいとして主張するならば、我々はそれに反對しないわけには行かないであらう。又それが正しいか否かと問はるゝならば、「正しくはない。」と答へざるを得ないであらう。自分の子供が他人の子供から賣られた喧嘩を買つて、相手を傷け、自分も傷いて歸つた時に、我々はその事情を聽いて腹の底で子供の勇敢をほめて居ても、子供に「喧嘩してもいゝ」と云ふ事は出來ないであらう。其處に善と正義そのものゝ不可侵の權威がある。而して思想家とは此の善と正義との權威の奉行であり、代辯者としての使命を持つものである。其處に同情の超克が缺くべからざるものとなつて來る。若しその人間的同情のために、「他人を毆つてもいゝ」、「喧嘩してもいゝ」と是認するならば、道德の權威は保たれることはできない。我々は正義の奉行としての義しさを枉げたのである。一寸を讓れば一城を讓る。かくの如くして道義は頽廢するのである。正義の旗の高く樹てられたる山の麓にて民衆がその醜弱の裡に輾轉することはさまで恐るるに足らない。併しその旗を引き下して、山腹に於て民衆がこれに狎れ、弄ぶ事を許す時それは恐るべきことの初まりである。自分は彼の芝居に於て、無賴の徒や、盜賊が、自己の惡事を誇る、いはゆる「タンカを切る」場面に於て、『お釋迦さあでも氣やあつくめい』と云ふのを聞く時不思議な感激に打たれる。彼等は樣々な惡事を犯し乍らも、釋迦の尊むべき智慧者である事丈は認めて居るのである。其處には猶正義が支配して居る。樣々の罪惡もなほ善の「位」を汚しては居ない。故に我々は彼等が『もう年貢の納め時』などゝ云ふ時憐れみの心を自然に起す事が出來るのである。そして彼等が罪惡を犯したのも其の然るべき原因があつたのであらうと思ひ、彼等も亦

釋迦の愛から漏れては居ない事を思ふて滿足を感ずるのである。併し乍ら我々が正義の旗を引き下ろして汚す民衆を見る時には、假令彼等の中に、盜賊や、無賴の徒とは比較にならぬ程の理由と根據とがあつても、我々は前の場合に於ける如く、自由に同情を働かしめる事が出來ない。安心して愛しかけ、手を握る事が出來ない。其處には一つの重大なる顚覆がある。我々の精神全體を支へる主柱の動搖がある。我々は彼等が正義の旗の不可侵を認めることを條件とせずしては、愛と同情との通路が遮斷されるのを感ずる。協同の基礎が見出されない。何故に民衆は正義の旗を引き下さなければならないのであるか。若し彼等の主張する處が正しいならば此の正義の旗こそ彼等が其の下に集まるべき絕好の場所でなければならない筈である。然も彼等は別の旗を立てんことを欲するのは何故であるか。其れは彼等の正義が神の正義に堪へないからである。換言すればそれは正しくないからである。我々は暴力の行使を正義として押し通さむとする時神を「目の上の瘤」にせねばならなくなる。神が衣食の道に關して、正義として命ずる處は墨貧の道である事は疑ひを容れない。我々は此の道を神の正義として是認し、自ら此れに堪へ得ざるが故に暴力革命の道を選ぶと、何故に正直に我々の分限に相當した立場を、自ら標榜することが出來ないのであるか。神の名に依つて、資本家を討伐する事が出來ないならば、神の憐みを受けて、資本家を討伐すべきである。神をなみして、其の正義の旗を引き下ろし、暴力を正義として通用せしむとする事は一つの强引である。無理である。此の强引と無理とは時代の潮流に乘り、群衆の力に依つて或る處まで通るかも知れない。然し終局の成功、最後の勝利は不可能である。其の何物かに憑かれたる被催眠者の如き群衆心理は、自分には寧ろ一つの復讐の靈(スピリット)の支配する世界であるやうに見える。即ち彼のソドムとゴモラの驕れる民を懲罰した靈が民衆に乘り移つて、資本家を討つのである如く見える。我々は最後の場合に於いても、かくの如き神の怒りに奉仕するものとして猶神を認めるものである場合に限り、民衆と握手する事が出來るのみである。神をなみし、其の律法の神聖を侵して、暴力を是認せむとする民衆は我々と共通點を持つ事が出來ない。其れは神の敵である。從つて其の奉行たる思想家の敵でなければならない。かくして經濟革命は一つの正義の觀念の革命であるからである。それは道德革命であり、純粹に原理上の革命として、思想家にとつて致命的の問題である。かくの如き革命に對しては思想家は自分の立場を明らかにする事は自己の生存權の問題である。若しも人格の獨立と自由との不可侵の原理が他の原理に依つて置

き換へられる事が、かくの如き革命の意義であるならば、我々は思想家としての最後の立場を奪はれるものである。故に我々は必死に抵抗しなければならない。而して人格の獨立と自由との不可侵の原理からは暴力を正義として認めることは不可能である。故に我々人格主義者が思想家である限りは暴力に依る革命を是認する事は不可能である。我々にとつて可能なのはそれを不正と認めて、しかも此れを許すこと、恰も前述の紳士に對する車掌の行爲に於けるが如くなす事の他にはない。然し乍らそれは我々が人間的同情の立脚地に立つ場合の事であつて、其の同情を超克して眞に正しさを負はしめむとする時、かくの如き立場は依然として一つの姑息である。我々は自分に對して暴力に酬ゆるに暴力を以てする立場を許さず、此れを超克せむとして自ら努力すると共に、他人に對してもかくの如き努力を勸進しなければならない。此れは單に暴力の行使に就いての自他に對する超克的努力の例にすぎないが、其他凡ゆる方面に互つて同樣の超克的努力が營まれなければならない。而して此等は總て自他に對する「同情」との精神的闘ひである。かくてツアラツストラの如く我々の人間性を超克せむとする努力は我々の精神生活の基調となる。我々は、事々物々に當つて、日常に、不斷に、自分に對しても、他人に對しても、「超克せよ、超克せ

よ。」と叫ばなければならない。同情との闘ひ、義望と、嫉妬と、肉欲と、愚痴と、凡て卑しく、狹く、弱く、誇りなき事を超克せむと努力しなければならない。人間性の段階に於いては、尤もな、無理のない愛すべき心情も、此處に於いては排斥すべきものとなる。此處に我々の欲するのは高貴であつて、可憐ではない。悲壯であつて哀愁ではない。他人の才能を嫉妬する事は藝術家として無理のない事であつても、死んだ子の年を數へる事は母親として尤もな事であつても、立ち上がる力を失ふことは失戀の人の避け難き事であつても、誤解されて義しきに倦み、虐待されて怨嗟することは人情の自然であつても、我々は此等を自己の醜弱、卑小として斥け、負うべきを負ひ、負はしむべきを負はしめ、勇ましく起き上り、捨つべきを捨て、孤獨に堪へ、公けにして、強く、大きく輪を畫きつゝ登高せむと努力しなければならない。此の自我感情の誇りに生き、氣を負うて登高するものはツアラツストラである。かくして寂寥を喜び、民衆を輕蔑して鷲の如く巖角に孤立し、雲雷を其の脚下に跳める高山の巔や、或ひは眞夏の大野に孤り燃ゆる太陽の如く只管自己の孤獨と誇りとを强調せむとするに到れるものは超人である。ツアラツストラの超人には此の超克主義の反動的なる强調と誇張とがある。其れは民衆との距離を强調し、孤獨を誇張す

る。民衆との距離は止むを得ざるものたるに止まらずして其の趣味となり、孤獨は其の寂寥に非ずして誇りとなつて居る。其處に貴族主義の民衆主義に對する反動的なる誇張がある。かくの如き誇張は前にも述べた如く、精神生活者の警めなければならない一つの外道である。我々の超克主義が民衆の人間主義と手を分たなければならないのは、我々が民衆を愛しないからではない。我々の孤獨は我々が此れを欲せずして、然も避ける事の出來ない悲哀である。我々は此の別離と孤獨とを悲嘆を以て堪へるのに過ぎない。只其時我々の超克主義は我々の悲嘆の感情をも亦超克せむとして作用するが故に、其の感情はさめ〴〵とした涙や、弱々しき哀音とならないで、石の如く冷たき沈默となり、湖水の如く靜かなる忍受となり、更らに積極的に孤獨にして快活なる獅子の如き舞踏となるのである。然し乍ら其處には不自然にして偏執せる誇張と强調とが存在するが故に、其の誇張と强調とは更らに正順にして素直なる調和に迄淨められなければならない。即ち今一度此の反動的超克主義の偏執が超克されなければならない。所謂「三樣の變化」に於いて、駱駝は獅子となり、更らに小兒とならければならない。佛敎に所謂「離着」とは先づ世を離れて法に着き、更らに法に着く事をも離れるに及むで眞に自由となるのである。超人主義の「怒り肩」

はも一度平らかになり、其のこだわりと偏りとは取り去られて素直となり、其の圭角は磨かれて圓滿となり、其のあまりに氣を負ひすぎた誇りは、自らなる而も犯すべからざる威嚴として聖化されなければならない。一言に約せば超人は聖人とならなければならない。其處に於いては最早や民衆との距離を特に强調する必要なく、殊更に孤獨を誇る必要もない。何となれば既に民衆と着きすぎる憂ひなく、孤獨に堪へ得ざる恐れなきが故に、其の安全にして捉はれざる境地より自然に民衆に向つて下りゆき、孤獨の山を出でゝ市におもむき、民衆と交ることを素直に悅ぶ事が出來るからである。故に超人に對して反感を感じなければならなかつた民衆も、かくの如き聖人に對しては慰めと勵ましとの伴侶として此れを迎へる事が出來るであらう。何となれば彼等は今や民衆の友であり、仲間であるからである。只異れるは一度民衆より離れて高所に住き、再び還り來つたる民衆である。民衆と伍して民衆を引き上ぐるものは聖人である。聖人が山に隱れて獨善を樂しむ仙人的隱栖から、遂に市に現はれて民衆と伍して民衆を導く生活を選ぶに到るのは彼等が一層完成したからである。所謂「小隱は山にかくれ、大隱は市にかくる」と云ふが如く、又ツアラツストラも其の德と智慧とに飽滿して後、遂に民衆に向つて所謂「沒落」を初めた如く、一

度民衆を離れたる超克主義者は再び民衆に向つて還り來たる時がなければならない。彼の親鸞が自ら愚禿と稱して在俗の中に沒入し、又トルストイの神父セルゲイが修道院から出て民衆の中に沒し去つた如き此れである。かくの如くして初めて眞に民衆の仲間となり、僚友となる事が出來る。かくの如き民衆は最早や只の賤民ではない。それは一度貴族主義を通過し來れる民衆である。神の民である。貴族主義が民衆主義と握手し、調和し得る道は此の道の外にはない。初めより民衆を一歩も離れない民衆主義は、民衆をして賤民として止まらしむる懶惰若しくは姑息である。かくの如き民衆として止まるに堪へざる事は自覺せるものとして當然の事である。かくの如き民衆の仲間若しくは僚友より、一度身を脫せむとする事を咎むる者は精神在活者ではない。行者ではない。此の意味に於いての貴族主義には正當なる根據がある。行者は一度民衆を離れて再び還り來たる迄、其の精神的遍歷を許されなければならない。親鸞は在俗に交つても只の凡夫ではない。セルゲイは民衆の間に沒しても只の民衆ではない。民衆主義がかくの如き意味での貴族主義をも許さない時、それは賤民主義である。我々は如何なる意味に於いても醜弱を醜弱として、低卑を低卑として、その儘放置する事は許されない。醜弱と低卑とは必ず超克されなければならな

い。人間は超克せられて超人となり、更らに聖人となり、かくて賤民と神の民とをつなぐ橋梁となつて再び還り來らなければならない。超克とは否定ではない。超克する事によつて包攝するのである。止揚するのである。人間と超人とを超克して聖人となる時我々は人間性の凡ゆる愛すべき、親しむべき味や、地の匂ひを忘れるのではなく、又超人の誇りと高居とを理解しないのではない。此等を把握し、超克して、高き段階に登攀したのである。此れを卒業して自由となつたのである。故に其の心境は人間の心理をも超人の心理をも隅々まで理解し得る。かくの如くして初めて民衆の仲間となり、僚友となつて然も此れに捉はれずして此れを引き揚げる事が出來るのである。故に其れは仲間であると同時に導師である。僚友であると共に豫言者である。民衆はかくの如き導師と豫言者とをも猶且つ其の仲間より排斥せむとするであらうか。其の僚友として受け容れないであらうか。かくの如き者は其の仲間の意に逆うて發言し、若くは必ずしも僚友と共に躍らざるが故に、彼等にとつて愛すべき者とならないかも知れない。少くともそれは民衆の欲する好餌を以て此れを釣る煽動家の如く民衆にとつて快きものとはならないであらう。然しかゝる無理解と孤獨とは素より聖人の欲する處ではなくても、既に超人の境涯に於いて其の試練を經た

る後であるが故に、彼等を傷ける事は出來ないであらう。彼等は既に其の孤獨と無理解とに依つて傷つけられる恐れなき强き者となつたが故に、民衆に向つて「沒落」したのである。素より我々は超人ではない。猶更ら聖人ではない。而して又只の民衆でもあり得ない者である。然も民衆と手を分つ事の出來ない程民衆を愛して居るものであるならば、我々の取るべき道は超人となり聖人となつて後再び民衆に沒落する事に依つて、眞に民衆の仲間とならむ事を欲して登攀の旅に發足する他はない。此れ我々が民衆への愛を正しく生かし得る唯一の道である。彼等と握手し、調和し得る唯一の道である。此の意味に於ける貴族主義をも認め得ない者とは我々は到底共通の立場を見出す事は出來ない。かゝる人々に向つては一種の深き痛ましさを以て別離を告げる外はない。恐らくは我々も亦何處かで再び相ひ會ふであらう。（一九二三・五・一）

卑しむべきものに就いて

我々は『憎むべきもの』と『卑しむべきもの』とを感じ別ける事が出來る。もとより此二つとも道德的に罪惡であつて、我々の良心はこれを非難する。此の二つとも我々の靈魂を死なしめるだけの價があつて、其の報いは地獄である。併し乍ら吾々の良心は此の憎む可きものと卑しむ可きものとに對して、別樣の調子を以つて非難する。前者に對して我々の起す非難の感情は憎惡であり、後者に對して起す非難の感情は侮蔑である。前者の甚だしきものに對しては我々は之れを眞二つに斬り裂かん程に欲するに對し、後者の著しきものに對しては、之れを斬る事さへも刀の恥として屑しとせず、吾々は顏を反け唾を吐いて去るのである。此の際我々の良心は前者よりも後者をより深く非難して居る。然も其の罪惡が齎すところの禍ひの結果から云へば、前者は多くの場合後者より甚だしいのである。殺人は詐欺よりもその及ぼす結果は大であり刑法上にも重く量定せられて居る。併し我々は或る殺人よりも或る詐欺に對して之れを道德的により深く非難するのである。我々は後者の場合に於いては、その罪惡の齎した結果の大小の意識から離れて、

純粋にその罪惡を生んだ人格そのものを咎責の對象とする。然もその人格の中に於いて、特にその尊威を構成する本質的部分、即ち人格の人格たる特異の部分を選むで對象とする。此意味に於いて『卑しむべきもの』は『憎むべきもの』よりもその罪惡の質に於いて重いものといはなければならない。阿部氏も言つて居る樣に、ダンテの神曲の地獄に於いて罪を犯したる死者の靈魂はその罪の重さの度に從つて次第に下層に定められて居るにも關らず、ダンテが是等の靈魂に對して非難する感情は必ずしもその度に從はず、時として上層に定められたる靈魂に對して下層に定められたる靈魂に對するよりも一層烈しき感情を以つて非難して居るのである。例へばその最も著しい例は地獄前界に定められたる卑怯者の靈魂に對して示されたる侮蔑の感情である。卑怯者の靈魂が地獄前界に置かれたのは、その罪惡が地獄の第一獄の刑罰にさへも相當しないからでなければならない。然も地獄の下層に置かれたる靈魂さへも尙是を屑しとせざる矜(ほこ)りを持つて居るのである。

天は其美をそこなはざらん爲に、彼等をおひ出し、深き地獄亦これを收めず、何となれば、惡人も亦彼等よりは、やゝほまれありと信ずればなり。――神曲、地獄、第三曲、四〇――四二

即ち彼等は天使からも地獄の囚人からも共につまはぢきされて居るのである。自分が是れ迄「わるさにも色々ある。質のわるいわるさ、天國に遠いわるさは赦し難い」と度び〳〵云つたのは、此の卑しむ可きものを指したのである。實際我々は或る殺人者に對してよりも或る虚言者に對して遙かに赦し難い場合があるのである。それはその罪惡の性質が直接人格の本質に關つて居るからである。我々が『人格』を『物』に對して區別するのは、即ち人格が人格である所以を成す特異のものは、『敬』の意識である。此の意識を自ら損ふものに對しては、我々は是れを人格と認めて憎惡の感情を起す事に困難を感ずる故に、即ち我々の憎惡にも相當せざるものとして侮蔑するのである。故に我々が侮蔑の感情を持ち得る事は我々が尙多少とも矜りを失はずして持つて居る證據であり、他人から侮蔑された時に是れに反抗し得る事も亦同樣の證據である。我々は他人から憎惡せられるよりも侮蔑せらるゝ時、それをより深き苦痛と感じるのである。『卑しむべきもの』は本來斯くの如き罪惡であるが故に、我々は之れを憎む可きものと對照する時一層その特質を强調し明瞭ならしむる事が出來るのである。其の最も著るしき例は被侮辱者が侮辱者と決鬪して之れを殺した場合である。此處に生じたる殺人と云ふ罪惡は、自分の人格を尊重する心が、その矜

りを誤れる手段によつて支持しようとする所より生じたものである。刑法は單に言葉を以つて相手を侮辱した者よりも、相手を殺した者に對して重く罰する。併し我々の良心は殺人者よりも侮辱者をより深く非難し得る事もあり得る。鹽谷判官と高師直との例の如きこれである。我々がかかる種類の殺人に對して特に同情を寄せるのは、その動機が我々の人格そのものゝ本質と直接に結合して居るからである。併し乍ら自分は此處に卑しむ可きものと憎む可きものとの特質を一般的に比較してその關係を明かにするのが目的ではない。此處には主として我々が卑しむ可きものとして考へる個々の行爲の實例を列擧して、之れを憎む可きものと對照しながら、考へて見たいと思ふのである。それに依つて我々が實際生活に於いて、特別に自から恥ぢなければならない所のもの、從つて最も避けなければならない所のものを、特に拔き出して、今一度新しく我々の目の前に据ゑ著け、我々の反省を刺戟したいのである。自分は特に日常生活的なるもの、然も我々の反省から逃れ易いものを、成る可く輕きものより數へて行きたいと思ふのである。

嘘言に就いて

總ての嘘言は卑しい。それは何等かの惡しき目的の爲に吐かるゝもののみならず、嘘言それ自身に於て卑しむべきである。從つて善き目的の爲に吐かるゝ場合と雖も猶それはそれ自身に於ては卑しきものであつて、我々の良心はその場合に於ても曇りと汚れを感じないわけには行かない。善き目的が嘘言をジャスチイファイすると考へるのは良心の鈍さより來る。その最も極端な例を擧げれば肺病を診斷せられたる者に、その人が病氣の眞相を知つて落膽する事が病氣を增惡せしむるを虞れて、病氣を僞つて告げたとする。此の場合此の嘘言の目的は友達の健康の保持であり、その動機は愛である。此の場合に於て嘘言を吐くことは何等良心を汚さゞる正しき行爲として是認せらるべきであらうか。自分はそれが止むを得ざるものであつても、猶依然としてその嘘言は是認する事が出來ないものである。卽ちその人は愛の動機から、善なる目的から惡なる嘘言を敢へて吐かざるを得ざる不幸な窮境に置かれたのである。我々は實際にその友人から自分の顏を直視されて、『本當の事を云つて呉れ給へ。嘘ではあるまいね。』と問ひ返へされた時、良心の痛みなくして『安心したまへ。君は肺病ではない。』と答へる事は出來ない。否むしろその嘘言なる事を、氣取られないやうに、相手の顏を見て、かく敢へて云ふ事は極めて困難である。從つて後に

到つて假りにそれにも拘らずその病氣が增惡した時に、その友人が『僕はむしろ自分の運命の眞相を知つてそれに堪へた方がよかつた。何故本當を云つて呉れなかつた。』と責められる時に我々は依然として謝罪するほかはない。かゝる不調和は人生の限界の一つである。我々は此の嘘言をそれ自身に於て是認せずして、惡しきものたる事を認め、その惡の原因を我々の存在の制約として忍受する道を選ばなければならない。かゝる不調和は淨土にはあるまじき制約である。我々がその制約がふさはしくない程の存在の形式に入り得る事を我々の彼岸の思慕としなければならない。そこに『人間』の『被造物』の信順がある。止むを得ない事と願はしい事とを區別する事は我々の道德意識が宗教意識に通ずる門である。我々が嘘言をそれ自身に於てかく卑しむのは、それが眞理に對する直接の裏切りだからである。眞を求むる我々の人格の本質的要求に對する對蹠的な乖反だからである。他の多くの惡德はそれ等が惡たる所以は其れ等が結局嘘僞に還元さるべきところにあるのであるが、嘘言はそれ自ら直接に嘘僞である。嘘言とは甲を非甲と主張する原本的な誤謬の主張である。我々はその時眞理そのものゝ尊威が直接に、露骨に冒瀆せらるゝ事を感ずる。それは我々の人格の根本要求に矛盾するのである。總て嘘言をそれ自身に於て卑しむ神

經の鈍きことは人格的に卑しきものゝ第一の表徵である。何等の惡しき目的なくして、その場をとりつくろふ爲に、或ひは話の興を添へる爲に、恐らくは不和と氣まづさを好まず、諧謔をよろこぶ人間らしき心から、吐かるゝ嘘言も亦卑しまれなければならない。出來得る限り嘘言を吐くまいとする神經は人格の尊威を保つ第一の資格である。此の神經にぶきものは他に加何なる美點あるも、それは遂に高貴（ニーデル）である事は出來ない。故に思想家や藝術家に於て此の神經鈍き事は致命的の缺陷である。嘘言は微妙な狡猾な形をとつて思想家の言說や、態度や、藝術家の作品の中に竄入して居る。所謂『本物』と『贋物』とはこの點に於て別れる。『ほんもの』は尊ばれ、『にせもの』は卑しまれなければならない。それは決して見かけの謙遜や、同情や、外面生活の謹嚴さや又作品の文章の美しさや等に依つて見分けられるものではない。その人物そのものゝ質、自ら匂ふ空氣の純粹さ、その作品の文章の裏を流れて居る誠等に依つて、鋭敏な神經が、卽ち自ら嘘僞を厭ふ神經が、その趣味と感覺とを以て感じ分けるのである。作品や文章に於ては眞實は生き、嘘僞は死ぬる事が實に露骨である。嘘言はかくの如くそれ自身に於て卑しきものであるが、それが更らに惡しき目的と動機とを持つ時には特に卑しむべきものとなる。人を陷れんが爲めの中傷や、

他人の友情を離間せしめんが爲の讒言や、自己の利益の爲にする阿諛や、自家廣告の爲にする法螺や、此等が卑しむべきものたる事は云ふまでもない。只特に此處に擧げて置き度いのは、相手の感情を弄んで、此れを享樂せん爲の遊戯的なる嘘言である。此の種の嘘言は相手の人格を弄び物とする點に於て、此れを物として取り扱ふ點に於て、直接に人格そのものに對する冒瀆であるが故に、その動機が利害問題を離れて居るに關はらず、その質の悪しきものである。それは文明的なる慘酷である。殊にそれが戀愛關係に於て行はれる時には、その動機が遊戯的なるところより發し乍ら、それと最も反對なる人性の最も深き、眞面目なるものを蹂躙し死滅せしむる結果に導くことがある。我々は此の種の遊戯的嘘言に依つて傷つけられたる時、その侮辱の念が最も深刻であるのは當然である。我々は特に此の種の嘘言を愼しまなければならない。素より我々は絶對的に嚴密なる意味に於て、嘘言を吐かない事は至難である。むしろ不可能である。嘘言の中には又美くしき人情より生ずるものがある。又その『嘘から出た誠』もある。義弟の不身持ちをその母の前にかばう嫂の嘘言はやさしき味ひを持ち、小春と治兵衛との愛の眞實は嘘から出た誠である。しかし乍ら出來得る限りは嘘言をつくまいとする努力と、嘘言をそれ自身に於て卑しむ神經とは、

高貴を願ふ人格の缺いではならない第一の用意である。

告げ口に就いて

告げ口とは私的の會合に於て或る人が第三者に就て語りたる悪口をその會合に列なつた一人が本人に向つて告げることである。これは或る人が實際に語らざりし事を僞つて告げる場合のみ指すのではない。かゝる行爲が卑しむ可きであるのは勿論であるが、たとひ事實語りたる事を本人に向つて告げる場合も亦卑しむ可きものである。吾々は悪口そのものが善いか悪いかの問題より獨立して、告げ口を卑しまねばならない。他人の悪口を言ふ事は、それが、本人に眞に中つて居ると考へて居る場合には、それはたとひ憎む可きものであり得ても、卑しむ可きものではない。併し告げ口は卑しむ可きものである。多くの場合我々は悪口を云ひ易きものである。もとより悪口を云ふ者は、それが本人に若し告げられても構はないだけの覺悟を持つて云ふべきである。併し多くの場合に於いて、その私的の會合に於いて、その悪口が本人に告げられる事を希望せず、又告げられざることを期待する事は自然である。告げ口する者は默々の間に悪口をする者

の此の希望と期待とを承認して置き乍ら、之れを裏切るのである。然も多くの場合無意識的に惡口を言ひ易き空氣を自から作れる責任を別たなければならないものである。恐らくは自分もその惡口に相槌を打ち少くともそれを氣持よく聞いたのである。多くの場合我々は他人の惡口を聞く時に或る毀傷の喜びを感ずる傾向を持つて居るものである。然も本人に對して『誰某は貴君の事を斯く〳〵惡口を言つて居た。』と告げるのである。何か爲めにする所あつて、或は媚びる爲めに爲すのがいけないのは勿論であるが、親切から爲す場合に於いても、告げ口と云ふ形は避けねばならない。最も卑しむ可きは自から意識的に惡口を云はせる空氣を作り、若し惡口を言はなければ、その人が卑怯者であるが如く見えるやうに仕向け、惡口を云はせて置き乍ら、その人と本人との友情を離間せん爲めに、特にその惡口を誇張して本人に告げる場合である。斯くの如き告げ口は惡口よりも遙かに非難に價する。惡口は勿論いゝものではない。殊に他人を傷つけんが爲めに、本人に中らない惡口を揑造する場合に於いて尙更らである。又たゞ當つて居ても、自分の缺點を棚の上にあげて置いて、他人の惡口をつく者は淺ましい。併しそれは告げ口よりは未だましである。惡口者には時として正直な腹の綺麗な者もあり得る。併し告げ口する者には如何なる場合に於いても、よき心情の持ち主は存在しないと云つていゝ。好んで屢々告げ口をなす人格は卑しむ可き人格である。それは特に惡口者からその事を秘密にするやうに頼まれた場合は尙更である。此の場合の告げ口者は又特に義氣に乏しき者として卑しむ可きである。我々が若し此の告げ口を惡しき手段に利用するならば、人と人との關係は常に警戒を要するものとなり、その交りの幸福は失はれ、友情は常に脅かされるであらう。從つて又その告げ口者を卑しみ得ずして、告げ口を取り上げる者は亦その人格の高貴の德に於いて缺けたるものと云はなければならない。

或る種の謙遜に就いて

謙遜は美德である。自から反省する心强き者が、自己の現實を直視するに堪へる勇氣と公明とを持ち、且つその頭腦鋭く、然もその抱いて居る理想が高い時には我々は自から謙遜とならざるを得ない。かくて我々は自己を顧うち精進の念を失はず、次第に高まつて行く事が出來るのである。此の種の謙遜は自己が神に對する謙遜であつて如何なる場合でも美しい。併し謙遜には又〻

に對する種類のものがあり、自己以外の他人と對立せしめて比較する事に依つて生ずる謙遜がある。此の場合に於いても、遜謙は亦美德であり得る。蓋し我々は自己に對するが如き嚴酷さを以つて、他人を裁く事が出來ない。第一に自己の眞相を自己が知るが如くに、他人の眞相を知る事が出來ないからである。第二に自己を愛するが如く他人を愛して居ないからである。第三に裁く權利が我々にないからである。故に神に對して謙遜なる者、從つて自己の現實の醜さを知る者が他人に對する時其處に特別の事情がない限り、他人を自己より美しき者と考へるのが自然である。我々が其本性上、出來得るならば、醜よりも美が存在して居る事を願ふ者である限り、現實の相の不明なる他人に對しては、其の美點を見出さうとする筈である。然も充分に愛せざる者を責むる事は心苦しく、且つ自分が裁く權利を持つて居ないと感ずる時に、我々は自から他人に對して謙遜となる筈である。かゝる謙遜は自然であつて美しい。併し乍ら他人に對する謙遜の場合には又卑しむ可き種類のものもある事を忘れてはならない。第一に自己が醜き故に他人も亦醜きものでなければならないと推測して、其の承認を、從つて自己と同じ謙遜を、他人に强ひる謙遜は卑しい。此の場合に於いては、自己の謙遜が止むを得ざる承認であつて、出來得るならば自分が美しき者であることを願ひ從つて他人も亦美しき者であらん事を願ひ乍ら、然も自から醜くして自然に謙遜にならざるを得ないといふその自然さと矛盾して居る。かゝる自然なる謙遜に於いては、自己の醜きを知る事は依然として他人の美を願ふことゝ矛盾しない筈である。我々は自他共に美しき者である事を願ふのであるが、只自己の醜さを認めざるを得ないと云ふに過ぎない。自己が醜きが故に他人が美しくある事を願ふ事が出來ないのは卑しい。然も此の謙遜の强制が自己の醜さと他人の醜さを承認して相殺せしめんとする意識を持つ時には特に卑しい。もとより他人が其の醜さを露出し、我々が之れを認めざるを得ないにも關らず、高慢に處する時に、我々が片腹痛く思ふのは自然である。併し其の爲めに自分が謙遜でなければならない理由は少しも減じない。我々が謙遜でなければならないのは他人よりも醜いからではなく、神よりも醜いからである。謙遜の眞の根據は飽く迄も神に對する謙遜になければならない。他人に對する謙遜の場合は他人が自分より美しい時に、一層自分の醜さを感ずる積極的の場合に於いては自然であつて美しいが、他人が自分より醜き時に自分が美しき者かの如くに感じて他人に謙遜を强ひる消極的の場合は卑しい、何故なれば、それは我々の謙遜を生みたる心、即ち我々が眞に美しき者たらんと願ふ心と矛盾

するからである。他人に對して眞に謙遜なる者の、其の謙遜を美しからしめるものは、若し他人が自から恃む所あつて誇つて居るならば、それを祝福する心でなければならない。もとより其の誇りが其の人に相當して居ない事を認識せざるを得ない場合がある事も止むを得ない。それは恰も黑き烏が如何に虛心に眺めても、或は白からん事を欲して眺めても依然として黑く見ゆるが如くであつて、止むを得ないが、自己が黑き故に他人の黑きを强ひて穿鑿してこれを承認せしめんとするが如きは、本來謙遜の德の動機と一致せざるものであつて、卑吝である。殊に他人の持つて居る人間的な矜りに對して、特にそれを高慢として目立たしめんが爲めに、故意に自己を謙遜なる立場に置く事は卑しむ可きである。蓋し正しき謙遜と正しき矜持とは共に我々が高貴たらんと願ふ心より生れるものであつて、それは一つの楯の兩面の如く別つべからざるものである。我々が謙遜であり乍らも亦、誇りを持たざるを得ないのは實に自然である。若し我々が何等の誇りをも持ち得ない者であるならば、謙遜とは畢竟自棄若しくは卑屈に過ぎない。懶惰に過ぎない。故に他人が或る矜持を示して居る時に、それが人間的に同情すべき場合である事も亦あり得る。必ずしもその人が不謙遜でなく、寧ろ謙遜であり乍ら、否寧ろ眞の謙遜なる心の宿る程高貴なる理想を抱いて居る爲めに、或る事情の下に、其の同じ心が矜持となつて現れて居る場合もあり得る。然もかゝる矜持は云ふ迄もなく、その人の理想に照らす時、もとより云ふに足りないものであるが故に、一擊の下に押し崩される筈のものである。その人の理想が高く、元來の謙遜な人であるならば、尙更その弱點は無防禦である。此の弱點を知り乍ら、より謙遜な地位に自分を置いて、その矜持を高慢として目立たしめ、その人をして赤面して立場を失はしめるが如き事は最も卑しむ可きである。斯くの如きは又僞善であり、心なき業である。我々は斯かる場合に於いては、寧ろその謙遜よりもはるかに矜恃を愛するものである。衆目の前にかゝる謙遜がかゝる矜恃よりも美德として迎へられるのは歎ず可きである。此處に甲はよく自から誇るに關らず、それはすつきりとして厭味なく、乙は常に自から遜るにも關らず、きざであり厭味であると云ふが如きは我々の往々目擊する所である。かゝる場合甲の誇りは乙の謙遜よりも心情的に純であることが多い。我々の謙遜は特に是等の厭味を伴ひ勝ちな德である事を忘れてはならない。不純な謙遜程臭氣ある、高貴の德に反するものは少ない。無邪氣に誇る者には其處に人間的な美と天眞とが現れるけれども、不純に謙遜なる者には一種特別な卑しさが現れる。故に更らに一般的に云へば矜恃に伴はれ

ざる謙遜は卑しむ可きである。他人から非難された時に、自から省みてその非難が當つて居る事を認められない時、心から是れに服する事が出來ないにも關らず、たゞ『自己の不德である』と云つて、只管謙遜するが如きも是れである。もとより心から斯く感じられる場合は別であるのは云ふ迄もないが、自己の衷なる矜りは是れに服して居ないにも關らず、たゞ總べてを自己の非としてひたすら謙遜し、謝罪するのは陋である。それは自己に不忠實であり、眞理に不信であり、人格の尊威を傷つける。然もその謙遜に或る不純なる意識が伴つて居る場合は尙更陋である。例へば我々が他人から非難されて、ひたすら謙遜する場合は衆目にその非難者よりも自己を有德であるかの如く印象せしめるであらう。殊にその非難が當つて居る點が多く、之れを辯護することは自己の不利益となる時に、事實を明瞭にする事を避けるが爲めに卽ちその非難の當然な部分と不當な部分とを曖昧にして、ひたすら謙遜する事に依つて、その當然の部分をも、非難者の過失であつたかの如くに印象せしめんとする事も亦あり得るであらう。かゝる謙遜は最も卑しむ可きである。自分は寧ろ自己の服し難きは飽く迄も辯護し、事實を明らかにし、自己の人格の尊威を護る道を尊しとする。もとより自己の不德は不德として飽く迄も正直に認めなければならない。併し吾々の過失や不德にも亦その依つて來たる動機、及びその既に犯されたる不德や過失に對する淨めと、償ひとの態度に於いて、その人の人格の價値は一層はつきりと現れる事もあり得る。況してそれ等の過失や、不德に對する非難が初めより當つて居ない場合に、尙且つたゞ自己の不德として謙遜し、謝罪するが如きは卑しむ可きである。最も卑しむ可きは最早や自己に對して何等の誇りをも持たない謙遜――といふよりも自棄である。幇間や、奴隷や、或る種の藝人や等は是れである。自分は眞宗の或る種の人々の如く自己を徹頭徹尾惡人としてその靈魂の中に聖靈或ひは善に對する何等の傾向を有せざるものとなす者をも此の類に數へたい。斯くの如きは高貴の德と最も矛盾せるものである。併し是等は謙遜と云ふよりも自棄若しくは自瀆と云ふ可きであつて、謙遜の概念から寧ろ除外して、後に讓るを適當するであらう。

裏ぎりに就て

總べての裏切りは卑しむ可きものである。裏切りとは他人の信に對して自己が責任があり乍ら、自ら止むを得ざる事情なくして、その信に反する行爲をなす事である。此處に止むを得ざる事情

こいふのは、不可抗力及びより深き道德的理由を指すのである。例へば總べての破約は自己に責任がある相手の信に反する行爲であるが、それが自然の不可抗力や或は約束の內容が不合理であつたために、止むを得ず實行不可能となつた場合は別としなければならないからである。其他の場合に於いては、總べての破約は裏切りの一種である。裏切りが卑しむ可きものとなる理由はそれが特に他人の自己の人格に對する尊重を自から傷つけるものとして、畢竟自己の人格の尊嚴を傷つけるものである上に、更に又一般に人格そのものゝ尊嚴を傷つけるからである。卽ち此の世界に於いて、人格は信用さる可きものであるこの觀念を損ふからである。既に信用こ云ふ對人關係の成立し得て居る事は人格の尊嚴を豫想するものであつて、それ自身に祝福さる可き一つの事象である。我々は裏切りに依つて、他人を傷つけ、自己を瀆すのみならず、又此の有難き事象を滅すのである。此處に二人の盜人があつて、共に窃盜し一人が捕へられたとする。その時若しその盜人が仲間を賣るならば、それは仲間の信を裏切つた者であつて、その窃盜それ自身よりも遙かに卑しむ可き行爲である。更らに卑しむ可きは、その仲間を賣る事に依つて、その者の刑罰を免ずる事を餌として犯罪者を揚げんとするが如き行爲である。裏切りは其の相手の自己に對する信用を、始めより裏切らんとする意志を以つて贏ち得たる時に於いて一層卑しむ可きである。例へば男子が初めより、弄びたる後棄てる事を意識し乍ら、結婚を約束して女子を誘惑するが如きである。又探偵や、間諜や、所謂犬の如きも亦是れに屬する。是等はたとひ其の目的が善なる場合に於いても、そして相手が惡人である場合に於ても、相手をして信用せしめ、初めより裏切る事を意識して爲す裏切りであるが故に甚だ卑しむ可きである。自ら此等の者となる事も、又此等の者を使用することも共に卑しむべきである。從つて此等の者を使用する總ての陰謀的政治や、戰術や、警察は卑しむべきである。賣國奴の如きも此の種のものに屬する者であるが、裏切りはその相手と及びその目的とが、『公』なものである場合よりも、『私』である場合に於て、特にその個人的なる關係が人倫の最も密にして、且つ本來信の上に立脚するものである場合に於て、特に卑しむべきものとなる。その師を裏切つた不信の弟子ユダが特に輕蔑されるのはその爲である。その君を裏切つた不忠の臣九太夫が特に卑しまるゝのも其爲である。師弟、君臣と云ふ人倫の關係は、總ての人倫の關係の中その本來の性質上最も信を要求するものであるからである。我々は死屍に對して特別な寬大の念を有する東洋の傳統の中に育ち乍らも、あの忠臣藏の七段目に於て、

由良之助が九太夫の死屍をのゝしり乍ら打擲する時に心ゆく思ひをするのである。それは打つ者が特に由良之助の如き君に對して最も信なる人格であるからであらう。しかし乍ら我々は如何なる場合に於ても、相手と目的との如何を問はず、裏切りをそれ自身に卑しまなければならない。相手が惡人であると云ふ事、又裏切りの目的が善であると云ふ事は裏切りそのものを是認する根據とはならない。裏切りを意圖して居るものを我々が發見した時、我々がその裏をかいて裏切り返へしてやる時に、特に復讐の痛快を感ずる。然し乍ら此れは相手が裏切られるに相當したものであると云ふ故を以て、自分の裏切りを是認せんとするものであるが、しからば相手も亦自分を裏切つてもよかつた者であると考へた時に、我々は如何にして此れを否定し得るであらうか。此の際相手は恐らく苦笑し、且つ恥ぢるであらう。然しその恥ぢはしくじつた事へまであつた事に對する恥ぢであつて、道德的の羞恥ではない。その苦笑は相手も亦『なかなか喰へない。』と云ふ苦笑である。換言すれば互にその裏切りを是認し合ふて、只相手にしてやられた事に對する皮肉と滑稽とを意味する苦笑である。相手は確に復讐をされた。然しそれは相手に裏切つても差し支へないと云ふ是認と、一層巧みに裏切らんとする警戒とを與へる點に於て更らに一層罪惡であ

る。

卑怯に就いて

卑怯とは道德的にかくなすべきであると知り乍ら、自己の利害の爲に、若しくは勇氣なき爲に敢てなさざる事である。前に述べた如く、天の使からも地獄の囚人からも共に輕蔑さるゝに相當したものである。國家や、長上や、權力者に對し、自己と利害關係ある者に對し、その不正なる意志に服從し、若しくは敢へて逆はらざる立場に自己の安全を守る者は卑しむべきである。自分は特に群衆に對して、時代の潮流に對して、反抗し得ざる怯懦を卑しむ。自ら群衆と潮流とに逆ふべしと信じて逆ひ得ざる怯懦のみならず、自己の思想を知らず識らず此等と順應せしめて、自己の本質を固持し得ざる弱さ、若しくは輕さをも亦卑しむ。總ての戰ひに於て公明正大に戰ふ事能はずして陰謀や、中傷や、總べて裏面より相手を陷し入れんとするものは卑怯である。又自分が何れかの一方に加擔すべき立場にあり乍ら、自己の安全の爲めに中立を守り、或は形勢を觀望して何れか優勢なる方に味方するが如き、例へば關ヶ原の役に於ける小早川秀秋の如きは卑怯

である。是れを初めより勝敗の數既に定れる弱者若しくは少數者に、正義の爲めに味方する者と比べる時、その人格の尊卑は思ひ半ばに過ぎるであらう。自分は又自分が稱讃すべきと信ずる者若しくは非難すべきと信ずるものを他人の思はくをはゞかつて、敢へて稱讃若くは非難し得ざる者、例へば文壇の或る種の批評家の如きをも此の種の卑怯者の中に數へたい。總べて負ふべきものを負はざる者は卑怯である。自己の過失や、罪惡の責任を廻避するものは卑怯である。殊に自己の罪惡が自己にも他人にも既に明白なるにも關はらず、たゞ證據なきが故にのみ、之れを非認する者は最も卑しむべきである。我々はその者が罪惡を犯せる事が火を睹るより瞭らなるにも關らず、たゞ證據なきが故にその人を責める事が出來ない。若し責めればその人は自己の良心の聲を無視して、他人に汚名を負はしむるものとして、逆捩ぢを喰はしめるのである。かゝる卑怯者は卑しき者の中にても最も卑しきものゝ一である。又反對に他人がその罪惡を懺悔した時に、それを利用する者も亦最も卑しむべきものゝ一である。又相手の不正を義しく憎み得ず、その現在の苦しみを憐れむ餘り、或ひはやがて起るべき相手の苦痛をいたはるあまり、此れに正しさを負はしむるに堪へない「同情」をも亦卑しむ。此の種の同情は一種の卑怯であつて、彼のツアラツストラの最も卑しんだものゝ一つである。此等は總て闘ふべき時に闘はざる卑怯である。ダンテはその地獄の旅を初める首途に於て、その旅程の艱難に對する覺悟と共にその目擊すべき囚人の不幸に對する同情に對して又決心をした。卑怯とは總て性格の弱さである。自己の利害の爲のみならず、相手に對する憐憫や、同情や、好々爺的人情や等との闘ひに於て、弱きことも亦卑怯である。此の種の卑怯は特に慈愛深き者に於て誘惑となる。涙脆く、情實に捉はれ易く、自己の正善と信ずる事を決行し得ずして、相手をして不正なる、若しくは低卑なる立場より離れて、正しきに就き高きに登らしむる勇氣なき事は、畢竟人格の尊厳なき處に起因する。相手をして負ふべきものを負はしむるに堪へざる總ての人間的なる同情は、人格の尊厳よりも目前の感傷を重んずるものであるが故に卑しむべきである。從つて拒絶すべき事を拒絶し得ざる事も、要求すべき事を要求し得ざる事も共に卑怯である。我々は惡魔を拒絶し得ざる場合のみならず、善魔を拒絶し得ざる場合も亦卑怯である。而して後者は前者よりも我々にとつて一層深き闘ひを要する。我々は權力を以て脅す者を拒絶し得ても、涙を以て哀願する者を拒絶する事は難い。しかも我々が道の上に立つて嚴肅なる時、我々は後の者をも拒絶しなければならない。故に惡魔がすぐれたる求道者

を誘惑せんとする時は常に善魔の形をとる。傳說に云ふ、日蓮が身延山にその聖地を選ばんとする時、惡魔は老いたる親の形を現じてその恩愛と窮狀とを訴へて、孝心深き日蓮を哀願を以て退轉せしめんとした如き此れである。威を以て嚇し、利を以て誘ふ事能はざる者に對して、涙を以て訴へる事は最も有利なる手段である。其の最も狡猾なるは、相手の義氣を見込むで、哀願する事である。抑々義氣とは卑怯の反對である。故に義氣あるものは哀願されたる事を拒絶する事を屑しとしない。殊にそれが自己の利害を犧牲にする事を要求する場合に於て、猶更らである。故に假令依賴されたる內容が惡なる場合と雖も、自己の利害を恐るゝ卑怯者たらんことを避けんが爲に、敢へて此れを引き受ける。かくの如き心理を利用する者は最も卑しむべきであるが、此れを拒絶する動機が自己の利害を恐るゝ爲でなくして、その內容が善でない爲であるにも關はらず、卑怯者と思はるゝことを恐れて、敢へて拒絶し得ざる事は又卑怯である。反對にその動機が利害を恐るゝ爲であり乍ら、その拒絶の理由を內容の惡に藉るものも亦卑怯である。併し乍らかの俠客が弱きを助けて强きを挫き、俠氣を以つて惡しき權力に對して自己の利害を犧牲にして、危險を賭して戰ひたるが如きは、勇氣ある者と云はなければならない。その反對に自己の權力を恃み、弱者に對して暴威を逞しくする事は卑怯である。最も卑しむ可きは虎の威を借る狐の如く、自己が無力なるにも關らず、他人の權力を傘に着て、始めより殆ど抵抗力なき弱者に對して慘酷に振舞ふ事である。總べて上に媚びて、下に傲なる或る種の官吏の如きも之れに屬する。

又自己の生命の慾望を主張する事に勇氣なき者も亦卑怯である。他人に嫉まれる事を恐れ、他人に負ふべき苦しみを負はしめるに堪へ得ず、自己の光輝と幸福とを餘りに眩ぶしがつて、自我の成長と發展とを躊躇する者も亦卑怯である。此の種の卑怯には人間らしき、美しさを伴ふて居る事は事實であるが、其の爲めに我々は此の種の卑怯を見逃してはならない。況してそれを美德と考へてはならない。此の種の性格の弱さは人格の尊威の爲めに、自我の生長の爲めに必ず克服せられざるべからざるものである。自我の生長は我々が神と自己とに負ふて居る義務である。自我の慾望はそれが正しきものである限り、飽く迄も積極的に解放追求されなければならない。他人が病氣なるが故に踊らず、他人が醜き故に自己の美を磨かず、他人が才能なきが故に自己の才能を發揮する事を遠慮するが如きは、たゞにその人の心臟が弱い爲めばかりでなく、又自己の人格に對する尊重の念の缺乏せる者であつて、又卑怯であるといはなければならない。

或る種の贅澤に就いて

常識が普通に贅澤と呼ぶところのものにも種々の差別がある。贅澤とは一般の人よりもより豐富なる物質的消費をさすのであるならば、それは種類の如何を問はず、社會主義的見地からの不公平、或ひは基督教的立場からの愛の不足に歸せしめる事が出來ると云ふ點に於て、一種の罪惡である。併しそれはその事自身に於ては惡なる動機を含むでゐるものではない。しばらく個人的、心理的立脚地より考へて見れば、我々が自分の生活の欲望を出來得る限り解放追求せむとする時、その要件たる物質を出來る限り多く必要として來る事は自然である。殊に我々の精神生活を盛り又生かす材料として物質を要求して來る事は當然である。我々の生活欲望の規模が大であり、精神生活の豐富さと洗錬さとの度が大である丈け、それを盛り、生かすための材料は豐富であり、且つ洗錬されたものである事を要する。此の意味に於て若し或る個人が一般の人よりも生活欲望の規模が大であり、その精神生活が豐富で且つ洗錬されてゐるならば、即ちその人の人格が衆にすぐれてゐるならば、一般の人よりもより多くの物質の消費を必要としてくるのは當然である。

此の意味の贅澤と雖も社會主義的或ひは基督教的立場からの批判を免れる事は出來ない。けれどもそれはそれ自身に於ては、即ち他との關係以外に於ては、惡しきものではなく、まして卑しむべきものではない。寧ろ地上の我々の生活があまりに物質的に束縛せられたるものである事を嘆ずべきである。實際此の種の贅澤に於ては、當事者は常に物質的過剩の意識の中に住んで居るどころではなく、寧ろ常に甚だしき物質缺乏の意識の中に住んで居るのである。しかも一般の人から贅澤として非難される時に彼れは二重の苦痛を感じなければならない。例へば一人の趣味のすぐれた婦人があるとする。彼女がしばらく他との關係及び物質的束縛を度外視して考へる時、自分を美しく飾り度いと願ふのは、それ自身に於て惡しき事でない許りでなく、むしろ願はなければならない事である。故に彼女が自分の個性の美を出來得る限り生かすために必要な衣裳や、裝身具を心に描き、此れを獲たいと願ふのは當然である。自分は此の事は天國に於ても許されなければならない事であると信じる。しかし乍ら實際に彼女が撰ぶ事の出來る範圍は自分が理想とする所の物質約範圍より比較にならぬ程狹く、自分が獲得し得る限界は猶更ら遙かに狹い。かくて彼女は自分の理想に比しては比較にならない程貧弱にして不適當なる衣裳と裝身具とを以て、せめ

て自分を飾つてゐるのである。彼女の心は不滿と缺乏とに滿ちて居る。然も一般の更らに物質的缺乏を告げて居る人々からは此れを贅澤として非難されるのである。我々は此の場合それがどの點に於て非難に價するかを明瞭に辨別しなければならない。非難に價するのは彼女が自分を飾らむとする欲望ではなく、その爲に必要な物質を獲むとする意志でもなく、彼女の實際に獲たる物質の量と質そのものでもない。それ等はむしろ善である。當然であり、氣の毒である。非難に價するのは彼女がそれを得る爲になさねばならない、他人への愛と奉仕との懈怠、もしくは積極的に他人に負はしむる勞苦にある。即ち他との關係に於て、惡となるのである。例へば自分が妹を贅澤であると云ふ故を以て非難する時に、彼女はそれが自ら感じて居る意識に對してあまりに相反である爲に、不思議な表情をする。彼女は常に物質的缺乏を感じ、自分が現在飾つて居るところの衣裳や裝身具は自分の趣味に適せざるものであつて、それを身につけて人の中に出る事を、殊に趣味のすぐれた人の前に出る事を恥ぢてゐるのである。それを自分が氣に入つて身につけてゐるのであると思はれる事を、それに依つて自分の趣味を測られる事を堪へ難い苦痛と思つて居るのである。しかも他人からも、兄からも贅澤であると非難される時、彼女が意外に感じる心理は肯

くことが出來る。それは彼女の得てゐる物質の量と質とに依るのでなく、それ丈けの物質さへ他も人の勞苦を犧牲にせずしては得られない程我々の生活が物質的に束縛されてゐる處から生じる關係的な不德である。此の意味に於てはそれ自身非難に價する贅澤は物質の量及び質に依るのではなく、如何なる精神を以て、その物質の量と質とを要求するかの點になければならない。その精神が正しい時本質的に非難さるべき贅澤と云ふものは存在しない計りでなく、其處に存在するものは缺乏の意識のみであつて贅澤の意識ではない。此の意味に於ては贅澤と云ふものは何處にも存在しないと云つていゝ。又必ずしも或る精神生活の理想を盛る爲に必要なる物質でなくても、我々の無邪氣なる生活欲望を生かす爲の材料としての物質を如何に豐富に且つ選擇して求めても、それ自身に於て罪惡ではない。例へば子供がその遊戯に必要な玩具その他の物質を要求するが如く、我々が眞に無邪氣に我々の「試み」や「遊び」をなさむが爲に必要なる物質を求むる事もそれ自身に於ては非難に價しない。バベルの塔を築かむとする試みがもし無邪氣な試みであるならば、それが如何に多くの物質的材料を要求しても、それ自身に於て非難に價しない。常識が一般に贅澤として非難するものゝ中にはかくの如き精神生活を盛る爲の物質的材料及び無邪氣なる生活

欲望を生かす爲の物質的材料を豐富に且つ選擇して獲得使用する事を意味して居るものも多いことを知らなければならない。併し乍ら此等はそれ自身に於ては善なるもの、我々の生活内容そのものであつて、非難に價しないのであるが、只他との關係に於て經濟的に罪惡となるのである、凡そ經濟的罪惡は凡ゆる罪惡の中にてその他人の不幸を生み出す結果が大であるにも拘はらず、最も本質的に輕きものである。我々は結果の大小を以て罪惡そのものゝ質を計つてはならない。此の種の贅澤は實に同情すべき、少くとも許し易き罪惡である。此の種の贅澤に對して裁く心のあまりに鋭敏である者を自分は寧ろ吝であるとして卑しむ。かゝる人にはそれを裁く原因に嫉妬や、羨望や、其他の、贅澤よりも一層低卑なる動機を含むのが常であるからである。併し乍ら贅澤には此の種のもの許りではなく、それ自身に於て非難さるべき贅澤がある。それは非難さるべき精神内容を生かす爲の物質的材料を豐富に且つ選擇して獲得使用せんとする贅澤である。即ちそれに依つて眞價なきものが自己の價値を他人に印象せしめむとする虚榮心や、下賤にして醜惡なる欲望を滿足せしめんがため、或ひは物質を最もよく生かさんとする意志を缺いだ浪費より生ずる贅澤はそれ自身に非難に價する。此の種の贅澤こそ我々が最も正當に、從つて最も峻嚴に擯斥すべきものである。彼の所謂成金がその自己の功績に依らざる偶然に依つて獲得したる、或ひは落ち込んで來たる富を以て、出來得る限り自己の下賤なる趣味と醜惡なる欲望とを滿足せしめんが爲に、如何にも露骨にあくどく、出來得る限りの物質的材料を使用し且つ物質に伴ふ權力に依つて自己の人格の無價値を掩うて價値あるものの如く無理强ひに印象せしめんとする愚智と圖々しさとは顰蹙すべきである。況して此の種の贅澤には一層本質的な罪惡、即ち他人の人格を物として取り扱ひ、物的價値を以て人格價値を蹂躙する事を伴ふのを常とするに於て猶更である。彼等が傲然と振舞ひ、すべての價値を金に換算する事が出來るかの如くに偕し、如何なる人格も利を以て誘ひ匍伏せしめ得るかの如く思ひ上がるのを見る時、誰れか輕蔑と反感とを感じないでゐられよう。それは彼等の占有する過剩な物質が他の民衆の缺乏の原因となると云ふ經濟的原因のみで非難に價するのではない。それ以上の本質的非難に價する。我々は彼の聖德太子の如き天輪聖王や、堯舜やダビデの如き明君が、如何に壯麗な宮殿の中に住んで居ても、これを本質的には非難しない。ロダンやゲーテの如き天才の趣味生活の所謂贅澤は勿論、玄宗や文左衛門の如き帝王らしき豪奢や、長者らしき風流や、更らにクレオパトラや楊貴妃の如き美人らしき驕奢や、更らに

下つては俠客や、若旦那や町娘の伊達と粋より生ずる物質的撰り好みや、職人氣質より生ずる凝り性の乙と云ふが如き趣味に對しても、それ等が如何に物質的材料の豊富と選擇とを要求しても、其處に盛りこまれ、生かされて居るこころの精神内容が價値を持つてゐる時には本質的に此れを非難しない。出來得る限りは寛大に、鷹揚に、大目に見のがすこそ一種の高貴の德であつて反對に吝臭く穿鑿的に詮議立てして、非難する心こそ寧ろ隘吝であると云はなければならない。けれども其處に何等の精神的價値が生かされないのみならず、下劣な、無作法な欲望が露骨に我々の認識を强制するが如くに現はれて居る贅澤は卑まないわけにゆかない。併し乍ら此れはまだ贅澤の最も賤しむべき種類のものではない。最も卑しむべき贅澤は、それ丈けの大なる規模も抱負もなく、物質的に貧弱であり乍ら、併も心中に於ては成金的贅澤を夢見て居る處の人格的の賤民が、平生は趣味あるものゝ所謂贅澤をも鵜の目して非難しておき乍ら、やゝ裕福となるや、その云ふに足らざる程の自己の裕福振りを他人に示さむ爲に、殊に自分よりも貧窮なるものにこれを誇らんが爲に爲す處の贅澤である。自分の知つて居る或る小官吏が或る會社に轉職して小金を貯め、やゝ「まはり」がよくなつた時、夫婦揃つて大島の羽織を着て、その羽織の裏を故意にめくつて見せ、又わざと車を連ねて貧しく暮らしてゐる鄰黨の小學教師の家を訪問し、その贅澤振りを見せつけたのを知つて居る。併も一方俥夫の賃金を苛酷に値切るが如きはその卑しさに於て成金の贅澤の比ではない氣がする。豊かならざる者が贅澤をなさんと欲して種々な無理を企て、あせつて居る姿程淺ましいものは少い。斯くの如くならば節約して暮し乍ら、心に餘裕ある者の方が如何に貴いか知れない。人格の品位を維持するに必要なる心の餘裕を保たむための節約は愛のための節約と共に實に貴い。かゝる贅澤者はかゝる節約者のために却つて憐憫せられるのである。かくの如き種類の贅澤者は心中に「美」に對する感覺を持つて居ないものであるが故に、彼等が美を求めるがために誤つて贅澤となれる人を非難する資格はないと云はなければならない。かくの如き種類の非難者が如何に世間に多いかを知らなければならない。贅澤の非難者が非難さるゝ贅澤者よりその心情に於てより卑しく、彼等の非難は只贅澤をなし得ざるがために生ずるに過ぎない場合が如何に多いかを思はなければならない。他人の贅澤を非難する資格あるものは己れが贅澤をなし得る境遇となつた時に、贅澤を爲さゞるものでなければならない。眞の意味の聖貧の人のみこの資格を持ち得る。しかも聖貧の人は自から貧しく暮し乍ら他人の贅澤を嚴しく裁

かないのを常とする。その嫉妬や、羨望や、樂欲より淨められたる心は、自ら囚縛せらるゝ處なくして衆生に對し得るが故に、その凡ゆる多樣なる生活の相は觀照と憐憫の對象となつて映じるのである。聖人が帝王や、長者や、女人や在俗の凡ゆる者と愛を以て結緣し得て併も此等から自己の誇りを傷けずして喜捨をうける事が出來たのはその爲めである。自分がかく云ふのは素より贅澤を正しきものとして肯定するのではない。凡ゆる贅澤は盡く罪過である。只その罪過にもそれが罪過である所以をなす原因と、その罪過の重さの度合とは多樣である。そしてその原因と重さとの如何に關はらず、これを非難すると云ふ一つの行爲は別の原理に依つて評價されなければならないと云ふのである。

贅澤が卑しむべきものとなる特別の場合はそれが吝嗇と結合して現はれる場合である。贅澤はそれが物質に對する無頓着と結合して居る場合には無欲の一つの現はれとして或る無邪氣さ、若しくは淨さをさへ示す事がある。此れに反して物質に對する意識的なる執着と結合して居る場合にはその贅澤を實に卑しきものとなすものである。例へば一人の貴婦人があつて彼女は其服裝や、調度や、總てそれが自己に屬するもの、就中自己の虛榮心の滿足に役立つものには出來得る限り

贅澤であり乍ら、他人に對しては、殊に召使や俥夫や等の身分低き者に對して著るしく物惜しみする場合の如きである。此の二つの相反する贅澤と吝嗇との結合は一つの卑しき心の二つの異なりたる現はれ方にすぎない。所謂贅澤なる人にはかゝる吝嗇なる人が思ひの外多いものである。眞の慈善家は盡く質素な人である。身分不相應な贅澤はそれが他の方面の吝嗇と結合し、且つ不釣合な趣味を伴ふて居る時には實に卑しむべきものとなる。自分に相應しき服裝をして居れば、充分に我々の愛を惹くに價する美くしき女が、只不釣合に贅澤な服裝をしてゐる丈けで、顰蹙せしむるものとなる場合は實に多い。物質は畢竟「こゝろ」を象徴化する手段に過ぎない。その「こゝろ」が美しきものでないならば、如何なる物質も用を爲さないのみならず、それは不釣合としての積極的な一つの醜である。素よりその「こゝろ」の美にも無限の段階がある。藥師寺の吉祥天の服裝の美くしさは、一人の小間使の服裝の美くしさよりも高いと云はなければならない。併し一人の小間使の小間使らしき美を現はせる服裝は、その忠實さと甲斐々々しさと、主人思ひの捧げた愛さ、行儀良ささを最も良く現はした服裝は、我々の愛を惹く丈けの充分な價を具へて居る。女運轉手や、女曲藝師の服裝でさへもそれがしつくりと釣合つて居る時には我々の愛の惹くに充分であ

る。美はそれ〴〵の階段に於て皆美である。併し令孃らしく見せんとする小間使や、女優らしく見せんとする女曲藝師は我々をして顰蹙せしめずにはおかない。換言すれば物質はそれが『こゝろ』の役となれる限りに於て、效果を以て生かされたる限りに於て、即ち精神的の價値の創造に役立ちたる限りに於て、本質的には（他との關係以外に於ては）消費者に相應しいと云つていゝ。眞の意味の經濟的公平は各人がその生理的必需を保證されたる上に於て、その物質を生かし得る能力の度に從つて物質を與へられる事である。素より各人が此れを生かし得る最大限度迄物質を與へられる事は（天國に於ては此の事は可能でなければならない。）地上に於ては不可能であるが、その能力に比例して與へられる時、それは公平であつて、リツプスも云ふ如く、或る人が或る人より、より多くの物質を與へられてもそれを何人よりも最もよく生かし得てゐる限りは贅澤ではない。素より如何にして、その能力を測るべきかの方法が發見されない限り、一般の制度としてはかゝる標準を用ゐる事は出來ないのであらう。併し我々が他人の物質的使用に對して、是非せんとする時には、此の標準を念頭に置いて評價しなければならない。併し乍らより高き精神的價値を生かすのに必ずしもより多量の物質を要するものではない。キリストの人格の美を生かすには、帝王の服裝は相應しくない。モナ・リザの美を生かすにはサスキヤの服裝は相應しくない。併も前者は後者よりも高き人格と美とをより乏しき物質的材料を以て生かしたものである。故に我々は出來得る限り少量の物質的材料を以て、出來得る限り高き段階の美を生かす事を理想とすべきである。此れを要するに凡ゆる贅澤は盡く罪過である事を免れないが、その罪過を特に卑しむべきものとなすものは、經濟的原因に非ずして、その贅澤に結合して現はれる他の心情の卑しさである。自分が此處に特に取り扱ふ事を目的としたのは此の種の贅澤である。即ち虚榮心と僭習と、無智と、最惡の場合は吝嗇と結合せる贅澤は高貴を願ふものゝ、潔癖を以て排斥しなければならないところのものである。

隘吝に就いて

隘吝は贅澤の反對である。人格を卑しくする點に於ては贅澤よりも一層厭ふべきものである。贅澤には積極的意義がある。併し隘吝は生命の價値を創造せんとする積極的な意圖なく、只消極的に働くのみであると云ふ點に於て、徹頭徹尾價値を有せざる不德である。隘吝は總て生命の價

値を見出し得る處にその價値を否定せんとする心である。抑々生命はそれ自身積極的或る者である。故に總てのものを、其處に特別な抵抗なき限り、此れを積極的に見んとする事は凡ゆる見方の根本的約束でなければならない。故に我々は一つの人生の事象に對する時、出來得る限りはその中より價値を發見せんと努めなければならない。此れに反して出來る限り價値を否定せんとして、若しくは特に醜を發見せんとして臨むものは隘客である。我々が白紙の如き何等の先入主なき心を以て對する時は、我々は人間の本能としておのづから積極的な見方をなすものである。見方が消極的であるといふ事はすでに不自然であつて何等かの成心ある證據である。此處に美と醜との混淆せる事象に對する時、我々は出來る限り美を生かし、その醜をも美と觀じ得る最善の努方を拂ふべきである。素よりかく云ふのはその美を不純なるまゝにて看過せよと云ふのではない。その批判はあく迄も峻嚴でなければならない。併し其處に寸毫でも美を逸し、或ひは我々の見方の深さに依つて美と成り得るものをも、醜として捨て去る事は單に我々にとつて損失であるのみならず、何者かに對する罪過である。例へば此處に一つの殺人があつたとする。此の時、それが殺人であるが故に罪惡であると云ふ見方のみをすれば、それは何處迄も罪惡である他はない。併し若しその殺人が決鬪に依るものであつて、彼れがその侮辱からその純潔なる矜りを傷つけられた爲めに、相手を倒したものであるならば、その殺人は假令罪惡であることは免れなくても、其處には自己の矜りを尊重する人格の善を發見することが出來る。その善に依つてその罪惡を異りたる觀點から眺める事に依つて、その罪惡を幾何かの程度に於て赦し易きもの、神の憐れみを受け得るものとして取りなす事が出來る。凡ゆる惡はかゝる見方を以て辯護されなければならない。フランチエスカとボーロの姦淫や、石川五右衞門の偸盜や、ノラの文書僞造や、お七の放火や、此等は其處に善と美とを發見せむとする瞳を以て對する時には、如何に多くの我等の愛を惹き得るものを見出し得るであらうか。否、假令動機に於て善を含まざる過失或ひは罪惡より生じたる行爲と雖も、例へば「復活」や、「新生」の主人公の如き罪過の如きも、其後の淨めと償ひの態度をも合はせ見る時、其處に反つて人格の善を見出し得る場合もある。凡そ我々を感動せしめる人間的なる善と美とは寧ろかくの如き見方に依らずしては發見し得られないものである。天使らしきものゝ外の善は多少とも罪過を含むでるないものはないからである。素より我々は天使らしき善と美とを求めなければならない。人間らしき善と美とに對する時それを天使らしき善

と美に依つて測ることは素より必要であるが、其處に天使らしからざる故のみを以て、善と美とを見出し能はざることは隘である、かゝる見方こそ天使らしからざるものである。天使は自ら淨くしてしかも他人の罪過を赦し易きものでなければならないからである。他人の罪過を發見する時、出來得る限り此れを苛酷に裁き、黑く塗り立てむとする心は實に卑しむべきである。それはその人が己れもひそかにかゝる罪過を犯し、若しくは偶然犯さずにすむで居るに過ぎない場合に於て、猶更らである。多くの場合かゝる隘吝は又無恥と結びついて居ると云つていゝ。自分は他人の罪過を裁くに隘吝なることを自己の善行の條件とせずにはゐられない一切の善行者を卑しむ。

他人の罪過に就いて過酷なる場合のみならず、他人の名聲や、富貴や、才能や、美貌や總て他人の幸福に對し嫉妬し甚だしきは呪詛する事は又吝である。此れは他人の幸福を祝福する事が出來ないと云ふ點に於て吝であるのみならず、他人が幸福なる事に依つて自己の幸福がそれ自身に於て減ぜず、又他人が不幸となる事に依つて自分の幸福がそれ自身に於て增さないにも關らず、只他人の不幸を希望すると云ふ點に於て　全然消極的な吝である。自分が不幸である時に他人の幸福を祝する事が出來ず他人が幸福である事が自分の損失であるかの如く、甚だしきは罪惡でさもある

かの如く考へるのは隘である。自分が病氣である故を以て健康者が舞踊する事を咎め、自分が醜きが故に美人が飾ることを妬むのは吝である。總て他人の幸福を祝福せずして此れに「けちつをけ」ようとする心は卑しむべきである。かゝる隘吝なる人々に依つて醸さるゝ空氣は凡そ美なるもの、强きもの、大なるものの誕生と生長とに適せざるものであつて、その世界は健全なるものをして窒息せしめる。若し高貴を願ふ人格を持つ者が自ら幸福であるならば、前に述べたかかる隘吝なる者に掣肘さるゝ事なく、遠慮する事なく、勇敢に自我の生長の爲めに前進しなければならない。若し不幸であるならば、自分の不幸を勇ましく忍受し、此れを負ひ、その運命を生かす道を工夫しなければならない。かゝる人は他人が自分に對して遠慮する事を却つて悅ばず、憐れみをかける事を屑しとせず、況して他人の幸福を羨望し、嫉妬してゐるが如く見なさるゝ事を堪へ難き侮辱と感ずるのを常とする。自分は幸運にあつて同情に負けずして、前進し得る者を尊敬すると共に、不運にあつて羨望に打ち克つて自己の誇りを保ち得るものを賞讃する。此兩者とも人間性の克服である。共に英雄的である。而して後者はその逆境を忍受する點に於て一層同情に價する悲壯である。不幸なるものは羨望し、幸福なる者は遠慮する世界は創造と生長とを阻む隘

客と卑屈との濕地であつて、健全なるものゝ住むべき、自由の太陽の照らす天地ではない。或種の思想家や、藝術家の如く、不幸な境遇にあつてその運命を生かさむとする處より生れたる思想や、作品にあらざれば、好意を持ち得ず、偉大なるものは必ず苦痛と不幸の中より生れなければならないとなすが如きも隘客と云はなければならない。自分は悲哀と不幸との逆境にあつていかにこの隘客と鬪つて來たであらう。苦痛を通じての幸福のみならず、天來の幸福は更らに價値あり、不幸との鬪ひに於ける偉大のみならず、彼の太陽の如く光輝あるそれ自身積極的なる偉大は更に賞讃すべきである。ベートーフエンの音樂と共にモツアールトの音樂は偉大であり、キリストの生活と共に釋迦の生活は偉大である。順境も逆境も幸福も不幸も此れに處し此れを享くる心が高貴であるならば共に價値を持ち、偉大を生み得る。

他人の罪過や、幸福に對してのみならず、凡そ「積極的なるもの」に對して好意を持たざる心の傾向は總べて隘客である。祝祭や、儀式や、遊戯や、催しや、總べて人間の生活を豐富に、快活に、悅び多く、生き生きさせる處の一切の積極的なる企てはそれ自身に於いては尊重すべきものであつて、其處に特別の事情なき限りは、此等のものに對して積極的なる衝動を持つのが自然であり、此れを祝福する心を用意してゐなければならない。素より是等のものは他の一層重大なる或ひは急を要するものに對して處を讓らなければならない。併し乍らそれは價値の優先を讓るのではなく發現の機會の優先を讓るのである。順序上先きにしなければならないものが、必ずも し價値が高いのではない。ましてそれ自身に於て輕んぜらるべき何等の性質を持つてゐるのではない。自分は彼の報德教や、簡易生活の主張が此の順序の前後の問題以外に此等の積極的なるもののそれ自身を排斥せむとする主張を含むでゐるならば、何處迄も此れに反對するものである。例へば婚禮や葬式の儀式を只冗費をはぶかむとする故を以て、出來る丈け簡單にし、或ひは省略するが如きは、それが止むを得ざる事情の下に深き愛惜を以て、爲さるゝ場合の外自分は此れに賛成する事の出來ないものである。我々は出來得る限りは目出度く婚姻を祝し、嚴かに葬式を送るべきである。我々が花嫁と花婿との交契の記念や、死者の靈魂を葬る爲めの儀式をさへ贅澤として排斥しなければならないとすれば、此の世界は如何に干乾びた慘めなものであらう。かゝる世界は只それ丈けを以て如何に生き甲斐なき、住むに價せぬ世界であるかを證據立てゝゐると云つていゝ。總て催しや、遊戯や、試みはそれが我々の生活の欲望を盛り、生かしてゐるものである

限り、それ自身積極的價値を持つてゐる。より高き生命價を有するものが、より高き價値を有するものであつて、それが物理的に或ひは因果的に豫件的であるか否かに依つて、その價値を測る事は出來ない。我々は礎を築かずして座敷を造る事は出來ない。故に先づ礎を築かなければならないであらう。併しそれは座敷が礎よりも價値がない事を意味しない。總て實利的なるものは遊戯的なるものより豫件的なものであるけれども、その生命價は後者の方が高いと云はなければならない。總てそれ自身に於て價値あるものと、功利的見方より生ずる價値とは別種の價値である。リップスも云ふ如く、固有價値と利用價値とははつきりと區別されなければならない。苟も固有價値を有するものは如何にその享受の機會乏しく、且つ多くの費用と深き鍛錬とを要し、遊戯的或ひは裝飾的なるものであつても此れを肯定せむと用意しなければならない。その用意を以つて人生の萬般の事象に對する時と、隘吝なる實用主義の矚を以て對する時とは、その豐富さと自由さと無邪氣さとに於て如何に大なる懸隔を生ずるであらうか。又他人の動作や感情の現はれ方に對して、その積極的なるものに對する貶黜或ひは不機嫌の感情を持つ傾向は又隘吝である。快活なるものを輕薄と、無邪氣なるものを無作法と、矜持を傲慢と、勇敢を粗暴と混同して、此等を嫌忌する事は隘吝である。自ら憂鬱にして慎ましきもの、或ひは謙遜にして物靜かなるものをその素質と趣味とから愛する事は素より差支へない。只その爲に他人の快活や、無邪氣や、勇敢や、矜持を肯定する事が出來ないのは隘吝である。廣くして自由なる矚を以て他人の人格に對する時、其處には實に限りなく多樣なる個性の特色があつて、それがそれぐに美くしく、我々の愛と興味とを惹き、かくて我々の交友は倦む事なき新らしき感興と刺戟とを與へられるのである。そのそれぐの持ち味に觸れる悅びは人生の幸福の最も深くして複雜なるものである。缺點を具へ乍らも、その人格の本質が愛すべきものでありさへすれば、凡ゆる個性が我々の好意を惹き得るのである。或種の惡人が只四角四面にして隘吝なる人物よりも我々の愛を惹き得るのはその爲である。例へば此處に春の庭に翼を擴げたる孔雀があつて、その絢爛たる尾を人の前に誇り示すが如き所作をなしたとする。其時我々は傲慢にして虛榮的なるものとして、嫌忌と輕蔑の情を以て顏を反けなければならないであらうか。隘吝なるものは、恐らくかく爲し、或ひはそれを以て反省と教訓との材料となすかも知れない。併し我々は心から見惚れてその翼を美くしと眺めることも出來るのである。又その誇りを無邪氣なるものとして愛とユーモアとを以て受け入れる事も

出來るのである。そして我々は後の態度を以て遙かに自然にして公けなるものと觀ずる。凡そ物の見方や考へ方の隘吝であると云ふこと程、人格の尊嚴を傷つけるものは少い。我々は驕奢であり、放逸であると云はれるよりも隘吝であると云はれる時、人格の矜りの傷つく事を感ずる。强き自我感情の痛みを感ずる。我々は特に隘吝を卑しむ東洋風の教養の傳統の血を受けてゐるものである。我々が英雄や豪傑をその多くの缺點や、罪過にも拘はらず、此れを愛するのはその爲である。凡そ隘吝の卑しむべきものとなる原因はその一切のものに對する消極的なる傾向にある。生命の價値に對して、本能の自由に對して、約言すれば凡そ自我感情の力の意識に關して消極的なる處に存する。即ち畢竟自己の人格に對する矜りの缺乏に存する。隘吝の最も極端なるものはかの吝嗇である。吝嗇とは凡そ物の消費に對する極端なる消極主義である。物の消費は生命の欲望の解放を意味する。人格の力の發動を意味する。少くともその條件である。故に吝嗇は凡そ生命の欲望の、人格の力の、發動に對する消極主義である。それは決して彼の多く利を獲て是れを蓄積し、出來得る限り此れを少しく消費せむと欲する守錢奴の貪欲と同一ではない。守錢奴はその所有を大ならしめる事に依つて人格の價値を大なるものとして印象せしめむとする誤まれる自我感情より生ずるものである。故に彼等に於てはその消費を吝むは多く利を獲むとする事と共に、出來得る限り所有を增大せむと欲する所より生ずる。此れに反して吝嗇とは徹頭徹尾消極的なるものであつて、それは只自我感情の力の缺乏である。大なる企業と冒險と競爭とに依つて多くの財を獲得し、又此れを消費せざらむが爲には如何なる罪惡も鬪爭も敢へて厭はざる守錢奴の勇氣の如きは吝嗇漢に望むべからざるものである。彼等は自己の所有に屬する極めて僅少なる財物を所謂爪の先きに火をともす如くに、極めて微量づゝ消費して、此れに執着するのみであて、何等積極的に企つる事なきものである。多く儲けて多く散ずるものゝ反對である。背越しの金を使はざる江戸兒氣質の反對である。此の吝嗇が快樂と結合する時その卑しさは一種特別な光景を呈する。彼等は出來る丈け少しく消費せむと欲するが故に、その享樂の材料となるものは矮少、低卑、粗惡なものとならざるを得ない。彼等はかゝる材料に未練がましく、戀着し、哀訴し、しかも出來る丈けの快樂を搾り出さむとするが故に、殆んど此れを嘗め、啜り、しやぶらむとするが如き醜態を呈する。彼等が人にかくれて、ひそかに耽溺して居る處の小さな陋室をのぞく時、我等は其處に人生と自我とに對する矜りの、慘めに、汚され盡くして居る光景を見るであらう。

大食若しくは貪慾に就いて

大食とは總て物的價値を、物的價値として、必要以上に追求する事である。即ち人格價値を蠱り、生かす爲めの手段として以外に、物的價値を追求する事である。人格價値は如何に追求しても追求し過ぎると云ふ事はない。故に人格價値の世界に於いては大食若しくは貪慾と云ふものは存在しない。併し物的價値の世界に於いては、それが人格價値の手段として以上にそのものとして追求せらるゝ時大食若しくは貪慾と云ふ一つの罪過が生じるのである。物的價値の基礎をなすものは總ゆる種類の快感である。精神的快感たると官能的快感たるとを問はず總て我々が快感を快感として求める事は大食の第一歩である。抑々快感は慾求を豫想するものである。快感なるが故に慾求するのではなく、慾求が充足された結果として快感を生ずるのである。故に快感そのものを慾求の對象となす事は本末を顚倒せるものであつて、それは人格價値を目的とせざる行爲であるが故に、その慾求が充足された時我々の人格は毫末も高められないのである。然もそれのみに止まるならば、それはたゞ無意味であるに過ぎないが、それは最良の場合に於いても人格を弛緩せ

しむる。多くの場合に於いては積極的に人格を破損するのである。大食の最も原本的なるものは官能的快感の過度の追求である。官能的快感は總て我々の生理的必需の充足に必然的に結合して生ずるのみならず、又我々の精神内容の象徴として絶對に必要なる感覺と結合して生ずる。此の種の官能的快感は我々の慾求の對象ではなく我々の慾求の充足せられた時必然的に伴ふ結果であつて、我々は此れを避ける必要なく又避ける事の出來ないものである。たゞ此の種の官能的快感そのものを意欲の對象として追求する時に大食となるのである。例へば我々が空腹なる時食を攝るならば、我々の食欲の充足には必然的に味覺の快感が結合する。此の時我々が此の味覺の快感を感じたからと云つて、それは大食ではない。併しその味覺の快感を得むが爲に、食を攝り、生理的必需即ち自然の食欲以上に貪り食ひ、例へば彼の十九世紀末のフランスの或る種の快樂主義者の如く、一度食欲が飽滿すれば吐劑を用ひて人爲的に空腹ならしめてまで美食を貪るが如きは大食の最も典型的なるものである。我々は又我々の精神的欲望、例へば美を表徴せむと欲する時必ず感覺的手段に依らざるを得ない。ゆゑに美が形象(ヒルド)となつて現はれた時、その美が我々に與ふる精神的快感は感覺的快感と結合して居る。此の種の感覺的快感をも我々は避ける必要なく又避ける

事は出來ない。併しその感覺的快感を目的として我々が美の表徴を求める時、それは大食の第一歩である。味覺の快感を貪らむとする美食や觸覺の快感を貪らむとする好色や、精神的内容なき色彩、音響、香臭等の刺戟を貪らむとする事等は總て此の種に屬する。此等は初めより不自然にして轉倒せる人巧的なる意欲であつて、それ自身人格の弛緩を意味するものである。而して此の大食が度を過せば過す丈け、それは我々の人格的欲望を麻痺せしめる。此の種の快樂に耽る者は彼がより高き、精神的欲望を缺乏してゐる事の證據として卑しむべきである。彼の散歩や種々の運動（エキササイス）はそれに伴ふ自然の美や、遊戯の天眞等の精神的要素を除去しても、猶それは精神全體を清新にし緊張せしめる意味に於てそれ自身に官能的快感以外の精神的要素を持つてゐる。併し食欲や色欲はそれが生理的必需でない場合は、精神的要素の弛緩若しくは麻痺を意味する。素より食欲や、色欲もそれが快感を目的とする場合に於ても、その欲望が遂げらるゝ迄の過程は食卓や衣裳等の美に依つて裝飾され得る。併しそれはその欲望そのものが、何等かの精神的美を盛り生かしてゐると云ふのとは別事である。或る男が或る女の肩に手を置いた時、それは男の愛と戀慕との精神的要素を盛り生かしてゐる象徴的動作でもあり得る。併し食卓や衣裳の美は只是れに附著し

てゐるのみであつて、食欲と色欲とは、其れ自身には何等の精神的要素をも生かしてゐるのではない。故にそれが生理的必需である場合は、快感を目的としてゐない欲望の充足として大食ではないけれども、官能的快感を目的として遂げらるゝ時には大食となる。食欲や色欲のみならず、例へば沐浴の場合に於て、我々が清潔と爽快との爲に沐浴し、或ひはその陶然たる精神的快感が未だ美感の程度を越えざる限りに於て、沐浴する事は大食ではないが、その限りを越えて特に官能的快感の爲に入湯する時は、大食であつて我々の精神はその爲に弛緩する。彼の快感を求めて故意に長風呂し、又人に肩を打たせ、或ひは按摩せしめて、只管肉體的弛緩の陶醉を味はむする者を見る時、我々は特別に或る精神的弛緩の卑しむべき感を起さないわけにゆかない。官能的快感の追求を是認するものは、それが何等かの精神的價値を生かして居るか、若しくは生理的必需を充たして居るかの二つである。此れ以外の場合に於ける官能的快感の追求或は耽溺はすべて大食である。それは自己の人格の働らきを萎微せしめ、見るものをして卑しき感じを催さしめる。飢ゑて食ふ者、渇して飲む者は卑しき感じを與へない。併しそれは假令卑しむべきものでなくても精神的要素を含まざるものとして我々に粗野の感じを與ふる事は免れない。故に我々は此の避く

べからざる生理的必需を他人の耳目に觸れざる密室に於て充たし、若しくは他の精神的美を以て飾るのである。此れ我々の文化、カルチュアであつて、我々の精神が肉欲を支配してゐることの一つの現はれである。肉欲とは我々の肉體に直屬する生理的必需及び官能的快感の欲求である。肉欲が精神を支配して居る時其處には野卑の感じが現はれる。肉欲の追求は如何にそれが生理的必需であつても、粗野の感じを免れないが、それが官能的快感を目的とし、併もその度が著るしい時には、甚だ卑しむべき觀を呈する。我々は彼の飽食暖衣し、快樂を貪つて逸居し、淫欲に耽り、精神的要求の稀薄なるものを自ら卑しむ。飢ゑて食ひ、渴して飲み、勞働し、純潔にして肉欲少きものを自ら尊ぶ。生理的必需さへも大なるものよりも、小なるものを尊ぶ傾向を持つて居る。食欲や色欲の强き事は下根なるものとして、我々は彼の仙人や天人を尊ぶのである。蓋し我々が人格の尊嚴を保つ上に於て、何等かの他のものに依屬せざるべからざる事は、その獨立性の薄弱を意味するものであつて、我々は出來得る限り他のものに束縛せられずして、自足自立し得る事を人格の力として尊ぶのである。しかるに生理的必需が大である丈け、我々は物に依屬しなければならないからである。官能的快感の追求も亦それが大である丈け、我々は物に束縛されなければならない。生理的必需は我々が避くべからざるものであるが故に、その充足は我々の非難に價しない。けれども官能的快感の追求は、それが精神的內容を生かすための象徵としての用をなす場合の他に於ては、避くべきものであり又避け得るものなるが故に、我々の人格的非難に價する。官能的快感はそれ自身精神的要素を含まざるものであるが故に、その追求は必然的に精神的欲望の減退若しくは抑壓を意味する。多くの場合に於ては、人格價値を積極的に侵害し、蹂躙する。且つ官能的快感は物質の刺戟に依つて惹起せらるゝ快感であるが故に、此れを追求する爲には必ず物質を所有若くは使用しなければならない。故にそれは物的價値の尊重となり、利の獲得を必要として來る。利とは物的價値の感情である。此處に於て官能的快感の大食は利の大食、即ち貪欲とならないではゐられない。併しながら物的價値は我々の官能的快感の追求によつて生ずるばかりでなく、我々の生理的必需の充足及び精神內容を盛り生かすための手段として物質を必要とする所より生ずる。この要件として我々はある程度の利を求めないわけには行かない。この程度に於て利を求むることは決して大食ではない。大食とはその程度を越えて、利を求める事である。即ち必要の範圍を越えて、利を利として求めることである。抑々物的價値が我々にとつ

て價値である所以のものは、それが人格價値を盛るための材料として有用である爲めに過ぎない。我々がこの必要以外の利を求める事は無益であると云ふ許りでなく、それは生命の浪費として生命に對する尊重の念の缺乏を意味し、且つ多くの場合精神をして物質の下屬たらしむる事に依つて人格の尊威を傷けるものである。所謂「心を以て形の役となす」事は、乃ち人格の物質に對する降服である。凡ゆる種類の貪慾はこれに屬する。それが財貨或は財貨の變態たる金錢に關する貪慾の場合は前述の守錢奴の例である。併し乍ら守錢奴の心理には又或る同情すべき點が含まれて居るかも知れない。彼等は人心の賴むべからざるを感じ、人間の愛に失望する時、如何なる場合に於ても確實にして賴るべきものは財貨であつて、此れを所有して居る限り、他人に對して自己の威嚴を保つ事が出來ると思ふかも知れない。何となれば、如何なる場合に於ても、他人が財貨を尊重し、若しくは此れに屈從するが故に、他の如何なるものに依るよりも、確實に財貨の蓄積に依つて、自分の地位を確實にし、他人に對して威力あるものとしての誇りを保持する事が出來ると思へるからである。かくの如くして彼れが他の如何なる人格價値を追求する事をも捨てゝ、只管財貨の蓄積に傾注するのは或る道理を含むでると云はなければならない。蓋し我々は自己

の人格價値を他人の反應に依つて客觀的に具象化して認識せむと欲するが故に、我々が或る人格價値を具へても、必ずしも他人から尊敬と賞讃とを得ずして、却つて侮蔑と嘲笑とを受くる事が尠くないにも拘はらず、富は殆ど例外なく他人に對して威力を持ち得る事を見る時に、自己の人格の價値を、後者に依つて確認せむとするに到るには無理からぬ點もあると云はなければならない。尠くとも其處には彼をしてかくならしめし責任を我々の人格價値と物的價値との評價の不正確に頒たしめなければならない理由がある。若し人格價値ある處には必ず尊敬があり、物的價値が人格價値に仕へて居る度合に從つてのみ尊重があるならば、彼はかくの如き方法を選ばなかつたかも知れないからである。併し乍ら如何に同情すべき點があるとは云へ、それは依然として誤謬である。且つ人格價値を他人の反應に依らずして、自覺に依つて、確認し能はざる點に於て、すでに人格の矜りを缺いで居る。併もその必要以上な財貨を獲得する手段が、自己の人格を傷つける事を條件とし、その蓄積されたる財貨の使用が、自他の人格をして物に服從せしめる事を條件としてゐる點に於て、此の種の貪欲は卑しむべきものである。我々はかの豚を卑しむ。それは彼れが物を選ばずして大食し、肥え太り、精神の働らきが遲鈍である爲である。財貨を人格價値

の爲でなく、財貨なるが故に貪り蓄へむとする衝動は精神的要求の遲鈍もしくは麻痺を意味して居る。その物質的所有に眩れて、蟻の如く此れを使用する道を知らざる者は、遂に自ら鬱血して精神的滅亡を來さずには居られない。

併し乍ら大食には猶一つの特殊なるものがある。それは感情耽溺である。我々の喜怒哀樂等の感情には複雜にして多樣なる緊張と弛緩との交錯の間に特殊な快感を伴ふものである。感情耽溺は此の快感を目的として行爲するものである。此の快感は特にそれが「實」の意識を離れて審關心の狀態に於て觀照され得る時には、その快感は微妙な甘さを持つものである。此れは藝術上に於て美的觀照の基礎を爲すものであつて、それが適當な態度に依つて處理さるゝ時には決して避くべきものではない。併し乍ら我々の實生活に於て特に對人關係に於て、我々が此の種の快感を目的となす時、其處に必然的に生じ來るものは虛僞の感情とその表出とである。卽ち芝居に於ては初めより「實」ならざる事の約束の上に、適當なる態度を以て處理されたる此等の感情の表出も、實生活に於ては、それが「實」なる約束の上に立たざるべからざるが故に、總て虛僞となつて來る。卽ち怒る眞似をし、悲しむ眞似をし、愛する眞似をするのである。此等が純粹に自分一個の感情の享樂にのみに始終する時には、他人に害惡を與へないけれども、猶自己の生活の眞實なる生長を妨げるものとして、その害は決して少くない。我々がかゝる感情の享樂に耽溺する習慣に陷る時、それは他人との面倒なる接觸を要せず、又他人に依つて毀たるゝ危險なきが故に我々はその安逸なる空想の巢の中に生きるやうになる。而して自分が眞實にそれらの感情を起してゐるのか、若しくは起してゐる眞似をして居るのかを辨別する能力も、甚だしきは意志も持たないやうになつて來る。例へば自分は人類を愛してゐるのではない。自分はいざとなれば自殺すると思ふ。併し指をでも實行的意志を持つて愛してゐるのではない。自分はいざとなれば自殺すると思つて興奮して涙ぐむ。併し一人の隣人一本切る勇氣はないのである。只さう思つて其處に生じて來る感情を享樂してゐるのにすぎない。その感情が「實」であるか否かは反省しない。かくの如き狀態が自我の人格の生長にとつて有害である事は云ふ迄もない。自我の生長は自我の理想を設定し、自己が現實に於て實有して居るものとは然らざるものとを嚴重に吟味し、此の理想を實有せむとして努力する事に依つて初めて遂げられるのであるからである、感情耽溺の習慣程自我の生長を妨害するものは尠い。更らに此の耽溺が對人關係に於て爲さるゝ時には、その害は更らに甚だしい。此の場合に於ては他人も同樣に感

情耽溺家であるならば、それは幸福な場合には一つの痴態にすぎないけれども、不幸な場合には卽ち運命の威力が二人の上に落下した時には、其の痴態は忽ち現實の悲慘となつて報いられずには置かない。殊に相手の感情が眞實であつた場合に於ては、其の人は虛僞を以て他人を欺むき、此れを害うたのである。何等の害惡を他人に與へざる場合に於ても、芝居氣を以て他人に對して怒つて見せ、泣いて見せ、戲れて見せる事はその人の人格の尊威を傷けずにはおかない。それは虛言であり、僞善である。若しくは僞惡である。他人に對して惡意を持つてゐるものではないが、他人の運命を恐れざる點に於て罪惡である。その目的が官能的快感或ひは利でない點に於て、精神的傾向を具へてはゐるが、猶その目的が精神そのものにあらずして、精神作用に伴ふこころの快感にある點に於て、又一種の大食である事を免れない。凡そ必要以上に感情の表出の過多なる事はそれ自身に高貴の德に反するものである。我々は東洋風の、若しくはストイック風の、內に充ちる感情を出來得る限り少しの象徵に依つて表出する事を、高貴の德に適ふものとして尊ぶものである。『表情澤山』と云ふ事はその感情が眞實である場合に於てもエーデルなものではない。まして虛僞なる感情を芝居氣を以て過剩に表出し、怒つて見せ、泣いて見せ、甘へて見せる事は卑し

むべきである、總ての思はせ振りは此の意味に於て斥けられなければならない。殊に男女關係に於て此の種の感情耽溺は最もしば〳〵行はれ、享樂の手段となり、卑しむべき大食となり易きものである。彼の遊戲戀愛と遊蕩と或る種の戀態性慾とは此れである、遊戲戀愛に於ては、自他の運命を恐れず、戀愛の眞似事をして其處に生ずる感情の快感を享樂するのであるが、それが運命の打擊に依つて、現實の悲慘に陷る時は、哀れむ可き痴態であるが、自己の運命は充分に守りつつ、相手の運命に對しては、無關心に此の種の享樂に耽ける者は拔け目なき悧巧者として更らに卑しむ可きである。此の種の「決して損をしないこころの快樂主義者」に對しては自分は特別に輕蔑を感ずるものである。更らに此の種の悧巧者同志の間に於て、互に運命の傷つかないやうに用心し乍ら、絕對に安全な雰圍氣の中に於て、凡ゆる芝居氣の、思はせ振りなる愛撫と嬌媚との秘術を盡くして、此の感情耽溺を享樂せむとする遊戲戀愛は最も卑しむべきである。次に遊蕩の心理も亦遊戲戀愛の一種であるが、只此れに肉欲の大食の結合したるものである。遊蕩兒は決して只肉欲のみを求めるものではない。それは女の色香、その釀し出す匂はしき空氣、その感情の甘さと潤ひ等の精神的要素に結合するところの快感を求めるのである。此の意味に於て蕩兒は彼の

肉欲を求めて他を求めざる貪婪にして動物的なる好色家よりも、同情すべき者である。彼等の或者には優さしき、人情に富みたる、愛に感じ易き、涙脆き性格の者も尠くない。只彼等は柔軟であつて嚴肅を缺き、若しくは磊落であつて愼重を缺いで居るのである。彼等の或者は可成り洗練されたる、而も精神的趣味を以て女を選び又卑しからざる態度を以て女に對し、惡意を持たずして愛撫し又保護するのである。素よりそれが遊蕩である點に於ての卑しさを免れる事は不可能であるが、彼等の「遊び」に於ては其處に「粋」と「俠氣」と「鷹揚」等の尊ぶべきものと、「野暮」と「意氣地なし」と「隘吝」等の卑しむべきものとを可成り鋭敏な神經を以て感別する所謂垢拔けのした趣味が支配して居ることも事實である。此の「好き嫌ひ」は高貴を願ふ心の一種の現はれである。或る蕩兒は或る四角四面なる人よりも其他の點に於ては高貴な人格の持主である事もあり得る。女性の美と、其の特殊な感情の柔らかさとに愛を感ずる事は高貴の心と反するものではない。只特に此れを觀照せむとする欲望が、其他の倫理的なる意識を壓倒して追求さるゝ處に其の罪過が生ずるのである。觀照の欲望であるが故に、それは「實」の意識を離れて居る。故に遊戯的でならざるを得ない。只それが人格に對して行はれ、且つ觀照を以て初まり乍ら肉欲の一點に於て實感に落ちる處にその惡と卑しさが生ずる。女の色香や、その優さしき感情を觀照せむと意圖して女に對する事は、既でに人格を物として取扱つて居る惡である。然も此れに對して初めより芝居氣を以て、愛や誠の眞似事をして、相手の此れに對する反應を觀照し、享樂せむとする事は虛僞である。又自己の尊嚴を傷つける。如何に鷹揚にして瀟洒なる趣味を以て、秋の露よりも哀れな女の風情を鑑賞する者と雖も、その態度が既に相手の人格に對する侮辱を含み、且つ肉欲の一點に於ては觀照的態度を離れて醜き實感となるのである。遊蕩は結局感情耽溺と肉欲の大食との結合である。若しその感情が眞似事でなくして、眞實であるならば、假令相手が娼婦であつてもそれは戀愛であつて、遊蕩ではないからである。併も此等は遊蕩の最もよき例であつて、その惡質なものは「粋」や「意氣地」や鷹揚等の「道德」を缺き、女性に對する精神的趣味を持たず、感情耽溺の部分を離れて只肉欲を貪らむとする單なる好色に近いものである。好色は何等の精神的要素を含まざる獣々の貪婪であつて、最も卑しむべきものであり、自分は此れを遊蕩と區別する。併し乍ら今日の如き「茶屋」や「廓」の制度は蕩兒をして女の風情の明暗を鑑賞し、「粋」と「意氣地」を尊ぶ道德の發達を困難ならしめて、單なる好色に終らしめるであらう。最後に一種の變態性欲に於ては、

其痴態は直接に端的に肉欲と結合してゐるところの感情耽溺である。それは感情耽溺の一種であるが殆ど肉欲の官能的快感を増大せしめむとする手段に過ぎないが故に、その感情耽溺としての精神的要素の最も稀薄なるものである。所謂マソヒズムとサディズムとに於てその虐待する事も虐待される事も畢竟眞似事に過ぎない。彼等は虐めて見せ、泣いて見せてその實感でない處の感情に伴ふ特殊な快感を享樂するのである。それは惡意なき點に於て、殊に默認的合意に依る場合は單なる痴態に過ぎないが、それが直接に肉欲と結合し、精神の常態を逸したる狂態である點に於て、此れに耽溺するものは凡ゆる大食の中にて最も卑しむべきものと云はなければならない。要するに總べての大食は人格の弛緩若しく鈍麻より生ずる點に於てその揆を一にする。それは人格の尊威の念が缺乏し、その命令が嚴肅なる響きを以て、精神の全部に行き渡らない處より生ずる。人格の中樞が萎微して末梢が跋扈する處より生ずる。故にそれは感情の耽溺たると、官能的快感の大食たると、利の貪欲たるとを問はず、すべて人格をして物に下屬せしめ、精神をして肉欲に屈從せしめるところの卑しむべきものであつて、その點に於ても、高貴を願ふものゝ克服しなければならないところのものである。

色魔に就いて

色魔は蕩兒と嚴密に區別しなければならない。蕩兒に於ては前述の如く、その意欲の主なる對象とする處は女の色香と感情のニューアンスとであつて肉慾も此等の精神的要素に依て或る程度迄美化されて居る。そして如何なる意味に於ても其の目的は純粹に色情である。卽ち男性が女性に對して起す處の性的興味の範圍内に止まり、且つ相手に對する意識的な惡意を混へないものである。然るに色魔に於ては、初より意識的な惡意を以て女に對し、且つその意欲の對象に色情以外の利欲を含むで居る。故に色魔に於ては蕩兒に於ける「粹」や「意氣地」や「鷹揚」等の道德も、女に對する人間らしき愛撫と保護との感情も、その他總て遊蕩をして色情を美化せしむる處の要素が缺乏して居る。然のみならず蕩兒に於ては其れは利欲を犧牲にして女色に惹かれるのである。彼等が利欲に汲々たるものよりも人間として愛すべきものであるのはその爲である。利よりも女を愛するものは或る意味に於ては心情の美しきものである。彼等が自己の利欲を捨てゝ女に「肩入れ」し、借金に首が廻らず、又初めの眞似事が眞實となつて、遂に情死する過程には愛憐すべき

人間らしさを充分に窺ひ得る。然るに色魔に於てはその女を求めるのは又利欲の爲である。色と欲との兩道である。己れは何の代價をも拂はず、何ものをも犧牲にせず、徹頭徹尾我慾を貪らむとするのである。彼等は金になりさうな女を狙ふ。愛する女の爲に一本の簪を買つてやる代りに、女から搾り取らうとする。凡そ如何なる遊蕩と雖もそれが純粹に色情であり、且つ常に女に對して男としての誇りを以てこれを保護し、男の方から金品を與へることがあつても、假初にも女の方から此れを要求しないのはせめて男の意氣地である。女に金を出させて平氣で居れる事は既に男としての誇りを失へるものである。況して女から金品を搾り取るに到つては言語道斷である。自分は遊蕩は許す事が出來るが、色情に利慾を交へるものは斷じて許す事が出來ない。その一事のみを以てその人格の陋劣を致命的に證據立てゝ居る。而も色魔に於ては、初より打算を以つて初まる色情であるが故に、如何なる意味に於ても、「誠」が現はれる事が出來ない。それは嘘言と詐欺と裏切りとを前提として初めて成立し得るものである。而も色魔をして最も卑劣なるものとならしめるものは此等の惡しき動機の他に、それは他人の秘密を利用すると云ふ卑しむべきもの〻中最も卑しむべき手段を用ひる點にある。彼等が女から金を搾り取る最も有力なる手段は女の秘密を握り、此れを種にして脅迫する事である。羊の如く女に近寄り、蜜の如き甘言を以て彼女を誘惑し、その秘密を握るや、自己の假面を脱ぎ、狼の如く殘酷に相手の弱點を利用して、色慾とを貪らむとするのは又一種の强盜であり、强姦であり、而も最も卑しむ可き破廉恥である。而も彼等はその用ふる手段が初めより詐欺であるが故に、最も信じ易き、淸き、初心なる女を狙ふ。他人の善良なる點を選んで利用するものである。又彼等の用ふる手段は自己の名譽を捨て、他人の名譽心を利用する點に於て最も陋劣である。卽ち彼等の所業は既に破廉恥であるが故に、彼等の脅迫は自己の名譽心を捨てる事に依つての外に効力なきものである。而も相手が名譽を重んずる時にのみ効力あるものである。故に彼等の用ふる手段は自己の名譽を捨て他人の名譽心を利用する二重の破廉恥に依つて初めて成立するものである。併も彼等は例外なく卑怯者であるが故に、出來得る限り抵抗力なき女を選むで狙ふのである。他人の弱味に附け込むのである。正面から力を以て脅迫する强盜や强姦は素より憎むべきものであるが、色魔は憎む可きものたるのみならず、又卑しむべきものである點に於て此等よりも一層惡質である。しかのみならず、色魔に於ては、その罪惡は罪惡なるが故に、一層彼等の興味を惹くのである。彼等は女を欺むき金

をゆする事に依つて、正しき方法に依つて遂げらるゝ色慾よりも一層快感を感ずる處のサディストである。「弄んでやつた」事、「ゆすつてやつた」事は彼等にとつては手柄である。罪惡に伴ふ特殊の變態的快感と、變態性慾の快感とが結合して彼等の人格を蠱惑し、汚濁し盡くして居るのである。自分は色深かさには同情し得る。それは慾深さよりも遙かに人間的である。併し色魔に到つては徹頭徹尾惡魔的であり、その何處にも人間らしき心臟の鼓動を聞き得ざる、憎むべく卑しむべき吸血鬼である。

賣淫に就て

賣淫とは何ものかの手段として性的行爲を爲す事である。利慾の爲に自己の身體を他人の肉欲に提供する事はその最も典型的なるものである。それが直接にして露骨なるものに非ざるも、美くしき假面の下に間接に行はるゝものも亦賣淫の一種である。凡そ性慾の衝動以外の動機から性的行爲をなすことは總て此の種に屬する。彼の娼婦の如く職業的となれる賣淫の卑しむべき事は云ふ迄もない。それは女としての人格の矜りを根本的に放棄したるものである。固より彼女等がかくの如き道を選ばざる可からざるに到つた事情には多くの同情すべきものがあるであらう。其處には親の責任、媒介者の責任、一般に男子の肉欲の責任、及びその存在を許さざる可からざる社會の責任が大であらう。自分の娘を賣る親は假令貧窮の爲であつても如何に卑しむべきものであらう。まして彼等の中には勞働を厭ひ、娘を喰物にする者があるのである。自分の娘を賣つて自分はぶら〳〵して暮らしてゐる如き親は、娼婦よりも更に卑しむ可きである。又賣淫の媒介をなして生活する桂庵の如きは娼婦よりも娘を賣る親よりも猶卑しむべきである。何となれば彼等は己れは何物をも犧牲にせずして、他人に罪惡を犯さしめ、卑しむ可きものに機會を與へる事に由つて生活するものだからである。更に淫を買ふものは相手をして淫を賣らしめる原因をつくるものであつて、其の行爲が金錢を以つて他人の人格を蹂躙する罪惡であるばかりでなく、相手をして彼の人格の尊嚴を放棄せしめる罪惡を犯さしめる點に於いて二重に罪惡である。加之總べての他人の人格に對する侮蔑者と同じく、彼等は他人の人格を蹂躙する事に依つて、自己の人格を蹂躙する權利を他人に是認するものである。此の意味に於いて淫を買ふ事は又自己侮蔑である。併し乍ら親や、桂庵や娼客の責任が如何に大であつてもそれを以て賣淫する者の行爲が是認され

るのではない。賣淫は根本的に自己の人格の矜持を放棄するものである。賣淫を拒む事が出來なかつたといふ事は如何なる事情に於いても、其の人格の尊威を汚辱し盡すものである。我々は死を以つても之れを拒絶せなければならない。假令親や、夫や、兄弟の不幸を救濟せんが爲めに自分を犧牲にして賣淫する事と雖も許さるべきではない。此場合に於いては、犧牲にすべからざるものを犧牲にするのである。それは決して自己の生命を犧牲にするが如き行爲と同一視する事は出來ない。他人の不幸を救濟せんとする善行は自己の人格を汚辱し盡すといふ惡行に依つて全然その光りを失ふものである。此の場合に於いては若し他人の不幸を救濟する方法が賣淫の外にないならば、その不幸を他人に負はしめても自分は賣淫すべきではない。自己の死を以ても賣淫を拒絶すべきであるならば他人の死を以ても己の爲めに人を賣淫せしめるが如き罪惡を犯さざらしむべきである。もとよりかゝる賣淫者は、自己の利欲の爲めに賣淫したる者よりも遙に同情に値する。併し乍ら我々は忠臣藏のおかるや、出家と其の弟子の淺香に如何に人間的に同情し得ても、之れを是認する事は出來ない。

賣淫はかゝる直接にして露骨なるものにあらざるも、凡そ何物かの手段として他人の肉慾に自己の身體を提供する事は總べて此の種に屬する卑しむべき行爲である。利害の爲めに、或は情實の爲めにする結婚は賣淫である。戀愛と性慾とを感じあたはざる配偶と衣食の爲めに離別しあたはざるも亦賣淫である。假令操を許さざるも、自己を巧みに防衛し乍ら、他人の性慾に媚びて「愛嬌を振り撒く」事に依つて、自己の利益を擴張する者は又賣淫の一種である。他人が自己に對して享樂的態度を以て近づく事を知り乍ら利害若しくは情實の爲に此れを拒絶し能はざる事も亦賣淫の一種である。又故意に異性の肉慾を刺戟するが如き服裝や姿態をなして、異性の好感と性的選擇の機會の優越を贏ち得むとする事も亦一種の賣淫である。是等は總べて何物かと引き換へに、他人の肉慾に自己の身體を提供するものであつて、その人格の矜持を傷つけて居る事は言ふ迄もない。然もそれが他の美しき假面の下に行はるゝ點に於いて一層卑しむべきものであると言つていゝ。

賣淫は女子が男子に對して行ふ場合よりも男子が女子に對して行ふ場合に於いて一層卑しむ可きである。いはゆる男妾や、貴婦人に買はるゝ或る種の役者の如きは之れである。男子は女子よりも其の本性上獨立的であり、威嚴を重んずべき筈のものである。其の男子が女子の肉慾に仕へ

男性の矜りを棄つるが如きはもはや男性としての面目なきものである。女に養はれて生きる事すら既に男子の恥辱である。況して女性に弄ばるゝに任せ、之れに屈從し、阿諛するが如きは破廉恥の極である。彼等の或る者はおそらく女を弄むでやつた上に、金を絞るのだと思ふかもしれない。然らばそれは色魔の一種である。又淫を賣るものは買ふ者に對して少くとも形式上屈從的位置に立たざるを得ない。内心その顧客を見下して居ても屈從の態度を取るならば、それは既に立派な自己侮蔑である。否寧ろ内心見下して居る者に對して屈從の形を取る事こそ申し分なき自己侮蔑である。若し韓信が金を得むが爲めに、無賴の徒の股をくゞるならば、彼が無賴の徒を見下けて居れば居る程卑しむべき屈從と言はなければならない。自から價を拂つて妾を蓄へ、己れに屈從せしむる好色家も、彼等に比ぶれば、尙自から屑よしとする根據を持つて居る。もとより彼の賭博打ちの親分や、女髮結ひの亭主等がその妻や情婦に養はれて居ても、彼等が女に眞實に愛され、自ら屈從して居ないのであるならば、それはたゞ懶惰であつて賣淫ではない。併し裕福な後家の玩弄に委するのらくら男や、貴婦人に買はれる役者や、その玩具となる美少年の如きは賣淫の最も卑しむべきものであり、全然男性としての矜りを失へるものである。

最後に尙一種の賣淫がある。それは自己が性慾を感じざるに關らず、他人に奉仕せんが爲めに自己の身體を他人の肉慾に捧げる事である。夫婦の間に於いて往々にして行はれる肉交の場合である。この場合に於いても相手の不機嫌や、立腹を怖るゝためになす事は明かに一種の賣淫である。併し純粹に奉仕の氣持を以つて、何等の報酬を求めず、たゞ相手の性慾を滿足せしめんが爲めに、自から進むで身を捧げる場合に於いても、その行爲は非難に價ひするであらうか。此の場合に於いても、奉仕の手段として、自己の身體を他人の肉慾に提供する點に於いて、依然として自己の尊嚴を傷つける行爲であることは免がれない。此の場合に於いては彼女は奉仕すべからざる欲望に對して奉仕するのである。即ち夫は妻が性慾を感じざる場合には肉交を斷念すべき筈のものである。故に夫をしてその不滿足を負はしめなければならない。相手が性慾を感じざる場合に肉交する事は假令相手の運命に對する責任を持ち、相手が心から身を捧げた場合と雖も相手の人格を手段となすものである。故に自己の人格を手段として用ひしめる事は妻にとつて自己の尊嚴を傷付けるものでなければならない。凡そ自己の身體は自己の人格の象徴であつて人格以外の物ではない。身體は特殊な物質である。自己の所有物を以つて他人の慾望の手段となす事と自己

の身體を以て他人の欲望の手段となす事とは全然區別しなければならない。凡そ賣淫の卑しむべき所以は、自己の人格の象徴であるところの身體を、何ものかの手段として、即ち一つの物として、取扱ふところに存する。故に此の種の奉仕は報酬を目的として淫を賣る者とは明瞭な區別を持つて居るけれども自己の人格を手段とする點に於いて同種の卑しむべき行爲に屬するものといはなければならない。

或る種の表出に就いて

我々の感情や意志の表出は我々の人格が如何なるものであるかを直接に他人に印象せしめる機會である。我々の内面生活は自然に肉體的表出を求めむとする衝動を持つものである。併し乍ら我々が他人に對して此の表出を印象せんと欲し、或ひは自然に印象すべき位置におかれた時、その表出の仕方は對人關係の道德に依つて制約せられなければならない。その感情や意志やの表出の外に對人關係に於けるその人の人格が特に表出されなければならない。自己の内面の狀態の自然にして僞らざる表出でありさへすれば、そのまゝ表出して差支へないと云ふわけにはゆかない。

其處には特殊な或る條件が加はつてゐるからである。此處に於いて我々の意志や感情の表出の仕方は我々の人格の如何を示す事になるのである。表出の仕方が自由であり、自然であり、その場所と時と相手とに相應しい――即ち禮に適ふか否かは我々のカルチュアの程度を示す標識であるが、自分は此處では特に我々が卑しむべきものとして考へねばならない表出のみに就いて云ふのである。即ち我々の人格の尊厳を傷つけるが如き表出の仕方のみを選んで擧げるのである。我々の内面の狀態が、即ち表出せらるゝところのものが、卑しむべきものである時、その自然なる表出が卑しむべき印象を與ふる事は云ふ迄もない。併し我々の内面の狀態が卑しむべきものでなくても、その表出の仕方が人格の尊厳を傷つけるが如きものである時には、それは猶卑しむべきものとなる。例へば我々が食慾や色慾等の生理的必需が充たされない時、飢ゑを感ずることは自然である。併し我々がかの犬の如くにその飢ゑを露骨に現して「物欲しさうな」眼附きをして他人の食膳を窺ひ、或は婦女子に附きまとふならば、それは自己の人格の尊厳を保ち能はざるものとして卑まれねばならない。單に生理的必需のみならず、我々が隣人の愛や、戀愛に飢ゑたる時に於ても、其の人間らしき孤獨の淋しさや、飢渴をも餘りに哀願的に相手と時と場所とに對する考

慮を費す餘裕なく表出する事は、人格の尊厳を傷つけないではおかない。總て他人の感情に訴へすぎる、女々しく、未練がましく、愚痴つぽき表出は高貴の德と一致しないものである。それは決して自己の内面の現實を他人に隱蔽する事がいゝと云ふのではない。自己の苦痛や悲哀に堪へ得る事が人格の尊厳を構成する重要な力だからである。我々が他人の苦痛や、悲哀を訴へる事は他人の苦痛や悲哀の原因となる。それに對する同情と奉仕との義務を負はせる。而も自己の無力や、運命の不可抗力や、己れ自らの不幸の爲に餘裕なく、他人の不幸を傍觀する外道がない場合が少くない。故に他人をして苦しき窮境に立たしめる事である。此れ我々が自己の苦痛や悲哀を他人に表出する事を出來得る限り抑制しなければならない所以である。故に自己の苦痛や悲哀の表出に關してはストイックな寡默な方が高貴の德と一致する。癖我慢や負け惜しみの如き不自然さは賞讃すべきものではないが、猶それは卑しむべき感を與へない。然し自己の負ふべきものを負はず、自己の過失や蟲の良さを棚に上げ、過剩にして亂れたる表情を以て、泣き、訴へる事は人格の威厳を傷つける。而もそれが何等の効果なき愚痴の場合に於て猶更らである。不可抗なる運命を勇ましく負ふて忍受する事は人格の尊厳と力との靜的なる現はれとして尊い感を與へる。單に

苦痛や悲哀の表出のみならず、愛や、戀慕や、好意や、怒りや、其他總ての感情の、表出過多にして輕々しき事は高貴の德と一致しない。此の點に於ては自分は西洋風の表出よりも東洋風の表出を好む者である。殊に彼の能樂に於ける表出法は最も洗練せられ簡素にして、しかも効果的である。固より表情の不自然な抑制も不自然な誇張と共に斥くべきであるが、特に後者の場合に於てはそれは嫌らしさと臭氣とを伴ふものである。まして嘘僞を伴ふ場合にはそれは擊蹙に價する。自分が大食の一種としてあげた感情耽溺のための表出はすべて此の種に屬する。又總ての馴々しさも此の種に屬する。相手が自分の心をアクセプトするか否かを考慮せずに、猥りに自己の感情や意志を表出し、他人の懷の中に入りこみ、膝の上に上る猫の如き馴々しさは狎褻であつて卑しむべきである。而もかくの如き馴々しさが眞心少く、且つ拔け目なき悧巧さに伴はれてをる時猶更らである。素より自分は天眞や、率直や、人間らしき隔てなさ(オープンハーテッド)をも愛するものである。我々が野原を散歩して其處に出會つた見しらぬ人に直ちに話しかけたにしても、それを必ずしも間違ひとは思はない。劇場に於て未知の美くしき婦人を見た時に、直ちに交際を求める事をも强ち不正とは思はない。寧ろかゝる態度の何等のわだかまりなくされるやうになる事を自分の理想の境地となす

ものである。併しかゝる態度を高貴の德に反せずして取り得る爲には、我々の內心が淸淨にして無礙でなければならない。其處に輕々しさと、剛々しさと無躾との感じが伴ふ限りはかゝる態度は自他の人格の威嚴を傷つける。我々が理想的人格に達せざる限り、我々のこだわりや遠慮は避ける事が出來ない。自己の醜さを他人に押しつけ、粗野な手を以て他人のヴェールを拂ひのけ、泥足を他人の淸堂に蹈みこみ、他人の心の扉をのぞき込み、その靜けさを搖すぶるが如き、縱まなる感情や意志の表出は、他人の心情を尊ばず、自己の人格を重んぜざるものとして卑しむべきものである。素より人には樣々の個性があり、從つてその感情や意志の表出にも種々の仕方がある。或る人は內氣に、或る人は無邪氣に、或る人は人懷かしく或る人は寡默である。此等はそのまゝの特色を持ち乍ら、一つの高貴なる人格の現はれ方の種々相としてそれ〴〵に美くしくあり得るものである。總ての人が同じ仕方で表出しなければならない事はない。又假令種々の缺點は持ち乍らもその人格の本質が高貴でさへあるならば、其處に善と美とが充分に現はれ得る。むしろ我々が各自の特色を生かし切らない間は、凡ゆる特色は總て缺點を伴つて居るのが常態である。かくの如き場合に於ては我々はその表出を卑しむべきものと感じない。併し乍らそれが如何なる特色であつても、上述の如き不自然と虛僞と過剩と狎褻と不作法とを伴つてゐる限りは、その限りに於て人格の尊嚴を傷つける事は免れない。此の他にも我々の意志や感情の表出が相應しくない場合は猶多い。例へばその等の或る種のものを名づけて我々は心なき業と云ふ。それは我々の人格の仕上げと、磨きとに於て我々の所謂カルチュアの重要なる課題であるが、此處では特に我々が卑しむべきものとして表象するもののみに止めて、他の機會にゆづつて置く。我々が感情や意志の表出に於て完全な自由を得る事は、我々の人格の完成の最も明らかなる表徵である。我々は彼の聖衆倶會の繪に於て祝福されたる人達が、互に高貴の德を具へて傷つけず、傷つけられず、交り合ふ天上の挨拶や遊樂の光景を想像する時に、尊き感に打たれるのである。我々の表出は人間らしさと超人らしさと天使らしさと等の種々の段階がある。より高き階段より見ればより低き階段に於ける表出は高貴の德に於て足らざるものである。超人より見れば人間らしき表出は甘く弱くもしくは哀れに見えるであらう。自己を憐れむべきものとして考へることは超人にとつては自己侮蔑であるが故に、我々が人間らしき表出として愛し得る或る種のもの、例へば婦人の嬌羞や、男子の孤獨の淋しさや、老人の同情や等は猶卑しきものと見えるかも知れない。更

らに天使より見れば、超人の氣を負へる誇りや、行者的な硬さは猶自由の點に於て足らざるものとして低く見えるかも知れない。我々は高く登り、遠く願ふに從つて、卑しむべきものゝ領域を擴張する。總ての者は自己の境涯に相應しき表出を求めるであらう。自分が此處に擧げたのは、人間らしさの階段に於て、卑しむべき表出である。人間らしき表出として卑しみに洩れ得るものは神の目に於ても、少くとも愛するに堪へたるものと成り得るであらうと信ずるからである。併し我々は天使らしき階段より自己の卑しさを省み得るまでに向上することを願はなければならない。

懶惰に就いて

懶惰とは凡そ活動（ムーブ）に對する忌避若しくは無活動に對する嗜好である。抑々生命は不斷の活動の流れである。生命の中核は常に積極的な活動性（ポーチヴィティ）を帶びて居る。而して生命の外部は此の活動性を觸發する無數の刺戟を以て圍繞されて居る。故に我々は外面的にも、內面的にも不斷に活動的なる狀態に置かれて居るのである。故に我々が常に消極的であつて、活動を忌避する事は我々の生命の本性、人格の本質に逆らふものである。自己の生命に忠實なる者は我々の中核を以つて外來の刺戟に對して鋭敏に反應し、働きかけ、之れを選擇し、攝取し、或は拒斥して自己の生命を成長せしめなければならない。然るに懶惰なるものは刺戟に對する反應が遲鈍であり、働きかける勞を厭ひ、之を選擇して、攝取し、若しくは拒斥する氣力を缺き、生命の成長を努めざるものである。又是等の外來の刺戟の中には必然的に我々の人格を害するもののみならず、特に人格の尊嚴を傷つけむ事を意圖した刺戟も存在する。例へば我等の人格全體を弛緩せしめる官能的快感の刺戟や、不義の名利の誘惑があり、又我々の人格の尊嚴を特に傷つけむことを目的とする侮辱がある。是等の刺戟に對しては我々は常に潑溂として活動的なる中核を以つて働きかけ之れを拒斥し之れと戰はなければならない。人格の尊嚴は斯くの如き不斷の精神的戰ひに依つて始めて支持する事が出來るのである。我々が外來の刺戟に對して身を任せ、誘惑を拒斥せず、侮りを防がないならば、如何にして人格の尊嚴を保つ事が出來るであらう。「諸々の煩惱の賊」を征服しないならば「勝幡を道場に樹てる」事は出來ない。「男子門を出づれば」必ず出會ふ「七人の敵」に對してその侮りを防ぐ事が出來ないならば、人格の尊嚴は決して保つ事は出來ないのである。又是等の外

面的活動のみならず、我々の人格の内面に於いて、不斷の精神的活動がなければならない。則ち所謂道德的精進である。懶惰の最も厭ふべきは此の内面的活動の忌避である。我々は人格の向上を圖る爲めには常に自己の現實の相を反省し、之れを克服しなければならない。然るに懶惰なるものは自己の現實を克服せんとする氣力を缺くばかりでなく、之れを反省せんとする意志さへも起こさないのである。道德的精進の念力を全然起さないのである。蓋し總べての活動の中に於いて道德的精進は最も内面的な活動であつて、人格の中核の緊張を要するものであるが故に、最も反射的の刺戟に對する反應的活動さへも出來得る限り避けむとする事、例へば眼前の棚の上に在つて食慾を刺戟して居る牡丹餅に對してさへも、强ひて之れを取る勞を惜み、それが寢轉むで居る口許まで落下するまでは敢へて動かない程の怠け者が、緊張せる精神の中核に於いてのみ、生きた事實である道德意識に關して、努力の念を缺くのは已むを得ないといはなければならない。而も懶惰なる者は必ずしも無慾であつて、心が貧しいのではない。彼等はたゞ自己の慾を遂ける爲めの努力を厭ふのに過ぎない。努力せずして慾を遂げむとする事こそ懶惰の特質である。怠け者は多くの場合又大食家であつて、その理想とするところは出來るだけ勞せずして出來るだけ大食せむ事である。飽滿して、肥え太り、昏々として眠らむ事である。若し勞せずして獲られるものであるならば、官能的快感も名利も彼等の厭ふところではない。たゞこれらのものが勞なくして得られないが故に之れを求めないと云ふに過ぎない。若し彼等が富貴の家に生れたならば、その幸運を生かす事能はざる安逸無能の民として、人類の重荷であり、若し貧窮の家に生れたならば衣食の爲めに働く事を厭ふ彼等は乞食となるより外に道がない。いづれにしても人類の寄生蟲であり、厄介者である。我々が一個の生命を享けたる意義は、その生命の内に含まれたる可能性を實現發展せしめる事に依つて、必然的に生ずるところの自己の個性に適する創造的活動を以て何物かを人類の文化に寄與するところにある。然るに懶惰なるものは自己の天命を全うする事は勿論、創造的活動の如きは尙更忌避するところである。又懶惰は自己の衛生に對してさへ、勞を厭ふが故に、それは不潔とならざるを得ない。活動の便宜と能率を慮らないが故に亂雜無秩序とならざるを得ない。自己の服裝や容貌の端正を保たむとする努力を怠るが故に無精とならざるを得ない。殊にそれが女子に於いて表はれる時には女子が此の地上に於いて負ふて居る使命の最も重要なる一つであるところの、地上の美の精として此の地上を飾る事が出來ないばかりでなく、

其の不潔と無精と亂雜とを以つて此の地上を醜くし、空氣を沈滯腐敗せしめ、我々をして生きるに堪へざらしめる。活動と創造を喜ばず侮りを防ぐ事能はざる男子と、美と端正とを願はず、容色を飾る事を欲せざる女子とに依つて依つて作らるゝ世界は如何に厭ふべき窒息せしめる世界となるであらう。垢面蓬髪にして犬の如くに食を人の門に乞ひ、或は不潔にして汚塵の中に逸居して豚の如くに大食し、肥滿し、惰眠を貪る者が卑しむべきであるのは云ふ迄もない。併し乍ら我々が已に或る程度の人格を保ち、地位を得、他人の尊威を贏ち得たる後に於いても、尙自己の人格の現實を反省する事を忘り、より高き境地に向つて成長する事を努力せざるものは又懶惰として卑しまなければならない。我々にとつて最も警戒を要する懶惰は寧ろ此の種であつて、精進に倦む事である。それは我々が次第に高く成長するに從つて、自己の周圍に自己を鞭打つに足る人格者少く、神の外に恐る可き者を持たざるに到るに及び、我々に取つて恐るべき誘惑である。勿論かゝる人には多くの尊敬者や、追從者の群が有るのを常とするが故に、自己の現狀を打破して神の外には知る者無き自己の醜狀を彼等の前に暴露して、自己の名譽ある安固なる地位を放棄する事は困難なる戰ひを要する事となる。又自己の精進が自分の周圍の者の平和と安樂とを破らざるを得ない時に、かゝる精進は又「同情」との苦しき戰ひを要するものとなる。此の時に於いて神の外責むる者なき自己の現狀に停止して、一層鋭き反省と、より高き登攀とを避けむとする誘惑の生じる事は同情に値ひする。又一つの克服と登攀とが他の無限の克服と登攀とを惹起するときに、而も次第にその戰ひが困難となる時に、漸くその精進に倦み來たる事も亦同情に値ひする。併し乍ら此の同情すべき誘惑をも尙我々は懶惰として卑しまなければならない。彼のダンテの神曲の淨罪の山を登攀する靈魂や、又ニーチエのツアラトウストラの不斷の自己超克の戰ひの如く、倦む事と怠る事とを鞭打たなければならない。ツアラトウストラは懶惰を高貴の精神に反するものとして實に峻嚴に輕蔑して居る。彼は永劫回歸の恐る可き思想を克服して、不斷に繼續するところの、而も決して終息することなき自己超克の旅程を人類の靈魂に課したのである。これこそ懶惰の反極である。故に超人にとつては、一つの克服の勝利に安ずる事は已でに懶惰である。ツアラトウストラは「汝、我が必然性よ、總べての小さき勝利より我れを防護せよ」と云ひ、「我が意志よ、汝が汝の勝利に於いて不撓なるを得む爲めに、汝の最後の爲めに、汝の最後の偉大を愛(おし)め。嗚呼、何人が其勝利に屈服せざりしぞ」と云つて居る。總べて自己の內なるあらゆる力の可能

性を可能性の儘に眠る事を許す事は懶惰である。かの佛敎の涅槃と云ふが如き靜寂なる境涯は、リップスも云ふが如く、總ゆる力の平衡若しくは調和であつて、それ自身積極的なるものである。總ゆる我等の内なる力の可能性は、それ自身に於いては善であつて、尊重されなければならない。從つて實現解放さるべき權利を持つて居る。唯だ是等の總ゆる力が一つの人格の發現として一つの全體に統一されなければならない。我々はそれが我々の人格全體の成長に役立つ度に從つて是等の力に上置と下屬との秩序を與へて一つの系統に包攝しなければならない。此處に我々の精進の一つの課題としての靜的努力が生じて來る。我々が或場合衆人を離れて孤獨を守り、靜所に閑居し、密室に祈禱し、山中に瞑想し、面壁して坐禪するのはそれが我々の全人格の成長の爲めにその場合必要だからであつて、街頭に出でゝ民衆の間に奔走するのと同じく積極的精進である。山に隱れる事は或る場合市に現はれる事と同じく、自我の成長の爲めに必要である。全人格の成長の爲めには或る場合或る慾望を捨離し、愛する者と別離し、一見消極的無爲と見ゆるが如き生活をも選ばなければならない事もある。斯くの如き靜寂、孤獨、若しくは無爲は決して懶惰ではない。併し乍ら當然解放さるべき自我の慾望が内に在るにも關らず、他人の思はくを憚り、周圍に惹起する風波を怖れ、或ひは安逸を求め、面倒を避ける爲めに、その慾望を解放、追求せざる事は懶惰である。或る時は斷念せざる事が懶惰であり、或る時は斷念する事が懶惰である。我々は自我格の成長、自我の向上の爲めに努力する事が精進であつて、その反對が懶惰である。全人の成長の爲めには總ゆる階段の心境を先づ一度把握し、然る後これを超克しつゝ登攀して行かなければならない。是れ絶間なき精進の旅程であつて、把握すべき時に把握せず、超克すべき時に超克せず、現在の安逸を偸む事を懶惰として卑しまなければならない。人格の尊威を重んずる者はただその尊威の感覺の爲めにのみ精進する。その點を刺戟される時恰も駿馬が拍車の打擊を感ずるが如く、全生命の聳動を感じて邁進する。彼のツアラトウストラの如く、此の感覺の鋭敏なる者にとつて、彼が已でに、多くの克服の勝利の後、雲雷を己の脚下に俯瞰する程に向上した時に、彼にとつては已に諸々の卑しむべきものは征服されてあるが故に、此の場合尙彼にとつて卑しべきものたり得るものは、たゞ懶惰のみであらう。則ち我々は懶惰を唯一の卑しむべきものとなす程、向上しなければならない。而して此の卑しむべきものは、我々の向上の最後迄我々にとつて卑しむべきものであらねばならない。

自卑に就て

自卑とは自己の人格の尊威を自から傷つけることである。上來列擧した卑しむべきものは總べて無意識的に自己の人格の尊威を傷つけて居るものであるが、自卑は自から意識的に自己の人格の尊威を害ふものである。卽ち人格に對する最も直接な露骨な冒瀆である。謙遜は自己の人格の尊威を重ずる心の爲めに、止むを得ずして自己の醜さを、良心の痛みを以つて承認するのであるが、自卑は自己の人格の尊威を重んぜざる心の爲めに、自己の醜さを、良心の痛みなくして承認するのである。其處には最早人格の尊威に對する感覺がない。故に其處には一切の恥辱といふものが成立しない。我々は自卑者に對して人格の尊威の原理を當て嵌めて責める事が出來ない。僞善者は自己の惡を善の假面を以つて隱蔽せんとする虛僞であるが故に、勿論卑しむべきものであるが、其處には尙少くとも自己の人格の尊威に對する感覺がある。恥辱の念がある。それは人格の尊威の原理の尙支配し得る世界である。併し乍ら自卑は此の原理の支配以外の治外法權の別世界である。故に我等はたゞこれを輕蔑し得るのみであつて、如何ともする事が出來ない。其處には

論議と妥協との道が絕えて居る。愧づる處なく「自分は嘘吐きである」として任ずる者に對して嘘をついた事を責める事は無意義である。恐らく彼等はかく任ずる事に依つて、自から嘘を吐き乍ら、嘘を吐かずとなす僞善者より優つて居るとなすかもしれない。併し乍ら彼等に果して僞善者を輕蔑する資格があるであらうか。嘘吐きを以つて自から任ずる者は嘘を吐く可からずといふ道德原理を超越せるものでなければならない。然らば如何なる原理に依つて僞善者を輕蔑するのであるか。それは矛盾であると云はなければならない。僞善者を輕蔑し得る者は「嘘を吐く可からず」と云ふ道德原理を承認しながら、嘘を吐いた事を認めるところの、從つて此の原理を以つて攻擊し得るところの謙遜者のみである。故に自卑者は僞善者を輕蔑する矜りさへも持つ事は出來ない。然るに事實に於いて、殆ぎすべての自卑者が僞善者を輕蔑するのは何故であるか。思ふにそれは自卑なる者は一つの自から支持し能はざる、矛盾の立場であつて、實際には自卑者と雖も「嘘言を吐く可からず」と云ふ原理を承認して居るのであるが、それを承認せざるが如く自から欺くのである。卽ち自卑は一種の僞惡である。故に彼等は僞善者を非難するとき、無意識的に此の原理を適用するのである。自卑は眞の意味に於いては最早何の矜りも持たざる自棄となるに

及むで始めて徹底する立場を得るのである。「我等は極重惡人である」と宣して自から任ずるものが、僞善者よりは稍々優れりとして何等かの矜持を持つ事は矛盾であるといはなければならない。故に自分はかの眞宗の惡人成佛の教理を救ひの條件として絶對に善を必要としないと云ふ意味でなく、事實として我々が何等の善をも持つてるないと云ふ意味に解釋する事には反對する。若し然らば、親鸞のあの否定すべからざる矜持は何處より生じるのであるか、思ふに是等は一種の自欺である。自卑は謙遜と正直とが傲慢と虛僞とを憎むのあまり其の反動として自己を誇張したる變態である時、始めて道德的意義を持つこころの誤謬となる。多くの自卑者には斯くの如き者がある事を見遁す事は出來ない。斯くの如き自卑者は同情すべきものであつて、其處に却つてある正直さが現れるが、それが苟くも人格の尊嚴を認めざる事を標榜する限りに於いて、卑しむべきものである事は免れない。自からを卑しむべきものとして承認したと云ふ事實は人格の冒瀆として牢として消す事は出來ない。

自棄は何等の矜持をも持たず從つて他人に對する非難の感情をも起す事なく、自己を罪惡と低卑とに委ねるのである。かの或種の幇間が自己の人格を客の侮蔑と戲笑とに任せて自から恥づる事なく、客の如何なる無禮なる要求にも唯々として從ひ其の好笑柄とならん爲めには總ゆる自己侮蔑の行爲を成して恬然たるが如きはこれである。又或る種の娼婦が自己の身體を他人の肉慾に提供して、最早何等の羞恥を感ぜざるが如きこれである。或ひは或る種の乞食や泥棒が自己の所業に對して何等の恥ぢも悔いもなく、より良き生活に就かんとする意志を全然缺いてゐる如きこれである。此の種の自卑者に對しては、我々は人格の尊嚴や、道德的の原理を以つて說服する手懸りなく、彼等により善き道を勸進する方法も絶えて居る。何等の矜持をも持たざる者を道德的に刺戟する事は不可能であり、より善き生活を願はざる者には如何なる善も無意味である。「十人の人も一頭の飲む事を欲せざる馬に飲ましめる事は出來ない。」勿論人間が斯くの如き自棄の狀態に陷るとすれば、それが先天的痴呆や、精神病者にあらざる限り、其處に深刻にして悲痛なる事情が存在するであらう。併し如何なる事情が存在するにもせよ、自から意識して自己の尊嚴を放棄する者は總ゆる卑しむ可きものゝ中にて最も卑しむべきものでなければならない。

最後に尙此處に一つの特殊な自卑がある。それは僞惡である。自棄は道德に對する無自覺であるが、僞惡は道德に對する謀叛である。前者はアモーラルであり、後者はアンチモーラルである。

僞惡は惡に對する趣味である。加擔である。僞善も僞惡も共に虛僞として卑しむ可きは勿論であるが、僞善は少くとも善に對する尊重を標榜して居るのに反し、僞惡は善に對する敵意を標榜するものである。故に僞惡の卑しむべきは、それが虛僞であるといふ點のみではなく、又それが善に對する反逆であり、從つて自己の人格に對する侮蔑である點にある。自己は惡人なりと標榜する事は自己の人格に對する侮蔑でなくて何であらう。それは實に白晝公然たる自己侮蔑である。然も僞惡者は此の事を矜持を持つてなすのである。總べての謀叛者が矜持を持つて居るやうに、かの神に反抗する惡魔が矜持を持つて居るやうに、善に對する叛逆者たる僞惡者も亦矜持を持つて居る。此の點に於いて僞惡者は何等の矜持をも持たざる自棄者よりも優つて居る。併し彼が矜持を持つのは善人が自己の善に對して持つ矜持ではなく、又自卑者が心密かに持つ正直に對する矜持でもなく、自己の惡に對する公然たる矜持である。善に對して反抗し得る力の感覺に伴なふ矜持である。それは力の感覺に伴ふ矜持であるが故に、少くとも形式上人格の尊威の感覺と有緣である。之れ自棄の無緣なるに比して優つて居る所以である。併し乍ら其の力は善に對する謀叛に奉仕するものであるが故に、强ければ强いだけ自己の人格の惡を證しするものである。故にその力を矜る事は錯誤である、顚倒である。僞惡は善に對する公然たる反抗としては憎むべきもの〻中最も憎む可きものであり、其の最も憎む可きものと結合した虛僞である點に於いて、及び自己の人格の侮蔑を却つて矜持とする點に於いて、其れは他に比類のなき特殊な卑しむ可きものである。それは佛敎に所謂「正法を誹謗する罪」若しくは基督敎に所謂「聖靈を瀆す」罪であつて、赦さる可らざる罪とされて居るものである。神佛の憐れみにも洩れる罪とされて居るものである。

併し乍ら尙立ち入つて考察するとき、僞惡とは奇異なる概念といはなければならない。僞惡は僞善と對立する反對概念である。然るに僞善とは善人の假面を被むれる惡人の意味である。故に僞惡とは惡人の假面を被むれる善人の意味でなければならない。然らざれば我々はたゞ惡人の一種と呼ぶべきであつて、僞惡者と呼ぶべきではない。然るに我々は何故に之れに僞の字を附するのであるか。そこには極めて深い意味が含まれて居る。卽ち我々は人間の本性を善なるものと考へざるを得ないのである。人間は人間である限り、本來善を尊び、惡を卑しむものである事を不知不識の間に信仰して居るのである。故に彼の本心から惡を好み、此れを矜ることは考へる事が出來ないのである。それは我々にそれ自身に矛盾の感を與へるのである。故に我々が此處に惡を矜る

一人の人間を見る時に、それは僞りであつて、彼の本心からではなく、彼の本性は依然として善を好み善を矜るものであると不知不識の間に推定して居るのである。故に我々は僞善者に對立する反對概念として彼等を僞惡者であるといふのである。故に我々は彼等を惡人の假面を被むれる善人として考へて居るのである。此の事實は實に有難き事實である。而して恐らくはただに我々が之れを先驗的に要求せざるを得ないばかりでなく、又事實として眞理に中つて居るのである、自分は總べての僞惡者は僞りの惡人であると思ふ。若し彼等が僞りでないならば、彼の持つて居る矜持は何處から來るのであるか。假令それが誤謬の上に成立する矜持であるとは云へ、苟くも彼れがそれを人格の力として矜る以上は、彼の内に人格の尊厳の意識、善の太源が存在する事を豫想しなければならない。否一層深く考察すれば、ただに僞惡者のみならず、自棄者に於いても亦彼が人間である限り、全然自己の矜持を棄て去つて平然たり得るとは思はれない。少くとも心に痛み若しくは曇りを、如何なる場合に於いても何等かの抵抗を感じるであらう。すらすらと水の低きに就く如くなす能はず、何ものかに逆うてなす感じを持たないわけには行かないであらう。然らば自棄者も亦僞りの自己侮蔑者である。また自卑者が僞惡者の一種である事は我々の既に考察したところである。然らば此の三つの概念は本來自家撞著の概念であるといはなければならない。即ち彼等は自から僞つて居るのであつて、自己侮蔑者の如く粧うて居るのに過ぎない。故に彼等の卑しむ可き點は眞正に自己侮蔑者であるところにあるのではなく、自己侮蔑者と僞るところにあるのである。若し然らずして斯くの如き順逆の顚倒が人間の本性から行はれ得るものとすれば、我々は人間の概念そのものを根本的に改約しなければならない。自分は人生に對する信仰を失はなければならない。故に自分は總べて此の種の罪惡を虛僞の一種に還元する。唯だその虛僞が神の律法と自己心内の聖靈の聲に反逆するものである點に於いて、且つそれを公然と標榜する點に於いて特殊な深き罪惡となるものであると思ふ。虛僞を厭ひ乍ら、虛僞に陷つて居るところに其の同情すべき誤謬があり、それが人性の最深の罪惡を賭して居るところに悲壯なる冒險がある。併しそれは實に恐るべき事である！

以上自分は卑しむべきものを檢査し、その性質を吟味し、その由來を闡明し、その卑しむべき度を測量した。人性の卑しむべきものは尙之れを以つて盡きないであらう。併し恐らくは同樣な

由來こ性質こを持ち、同樣の原則に依つて量定せらるべきであらう。卑しむ可きものは總べて人格の尊威の感情の缺乏より生じる。それは畢竟自己に對する罪惡である。他人に害惡を與ふる場合に於いても、それが卑しむ可きものこなる所以は自己に對する尊威の不足にある。一層適切に云へば自己の内に嚴存するこころの、自己ならぬ公なるもの、萬人に普遍する道、之れを宗教的に云へば、神の屬性が個人に内在分有されて居るこころの、聖靈に對する反逆である。我々は卑しむべき行ひを爲す事に依つて、憎む可き行ひを爲す事以上に、自己の内なる神に叛くものこ云はなければならない。

心なき業に就いて

此處に自分が考へるのは人格の「仕上げ」こ「磨き」こに就てゞある。我々は憎む可きものや卑しむ可きもの等の罪惡を犯さないこ云ふだけでは、人格が未だ完成したこは云へない。それ以上に我々が若し眞に高貴を願ふならば、人格の仕上げこ磨きこが充分に行き屆かなければならない。我々のカルチュアこはすなはち此れである。我々は一つの玉の如くに圓滿にして完成せる人格こならむ事を願はなければならない。固より斯くの如きは或る人々に取つては、有閑にして餘裕ある詮議立てゞあらう。若し我々の生物學的存在を維持する事さへ脅やかされて居るならば、我々は先づ其の保證を得る爲めに心身を勞して餘裕無く、道德の問題さへも省みる事が出來ないかも知れない。今日の或人々が云ふ如く、我々が生命を脅やかされる時、暴力や殺人等の憎む可き行爲も肯定され、我々が食に飢ゑる時、窃盗や、賣淫等の卑しむ可き行爲も是認されなければならないかも知れない。故に憎む可き卑しむ可き行ひより自由こなれる限りはそれ以上を要求するが如きは贅澤の沙汰こなさるゝかも知れない。自分が此處に考ふるが如き問題は「衣食足つ

て」後「知る禮節」の問題であつて、衣食足らざる者に取つては無意義であるかも知れない。自分はかゝる言説には充分に同情し得る者ではあるが、自分はその人間的同情を壓へて、少くとも次の二點を主張して置かなければならない。

第一に我々が人格の仕上げと磨きとに於いて最も完成したる人と考へる聖人は、必ずしも所謂衣食の足つた人では無く寧ろ物質的貧窮の中に暮して居た人である。聖貧の士である。「疎食を飯ひ、水を飲み、肱を曲げて枕」した孔子や、食を人々の門に乞ふたフランシスである。殊に自分が此處に特に考へんとする心なき業に就いて、最も纖細にして鋭敏な神經を持つて居た彼の良寛の如きは顔を洗ふにも味噌を擦るにも一つの鉢を用ひた程貧しさを極めた人である。故に人格の仕上げと磨きとは必ずしも衣食の足つた者のみに意義ある問題であるとは思へない。固より一般の人に取つてカルチュアの問題が衣食の問題よりは緊要で無いのは當然である。衣食足らざる時人格の仕上げや磨きに心を配るだけの餘裕の持ち難き事も當然である。併し此處に嚴肅なる當爲の問題に就き我々の人間的同情を超克して考へる時、彼の聖貧の人が既に達し得たところの人格的完成は、一般の人々に對しても、貧富に關はらず、課せられなければならない道德的意義ある問題でなければならない。我々が往相の世界に立つ時(「道心の三つの相に就いて」參照)危急に迫れる人間に取つても尙殺人は惡である。飢餓に瀕せる女に取つても、賣淫は猶卑しむ可き行爲であり、寺門に施しを乞ふ乞食に取つても、良寛の所謂「布施の多い少い云ふ事」は心なき業である。第二に我々は凡そ當爲の問題に就いて考ふる時、リップスの云ふ如く我々の個人的制約を離れて、一般の問題として考察しなければならない。卽ち我々の主觀的事情は如何にもせよ、凡そ一人の人間が其の人格價値を最後迄徹底して求める時、我々は如何なる事を心懸けなければならないかの問題を考察しなければならない。卽ち一般に人間としての立場、人類としての見地に於いて、考察しなければならない(リップス倫理學の根本問題參照)。故に人格の仕上げと磨きとの問題の如きも、只だ有閑階級のみの問題としてゞはなく、總べての人類に通ずる公な問題として意義を持ち得るのである。我々の生存の意義、凡ての價値の究極は人格價値である。我々の衣食住は此の價値を生かすための條件である。故に我々の衣食住が安定した時、我々は必然的に人格價値を追究して遂に其の仕上げと磨きとの問題に迄到達す可き筈である。故に衣食住が安定するとは否とに關はらず、我々の人格の仕上げと磨きとの問題は依然として常に我々の究極の問題になる

のであるが、たゞ我々が、不幸にして衣食住の安定を缺く時、其處迄手が屆かないのに過ぎない。然もそれは一般の人の常であると云ふに止ごまり、聖人は衣食住の不安定の中に於いて、反つて人格の仕上げと磨きとを成就したのである。否寧ろ人格の仕上げと磨きとを成就せむが爲めに、衣食住の不安の中に生きざるを得なくなつたのである。固より我々は聖人ではない。併し乍ら我々が理想を設定せむとする時、我々は自己を聖人の道にも堪へ得る者として、即ち其の道に依つて少くとも自己を責め得るものとして、考へなければならない。然らざれば、凡そ道德の問題を論ずる事は初めから無意義となるからである。

我々の人格の仕上げと磨きとに於いて、我々が最も戒めなければならない事は心なき業である。我々が已でに憎む可き者、卑しむ可きものとして考へなければならない如き罪惡から放たれたる後は、我々は自己の人格の尊嚴を棄却し、汚辱するが如き著しき不德は犯さないであらう。他人から爪彈きされ、面を反けられるが如き所業は爲さないであらう。少くとも我々は相當の品位を有する人格として他人の前に通用するであらう。併し乍らそれは我々が人格として通用したと云ふに止ごまり、我々の人格が特に他人を牽き附け、尊ばしめ、慕はしめる力は其れ以上の人

格の匂ひ、空氣でなければならない。況して自分の德の爲めに他人を德に導き、善に化せしめむが如き virtue はそれ以上の積極的な力でなければならない。心なき業は我々の人格の匂ひと空氣とを高貴ならしめる爲めに、必ず避けねばならない行爲である。他の如何なる美點と力とを具へて居ても、我々が心なき業を爲すならば、我々の人格は高貴であるわけには行かない。床しきものであるわけには行かない。心なき業とは、心使ひなき業である。思ひ遣りなき業である。同情なき業である。其れが最も人間的な形を取つて現れる時は、無智や、無作法や、我儘となつて現れるのであるが、此等の行爲の生ずる根本は、凡そ調和に對する感覺の缺乏に存する。凡そ「調和的」なるものを愛する心が乏しいところより、凡ての心なき業が生ずるのである、凡そ調和的なるものは、此の世界に於いて最も高き心である。美である。力の感じさへも此の境地に於いては、一つの均衡を保つた靜けさとなるのである。我々は天的なるものを調和的なるものとして描かざるを得ない。故に一つの人格が高貴である爲めには、其れは豐かであり、力强くあるだけでは不充分であり、その上に調和的なるものでなければならない。「和氣」は君子の最後の德でなければならない、此の凡そ調和的なるものに對する愛が乏しく、感覺が鈍き時、我々は上は造物主に

對し、下は草木や無生物に對して心なき業を爲すに到るのである。此れを支那風に言ひ表せば凡そ「禮」に對する感覺の缺乏より總べての心なき業が生れるのである。例へば、此處に少數の親しき人々が集つて晩餐會を開いたとき、若し其處に一人の招かれざる客が侵入して來たとする。此の場合、其の客の行爲が、心なき業であるとすれば、其れが其の晩餐會の調和を破るからである。併し乍ら若し其の招かれざる客が優れて德のある人であり、又集れる人々が同じく德のある人々であるならば、其の侵入者は却つて一座の調和に刺戟と變化とを與へて、其の調和を一層豐富に、力强くせしめる事も出來、又集へる人々は其の侵入者を受け入れる事に依つて、其の晩餐會を一層樂しく生々させる事も出來るのである。卽ち我々の調和に對する德の如何に依つて一つの行爲が心なき業ともなり、或ひは無邪氣な行ひともなるのである。又例へば前にあげた良寛の所謂「布施の多い少い云ふ事」が心なき業となるのは、たゞ彼が慾深いと云ふだけからでは無く凡そ與ふるものと受ける者との間の調和の感覺の缺乏の爲めである。我々は與ふる者が無私の動機を以て、又物吝しみせずして與へ、受くる者が此れを强ひざるは勿論、物質の多少を問はず、此れを感謝して受ける事に依つて、初めて授受の問題に關する調和の意識に達するのである。故に「布施の多い少い云ふ事」は施す者の如何を問はず、其れは受くるものゝ側に於ける心なき業である。故に同じく良寛は「くれて後其の事云ふ」事を以て心なき業の一つとなして居るのである。此れ受くる者の如何を問はず、與ふるものゝ側に於ける心なき業である。此の二つの行爲は共に授受の問題に關する調和の感覺の缺乏より生ずる。又失戀の人の前にて戀の幸福の話をする事が心なき業となるのは相手にその寂しさを增さしめる事を慮らざる相手と、場處と、時との宜しきに適はざる無感覺の爲めであつて、相手を悲しましめむとする事を意圖して爲す無慈悲の行爲と同一ではない。此の場合一人の人間が失戀に苦しみ、他の人間が戀を得て喜び、其の二人が語り合はなければならないと云ふ一つの不調和な出來事に對して感覺鈍きところより生ずるのである。若し其の感覺鋭き者は出來るだけ其の不調和を目立たしめざるやうに爲す筈である。更に一層立ち入つて考へれば、此の不調和をも調和と感じ得る程に此の世界の調和を願はずには居られない人は、かゝる行ひをも心なき業となさずして、失戀の人と戀に浸れる人と、共にその戀に就て語り合ふ事を最も强くして、深き調和ある事と感じ得る迄滿足しないであらう。故に調和の求め方が公であり、男性的であり、悲壯であり、一言にして盡せば積極的である場合と、私的であり、

女性的であり、偸安的であり、一言にして盡くせば消極的である場合とは、我々が心なき業として考へる行爲も自ら相異して來る。我々は出來得る限り積極的な處に於て調和を求めなければならない。例へば病人の傍にて花見の話をするのは普通の場合に於いては心なき業である。我々は其れを思ひ遣りなき行爲と考へるのである。併し乍ら其の病人が若し素直にして且つ强かつたならば、他人が花見の話をして呉れる事を喜び、若し自分を憐れむで花見の話を避けるならば、却つて心に適はないであらう。現に自分の如きは長き鍛錬の後、今日に於いては、他人の話を素直に聞く事を喜び、他人が氣兼ねする事を却つて苦痛とするに到つて居る。此の場合に於いて病人の傍にて花見の話をする事は必ずしも心なき業ではなく、寧ろ其れを心なき業と感ずる事は、病人の側の德の不足である。その病人は其の人を羨まずして、其の花見の光景を聞く事を喜ぶ程素直になる可きであつたのである。其れは病人が負はなければならない試みなのである。我々が調和に就いて考ふる時、我々は個人的制約を離れて——即ち病む者が自分であり、花見る者が他人であると云ふ意識を離れて、一般に一人の病人と一人の健康者との間の調和として、最も積極的なる處に調和を求めなければならない。積極的なる調和とは積極的により大なる生命價を創り出さむが爲めに負ふ可き者に負はしめて求めるところの調和である。例へば此の病人と健康者との花見の場合に於いて、出來る限り生命價を大ならしめる調和は、病人に義望を克服せしめ、健康者に姑息な同情を克服せしめ、病人は素直な心となつて耳を傾け、健康者は病人を慰めんが爲めに物語る事に依つて一つの調和を求める事である。從つてかゝる調和は一つの悲壯である。凡そ克服と悲壯とを伴はずして一つの悲劇的事件を調和に導かむとする時、其れは姑息なる偸安とならざるを得ない。負ふ可きものを負はしめずして調和を求める事は消極的なる卑屈である。心なき業は思ひ遣りなき業ではあるが、其の思ひ遣りが私的にして人間的なる時、所謂婦女子的若しくは好々爺的同情となつて、彼のツアラトウストラの嚴しく排斥したところのものとなる。斯くの如き人間的同情は我々の成長を阻むものである。故に心なき業は我々が眞に同情すべき時に、同情なき行爲をなす事でなければならない。同情すべき時に同情せず、不必要なる場合に思ひ遣りなく振舞ふ事でなければならない。例へば忠臣藏の判官切腹の場に於いて、檢死と城受取りの役人たる石堂と、藥師寺との二人の使者に於いて、石堂の示した同情と寛大とは當に同情すべき時の同情であつて、彼は役目に反して居るのではない。併し藥師寺の振舞ひは同情すべき時に

同情せず、然も不必要なる時に思ひ遣りなく振舞ふのであつて、心なき業の典型的なるものである。我々は主君の安否を氣遣つて息せき馳せつけた由良之助が、然も檢死の役人を憚つて進み兼ねて居る心と、其れを知つて、既に切腹したる主君の傍に咫尺する事を許し、促す石堂の心との間に最も時と場所とに相應しき調和を感ずる。之に反し、悲嘆に暮れて居る家臣達の心と、已むを得ずして此の無慈悲な役目を仰せ附かつたのに過ぎ無い藥師寺のあらけなき心との間に不適當にして不必要なる不調和を感じざるを得ないのである。凡そ必要であるか、不必要であるかと云ふ事は心なき業であるか否かを決定する最も重要な標準の一つである。それが必要である時は、已むを得ないものとして許される行爲も、其れが不必要である時、其の行爲を出來得べくば爲さゞらんと欲する心が無かつたと云ふ點に於いて、動機上許し難きものとなる。例へば他人の罪惡を責めるを爲す事を欲しない乍らも、已むを得ずして敢て爲す場合もあるであらう、併し他人が既に其の罪惡を認め、且つ其れを悔い改めて居る時、猶此れを責むる事は不必要であるが故に心なき業である。此の意味に於いて、逃ぐる敵を追ふ事や、人の嫌がる點に觸れる事や、自己の幸福を不幸なる者に見せびらかす事や、動物を虐待する事や、草木を傷附ける事等は心なき業である。生業（なりはひ）の爲めにすなどり」する事は許されても、なぐさみに鳥魚を殺す事は心なき業である。職務の爲めでなく、他人の罪惡や過失を發く事は心なき業である。他人の無邪氣な試みや催しに、けちを附ける事は心なき業である。他人が矜つて居る時、其の「鼻を折る」事は心なき業である。童子が積み重ねて居る石を押し崩す鬼の如く、總て他人の企てを何の必要もなく此れを毀す事を喜ぶこころの心なき人が如何に世間に多い事であらう。又一つの法規がある時、不必要に杓子定規を以て其の內容を解釋し、其の適用を面倒ならしめる官吏の行爲の如きは心なき業である。

又或行爲は假令其れが必要であつても、時と場合のよろしきを得ない時は心なき業となる。例へば過失を重ねる子供や、召使や、弟子等に對して、それを戒しめる事は必要であつても、他人の面前にて此れを叱咤するが如きは心なき業である。他に適當な時と場處とを選ぶべきである。

説ひの爲めの催しの席にて、餘り眞面目（シリアス）なる、人々の心を緊張せしめ過ぎる演説を爲すが如きも其の內容が其れ自身に於いて如何に立派であつても、心なき業である。出立の準備に忙しく或は何事かに心を奪はれて餘裕なき時、眞面目なる、また入組むだ相談を持ち掛ける如きも心なき業

である。我々の生理的必需と云ふものは必要と云ふ點に於いて、最も典型的なるものであるが、同時に最も時と場所との適當を要する點に於いても典型的なるものである。生理的必需が時と場所との適當を缺く時に生ずる心なき業は極端なる無作法となつて現はれ、自他の威嚴を傷付けないでは置かない。其の具體的な例を擧げる事は避けよう。其れは又一つの心なき業であるからである。

我々の禮儀若しくは作法と云ふものは、調和に對する我々の感覺が、日常生活的な部分に現はれたものである。卽ち此れに從ふ時、我々の日常生活が、最も調和ある形を取る事が出來るのである。固より不調和な心を以て禮儀作法の形式を取る事が調和を生み得ない事は當然である。併し乍ら我々の心が素直である時、我々の調和を愛する心が、其の形を取る時最も良く生かされるのである。斯くの如き形式の一つの系統となれるものが禮儀作法である。固より禮儀作法の形式は固定せずして變更すべきものである。又必ずしも或る一定の禮儀作法に從はなければならない事はない。併し禮儀作法には其の生じ來つた原因と由來とに正しき意義があり、何等かの形に於いて我々が禮儀作法を持たないならば、恐らく我々の生活は文化(カルチユア)あるものとなり得ないであらう。

我々は禮儀作法を生み出す力を尊ばなければならない。我々は天國を想像する時、其處に最も自由なる美しき形に於ける「禮」の理念を思ひ浮べざるを得ないのである。支那に於いて、古來「禮」を尊び、詩、書、樂等と共に士の必ず修むべき德となされ、彼の「禮記」の如き精緻なる軌範を生じた事は、其處に、ある經世的な目的が含まつて居るとは云へ、東洋人の心が如何に調和と高貴とを愛して居たかと云ふ事を示して我々をして敬意を持たしめるに足る。故に我々が禮儀作法に反する行爲を爲す時、其れは又心なき業となる。其の父母に敬語を使はぬ子女や、老人や、長者に推讓せぬ若者や、師を敬はぬ弟子や、先輩を輕んずる年少者の行爲は心なき業である。斯くの如きは固より人間が人間として對等である事を認めた上に於いて、其れ以上に生ずる或る意識である。人間が人間として對等であるが故に、師弟や、親子や、長幼の序別を無視するが如きは貧弱にして、淺薄なる心である。我々は父母や、師や、長者を敬ふ事に依つて、些かも自己の人格が低められたと感じない。寧ろ其の反對をなす事に依つて、自己の人格の粗野なる事を感ずるのである。ダビデがエホバの祭壇の前にぬかづく事に依つて、ダビデの王としての威嚴は少しも傷付けられない。キリストがヨハネの前に跪いて其の洗禮を受けても基督の神の子としての尊嚴は少し

も損はれない。クララがフランシスの足下に俯して此れを拜しても、和紀郎子が王仁の爲めに履を揃へても其の清さと尊さとは毫末も減ずる事はなく、反つて床しさを添へるのである。デモクラシーは人間が人間として對等である事、如何なる人格も其の獨立と自由とを保持する權利を有する事を原理として居る限りに於いて固より正當である。併し乍ら我々が自ら欲して、自己の人格を卑しめる事無く取る處の獻身や、恭敬や、推讓やの禮をも排斥する時に、其れは其の正しき限界を越えて居る。凡て一般的なる原理以上の個性的にして特異なる部分は、我々の凡ての文化を複雜にして精彩あらしめる積極的內容であるが故に、決して猥りに此れを排斥してはならない。我々の精神の微妙なる現れ方、感情の複雜なる陰影はかゝる特異なる部分に於いて、最も具體的な形を取つて現はれるものだからである。又純粹にデモクラチックな對人關係に於いても、其の相互の人格の獨立と自由とを尊重する爲めにも、其の共同生活を秩序あらしめ、便利ならしむる爲めにも、禮儀作法は又必要である。斯くの如き禮儀作法に反する事も心なき業である。例へば他人が自分の厚意をアクセプトするかしないかを待たずして、猥りに此れに働きかけ、相手の迷惑となる事をも顧みず、好意の押し賣りを爲すが如きは此れである。假りに學資に窮せる一人の青年を見て、此れに學資を補助せんと欲する時、其れが純粹に好意から出て居るからと云つて、我々は只金錢を與へればいゝと云ふわけには行かない。其の青年が學資を受ける事をアクセプトするか否かを待たなければならない。かゝる神經を費す事なく、只學資を出して遣れば喜ぶであらうと思ふ人に對して、其の青年が或る侮辱を感じ、此れを拒絕したとしても當然である。其處にパトロンたらんとする者の禮儀がある。況して見知らぬ婦人に對して此れを戀慕したからと云つて、直に手紙を送り、許可を得ずして訪問し、狎れ〳〵しく振舞ふ事は心なき業である。其處に戀する者の作法がある。自分が「或る表出に就いて」の中に書いた如き凡ての粗野と、狎慢と無作法とは心なき業である。此等は畢竟相手の人格の獨立と自由とを尊重せず、且つ自己の心情が粗野にして平淺なるが爲めに、他人の心情のデリカシイを推察する事の出來ない所より生ずるものであつて、自己の人格の低卑なる事を示すものである。凡て相手の迷惑となる事を慮りなく爲す事は心なき業である。故に何が相手の迷惑となるかを知らざる時我々は心なき業を爲さゞるを得ない。故に、我々は心なき業を避けむと欲すれば、先づ對人關係に於ける日常生活の事實を知らなければならない。禮儀作法は此の事實より發生したる行爲の形式的規範である。例へば未

知の人に面會を求める時、其の人の信用して居る知人の紹介狀を持ち、豫め許可を受け、日時を定めて訪問する事が、古來禮儀作法に適ふとされるのは何處より生じるのであるか。其れは我々の日常生活の事實に於いて、多くの詐欺師や、利用せんとする者や、好奇心ある者等の訪問を受け、然も業務に忙しく、時間の制限あるが故に、正しくして緊要なる動機を持つ訪問者を、不正にして無意義なる訪問者から防がむが爲めに、紹介狀の必要を生ずるのである。又我々には種々の個人的事情に依つて、他人と面會する事能はざる場合があり、又他人との約束や、業務の能率等の爲めに時間の都合があるが爲めに、豫め承諾を受け、時日を定める必要が生じるのである。此の必要より生じた訪問の禮儀、作法を守らずして訪問した時、如何なる結果が生じるであらうか。第一に主人は客を信用する事が出來ない。然も疑つてかゝる事は心苦しい。面會を謝絶すれば客の心は傷つき、面會すれば仕事の計畫は亂され、他との約束は破れる。即ち主人の立場は迷惑なる窮境である。ディレンマである。其の結果は主客の間が不調和とならざるを得ない。故に此の不調和を避けむとする智慧の爲めに、一定の禮儀作法が必要となるのである。併し此の事實の智識なき者はかゝる禮儀作法を煩瑣にして、形式的なりとし、主人の愛の缺乏に歸するであらう。

斯くの如きは純眞にして人間らしき人々の却つて犯し易き心なき業である。自分は嘗つて西田幾多郎氏を訪問せむとして、氏が面會日を指定されたと云ふだけを以て、氏に對する尊敬を放棄せむとした事があつた。其れは事實の知識なき處より生じる生一本なる誤謬である。禮儀作法が我々に取つて必要なのはこれを守らない時、人と人との間の調和が破れるからである。故に調和を愛する者は自ら禮儀作法を重んずるに到るのである。又其れは能率上の便宜より生ずる。我々は禮儀作法に從ふ時最も能率を上げ、却つて無駄を省き、目的を達する近道を歩むのである。彼の茶道の如き精緻なる禮儀作法さへも、其れは禮を重んずる我々の「こゝろ」と、實際に必要なるあらゆる手續きとを最も簡單なる方法に據つて果さむとする原理より工夫されたるものである。即ち其の道に從ふ時、主客の間に最も美しき和樂を生じ、種々の手拔かりや、過失なく、最も簡素に取り運ばれるのである。又我々が雜沓の場所に於いて、或る禮儀作法を持つのは、能率上の便宜の爲めである。我々が公共の場所に於いて、傍若無人に振舞ふ事を心なき業と爲すのは其の爲めである。固より斯くの如き禮儀作法は其れが純粹に形式的となり、只便宜の爲めの手段に過ぎない時に於いては、此れに反する事は我々の人格の價値を決定する程の重大なものとはならない。我々

は所謂文明人の公共的なる禮儀作法を極めて良く守り乍らも、最も本實的なる點に於いて、卑しむ可き人格ある事を知り、又反對にかゝる形式的方面を無視し乍ら、人格の本實の高貴なる人を知つて居る。併し乍ら其れは禮儀作法を重んぜざる處に高貴さがあるのではない。又禮儀作法を守る點に於いては、卑しき人にも美點があるのである。何事も強調することを愛する或る時期に於いては、我々は「心」を愛するために、好むで形式を輕蔑する。併し乍ら眞の調和はそれに相應しき形式に宿る心である。心を盛る形式が相應しくない時、其の心も眞に調和に達する事は出來ない。例へば圓滿なる「心」の宿る最も相應しき圖形は圓である。圓以外の如何なる圖形に於いてもしかく圓滿なる「心」を現はす事は出來ない。我々は徒にフォルマリズムを輕蔑してはならない。併し乍ら如何なる場合に於いても、心は主であつて形は役である。從つて禮儀作法の形は我々の日常生活の事實が變化するに從つて變化して差支へなく、又變化すべき筈のものである。又我々の心の力（ダアチュー）に依つて形を超越する事が出來る。例へば前の例に於いて、招かれざる客が却つて一座の調和を亂す事なくして、此れに精彩を添へ得る德を持つて居るならば、彼は招待を受けずして出席すると云ふ禮儀作法に對する違反を自分の德に據つて超越したのである。故に我々の德が成

就すればするだけ、我々の禮儀作法は無駄を省き、簡素にして美しきものとなり得る。紹介狀を持つて人を訪問すると云ふが如き禮儀は、美しき禮儀では無い。其れは惡と虛僞との存在を豫想し、是れに打ち勝たむが爲めに生じたものである。若し我々の間に欺くものがないならば、我々は只素直に門を敲けば足りるのである。天上の禮と地上の禮とは此處にも亦違きを異にする。前者に於いては禮とは只美くしきものを最も良く生かさむが爲めの形である。後者に於いては、美しきものを醜きものより守らむが爲めの形である。天上のよき人とよき人との間の挨拶は如何に美しき禮であらう。凡そ人と人とが挨拶を換はしてゐる光景は地上に於いて最も美しきものゝ一つである。自分は其の美を見出し得るに到る迄には長き歲月を要した。其處には何等の實利若しくは必要がないが故に、却つて形式的虛禮的の感じを與へたのである。併し心の深まるに從ひ地上の醜くして限られたることを體驗するにつれ、實利と必要とを含まざるが故に、却つて美しき淸き感じを與へるに到るのである。我々は地上の運命として常に實利と、限界の中に歸縛されて居るのであるが、路上に偶々知人と出會ひたる時、或ひは久闊の友を訪ねた時、暫く凡ての俗事を忘れて心から安きを問ひ、祝福を送るのである。「お久しう御座います」「お變り御座いませ

んか」「お蔭樣で」と問ひ又答へる短き言葉の中に、限り無き意味が籠つて居る。或は「お早う」と云ひ、「お休み」と云ふ言葉にも、愛と祝福との美しき味ひが含まれて居る。我々は挨拶をする時此等の實利と必要より放たれたる愛と祝福の美しき言葉を、然も單純にして心からなる禮儀の形を以て表現するのである。大人の世界に於いてかゝる美しきものは恐らく少いであらう。固より禮儀作法の形式のみが複雜であつて、自由な美しき心が伴はれない時、其れが忌む可きである事は云ふ迄も無いが、禮を辨へず、無作法に過ぎる事は一つの低卑である事は免れない。「野人禮に習はざる」の趣きは愛す可きものであつても、高貴である事は出來ない。故に相應しき禮儀作法を無視して振舞ふ事は心なき業である。凡そ相應しさは一つの骨である。我々は相手と時と場所とに應じて如何なる行爲が、如何なる度合ひに於いて相應しきかを直感するのである。其れは智慧と德と教養されたる感覺と趣味とが自ら體得するのである。凡そ物に徹底する事は人格の力として根本的に重要なるものであるが、調和の感じは又人格の力の靜的な現はれである。インチンシチーが大であると云ふ事だけでは人格の仕上げと磨きとに於いて未だ充分ではない。其の外に「程の良さ」がなければならない。我々が富士山をかく迄仰ぐのは、其れが高く雲上に聳えて居るからだけではない。其の形が實に美しく調和して居るからである。殊に我々が地上の最も美しきものとして崇拜すべき淑女の名に價ひする者は其の心情に於いても、態度に於いても——其のすべてのものごしつまはづれに於いて、高貴にして調和したるものでなければならない。其れは一切の心なき業から自由となれるものでなければならない。自分は心からかゝる淑女に憧憬するものである。彼のダンテがベアトリチエの美に打たれたのは彼女に於いて眞の淑女を見出したからであつた。彼は路上に於いて「此の妙へなる少女が白き衣を着て二人のよほど年長けたる貴女の間に並むで」居るのと逢ひ、彼の女が「言葉に盡くし難き禮讓より、いとも德高き仕方にて挨拶した」時に、彼は其の爲めに「其の時總ゆる祝福の限りを見る心地を覺えた」と「新生」に書いて居る。其の時の印象がダンテの一生に決定的契機を與へたのである。斯くの如き天的なる淑女に對しては、我々の一つの心なき業も彼の女の貴さと靜さを侵し傷つけ、又彼女の些細の心なき業も、全く彼女の美と釣合ふ事能はずして、淑女としての全體の調和を毀して終うであらう。我々は現實に於いて斯くの如き淑女に出會ふ事は至難であらう。併しダンテが若くして此の世を去つたベアトリチエを眞の淑女として心に祀つたやうに、天上の淑女の理念を、最も調和した、天

的に祝福せられたものとして憧憬の的とすべきである。かゝる憧憬を以て、現實の貴夫人を眺める時、我々は如何に幻滅を感じなければならないであらう。例へば一人の美しく、高貴に裝へる貴夫人を見たとする。併し彼女が一人の召使ひにはしたなき言葉をかける時、或は貧しき者に物客しみし、若くは自己の地位を誇るが如き感じが閃めくならば、其れは貴夫人の名前に慣ひしないものである。貴夫人は天上の淑女の面影を傳へて居る限りに於いて貴夫人である。眞の貴夫人は善と調和との華であつて。啻に自らが善と德とを具へて居るばかりでなく、ダンテがベアトリチェを讃めて居るやうに、其の人を見る事に依つて、周圍の者が善と德とを得る如きものでなければならない。ダンテは「新生」の中にベアトリチェの德が「如何に他の人々の上に働くか」を語らむが爲めに一つのソネットに次の如くに歌つて居る。

わが戀ふ君を貴女たちのあひだに見るものは
ありとあらゆる福ひをすべて完たく見るなれ
彼女とともにあゆむものは美しき恩寵を
神のみまへに感謝すべきなり、しかして
彼女の美しさにはたかき德あれば
れたみごころはいかなる人にもおこることなく
なほ人々をして彼女とともに貴とさと
愛と信とを衣として歩ましむ。
彼女の面わはすべてのものを謙だらしめ、
たゞ彼女ひとりたのしきすがたなるのみならで、
みな人は彼女によりて響れをぞうく。
彼女の行ひはあつき優しさありて、
こころにかの君をもとめ思へば
人みな愛の妙へなる甘きにためいきすなり。

我が國に於いて自分が貴夫人の鑑として最も尊ぶのは彼の光明皇后である。皇后は美しく、德高く、信心深く、人民に善と美との光りを被らせる程の、其の名に相應しき后であつた。厚く三

貧を敬ひ、寺を建て、貧しき者、病める者を憐れまれた。手づから浴室に於いて癩病やみの體を洗ひ、また路傍に於いて乞丐に化成した阿閦佛に逢はれたと云ふは實に美しき說話である。我々は皇后が乞丐を惠み、其の乞丐が實は佛であつた時に、跪いて佛を拜する皇后の姿を讃美せずには居られない。凡そ帝王が神を敬ひ、皇后が佛に禮することには一種特別な美しさがある。彼等は地上の最高の權力者であるが故に、彼等が拜するは權力に對してゞはなく、其の凡ての地上の者を拜跪せしめる權力を以ても、尙拜跪せなければならない德の力を拜跪するのである。然も此れを拜跪する事に依つて彼等の威嚴は益々加はるのである。其處に天輪聖王の特殊な美しさがある。光明皇后の場合に於いては、聖武天皇を輔けて天輪聖王たらしめ、國母としての最高の地位にあつて其の美と德とを以て遍く人民を德の光りに浴せしめたのである。何者も聖貧の人の前に跪く美しくして高貴なる貴夫人程此の地上に於いて美しきものはないであらう。

自分は「父の心配」の小山夫人に於いて、又一人の母らしき、夫人らしき、年長けたる婦人を書く心算であつた。自分はあの場合小山夫人は最も相應しく振舞はせた心算である。あの場合小山夫人が道子に對して賞讃と感謝の心を持ち、其れを表現したいのは固より當然である。併し其れをくどく言ひ現はす事は此の場合に相應しくなく、又自分の娘に幸福を與へて呉れた道子に對して、却つて露骨となるであらう。其れは心なき業である。併し乍ら其の感謝の心持を云ひ表はさない事は又人情を知らぬ心なき業である。故に小山夫人は此の溢るゝ賞讃と感謝の心を「ほんの一口だけ」表したのである。然も一つの實際問題を、道子にとつては實に重要な音樂を勉强する爲めに洋行すると云ふ問題を申し出たのである。あの申し出はあの場合相應しき事であり、相應しき仕方に於いて爲されたのである。然も其れは心と形との如何に依つては、最も露骨なオフェンシヴな心なき業である。小山夫人は充分に其の危險を知り乍ら、道子に對する愛の爲めに、道子に取つて此の大事なことを言つて遣らずには居られなかつたのである。其れは道子の心の悲しみを支へる一つの柱を與へむ爲めの愛であつた。夫人は道子の心を傷つけざらん事を充分に心使ひし乍ら、敢て其の申し出を爲したのである。其の申しでが心なき業とならなかつたのは夫人の德と眞心の爲めと此れを受け入れる道子の心の素直さの爲めであつた。あのシーンを只蛇足であると云つて斥けるが如き批評家は自分には調和に對する感覺の乏しき、心情淺き人としか思へない。我々の日常生活に於いて、斯くの如き心使ひは、實意の表はれる最も大事な機會であり、

從つて此れを素直に受け入れざる事は心なき業である。例へば或る貧しき人に何事かの勞を拂はせた時に、其の人が報酬を目的として働いたのではない事を熟知し乍らも、何等かの謝禮をしたいと願ふのは自然である。而して其れを品物を以てするよりも、金錢を以てする方が便利ならむと推察して一封を贈つたとする。彼は其れに依つて恩を返したと思ふのではなく、取引きが濟むだと思ふのでもなく、相手を恥づかしめる心算では猶更にない。其の金錢は感謝と實意との象徴である。此の場合相手が立腹し、無下に此れを突き返すが如きは心なき業である。此の場合には贈つた者は赤面する外はない。此の場合は無邪氣に素直に受け取るのが相應しい。無邪氣さと素直さとが缺乏する時、我々の日常生活は實に窮屈と不自由とに堪へないものとなるであらう。心なき業は我々の德の如何に依つて生ずるものであつて、行爲の形に依つて定まるものではない。或時は矜る事が心なき業であり、或時はへり下る事が心なき業である。無邪氣さと、蟲の良さと、人懷しさと、狎々しさと、威ある事と、猛き事とを區別するは、相手と、時と、場所とに依つて生ずる一つの呼吸であり、其の呼吸を直感するものは我々の德であり、其の德を磨くものは我々のカルチュアである。調和に對する我々の愛が我々を導いて、我々の人格を圓滿なるものに仕上げ、玉の如くに磨き、玲瓏たるものとならしむる時、我々は初めて心なき業から放たれて自由になる事が出來るのである。

最後に此處に最も深き心なき業がある、其れは我々が我々に生を與へたもの、造物主に對する心なき業である。即ち造られた者が、造り主の心に適はぬ所業を爲す事である。此れは根本的の調和に對する感覺の不足である。例へば、造物主は被造物が其の與へられたる生命を感謝して享け、造物主が其の生命を奪ふ迄、泌々と其の生命をエンヂョイする事を欲して居るにも拘らず、我々が其の心を享けずして、徒らに禁欲し、若しくは蟻の如くに只勞働のみを營むで、生を樂しむ事を知らざるが如き此れである。其れは慥に造り主の心に適はざる事である。我々は動物や、草木や小兒の生活を觀る時に、つくづくと其の事を感ずる。其の生き、成長し、喜び遊ぶ狀は實に美しい。自分は今でもはつきりと思ひ出だすことが出來るが、自分が小學校の三年生の時、習字の授業時間に、窓の下の町外れの街道を祭りの行列が通つた時に、我々の先生は暫く習字を止めて、其れを見る事を我々に許した。生徒達は筆を棄てゝ窓に倚り、此れを眺めた。併し自分は一人書き續けて、此れを見ようとはしなかつた。其の時先生は寂しさうな顏をして「そんな事をす

るものではありません」と云つた。自分は祭りを見ようともせずして、習字にいそしむ事を、勤勉な善い行ひであると思つたのである。併し其れは其の先生の心に適はなかつた。固より其の先生は親切な、勤勉な人であり、自分は特に其の先生に愛されてゐた。其の先生の名前も、顔も特別にはつきりと覺えてゐる。其の時先生は何故其れがいけないかを少しも説明はしなかつた。其れがいけないと云ふ事をはつきりと説明する事が先生にも出來なかつたのかも知れない。自分も此頃になつて、初めて其の事がはつきりと解つた氣がする。其先生は固より勤勉を好み、怠惰を厭ふて居るのである。併し子供達に自分が許した其れだけの樂しみは素直に樂しむで貰ひたかつたのである。斯くの如き心は、我々に生を與へたもの丶心にあるに相違ない。我々が素直に生命の喜びを享受しない事は神の心に適ふとは思へない。血眼になつて修業し、禁欲し、勞働するのみにて、其處に觀照と享受の餘裕を有せざる生活法は、被造物として相應しきものではないであらう。花鳥風月を樂しみ、異性を戀愛し、子供を育てゝ、樣々の無邪氣な遊戯を試みる事は神が許して居る事である。斯くの如き生命の享受に逆ふ事は心なき業である。又與へられた環境を有るが儘に先づ受け入れむと努力する前に、此れを改造せむとする事も心なき業である。神に從順な

る者は、先づ與へられたものを尊重し、自己の主觀を深める事に依つて、成る可く環境を其の儘に調和と觀じ得るやうに努め、然る後初めて改造の要求を起す可きである。自己の主觀を深めずして、只管與件を改造せむとする事は造化に對する心なき業である。又小兒に對して、餘りに教訓めきたる育て方を爲すが如きも此の種の心なき業に屬する。小兒は無邪氣に遊びたのしむべき筈のものである。彼等に理解し難き宗教の教義や、道徳的な觀念を吹き込み、又餘りに重き科業を課する事は心なき業である。無邪氣さを缺き、教訓めきたる事を語り、餘りに勉强に捉はれたる小兒は美しくない。自分は此の點に於いては西田天香氏や江渡氏に同じ難きものである。又山室軍平氏の「平民の福音」の中に載せられた善良な少女と不良少女との日記に於いても、自分は後者の日記に寧ろ善良さを感ずる點が多い者である。自己の慾望を犧牲にし、不幸なる者を、殊に經濟的に不幸なる者を救濟するのみが善ではない。眞に素直に、自由に生き、考へ、驚め、感じ、働きかける事は一層原本的な善である。我々の基督的愛と犧牲との善は、此の素直な、自由な心を以て、他人の不幸や、窮乏に對した時、自然に、必然的に起る時に於いて、最も純粹なのである。基督教的愛を教へる爲めに、無邪氣や、素直や、自由さを失はしめるならば、斯くの如

き子供の育て方は子供をいぢけさせ、子供の此の地に於ける最も大事な使命を損はしめるものである。此れは許されたものに對して、素直でない處より生ずる心なき業である。又總て物事を性急に餘裕なく、穿鑿し過ぎ、杓子定規的に規矩せんとすることも亦此種の心なき業に屬する。其れは此の造物主の博き心と、餘裕ある宇宙の調和に適はざるものである。一つの根本的方式を立て乍ら、例外を許すところに此の世界の博き心の一つの特色がある。例外無き事は一つの貧弱である。簡單である。例へば聖書にある「犬も亦食卓より落ちたパン屑を拾つて食べる」事を許す心である。大佛の鼻の穴に盜賊の住む事を許す心である。愛嬌ある怠け者を養つて置く事は勤勉なる長者の餘裕である。雲雀の如く唄ふ事しか知らない詩人や、此の世を厭ふ尼や、星を眺めて世事を顧みない學者や、死後の世界を夢見る事に生きる宗教家や、總て特色ある例外を、「總ての人が衣食住の爲めに勞働せざるべからず」と云ふ根本主義の蔭に受け入れて置く事の出來るのは世界の運行と、人類の文化史とが持たねばならない餘裕である。斯くの如くにして初めて萬物を容れて化育する宇宙の心に適ふのである。

心なき業の一々の具體的なる例を擧げれば、枚擧に暇ないであらう。(良寛の「心淺く見ゆるもの」といふ手記の中には數十の例が擧げてある。)總ての心なき業はものゝ調和に對する感覺の缺乏より生じ、或る時は他人に對する同情なき行爲となり、禮に適はざる振舞ひとなり、神と世界の心に反するいぢけた、不自然な、餘裕なき態度となつて現はれるのである。而して此れは卑しむ可き、憎むべき罪惡でなくても、眞に高貴を願ふ人格に取つては、其の仕上げと磨きとの完成に於いて、必ず避けられなければならないところのものである。此等の缺點と、曇りと、制限と歪みとから、自由にならない限り、我々は圓滿にして、自由なる君士人となる事は出來ないであらう。(一九二三・三・二三)

經濟的制的に就いて

我々は地上に於て、常に不斷に、經濟的制約の中に生きてゐる者である。此れは我々にとつては、「與へられたるもの」であつて、我々が此れを欲すると欲せざるとに拘はらず、我々は此の制約の中に生きざるを得ないのである。卽ち我々の地上に於ける運命である。故に我々は此の運命を享けるよりほか選ぶ事が出來ない。我々にとつて最上の道は、此の運命を享けて、最も良く此れに處する事である。故に自分は此處に此の經濟的制約の概念を明瞭にし、其の範圍と限界とを定め、從つて人生に於ける此の制約の位置を確定し、然る後、如何にして此の制約に最も良く處すべきかを考へ度いのである。其れは我々の精神生活にとつて、極めて大切な事であり、殊に今日の時代の、最も厭ふべき經濟と道德との混雜——更に一般的に云へば固有價値と利用價値との混雜を訂正し、精神生活全體を健かに、且つ透徹ならしめるに役立つと信ずるからである。

第一に經濟的制約とは何であるか。其れは我々が地上に於いて、我々の生活の目的たる人格價値を生かさんとする欲望に對して、外部より必然的に規定する時間、空間、及び物質の數量的、及

び因果的條件である。例へば我々は自ら生き、隣人をも生かさん事を欲する。此れは二つとも我々の衷心よりの願望である。故に若し我々が無限のパンを持つならば、我々は素より自ら必要な丈け取り、悅んで其他を隣人に頒つであらう。然し事實として我々は一定量のパンしか持たないが故に、我々は自ら食ふ事と、隣人に頒つ事との間に或る均衡を求めなければならなくなる。又我々は戀人と親とを共に愛する。然し一は甲地に、他は乙地にあるならば、其の愛を表現する方法は、兩者を同時になす事は出來ない。又我々が一つの家を建てんとする時、我々に必要なる居室と寢床とを得んが爲には、順序上先づ礎を置かなければならない。又一定の診察時間に患者を診察せんと欲する時、我々の願望は、出來得べくんば、凡ゆる患者を一人一人充分な綿密さを以て診察せんとするにあつても、或る一定の人數を限り、且つ各個人を或る程度迄の綿密さを以て遇する他に道がない。此れは只四個の例に過ぎないが、我々は、凡ゆる日常百般の行爲に於いて、此の如き時間と空間と物質との數量的及び因果的制約の下に立つてゐる者である。故に現實生活に於いては、一刻も此の制約を度外視して、何事をも考へる事は出來ない。この事は政治や經濟のみならず、藝術や道德に於いても同樣である。此の制約は何事をなすに當つても、我々が必ず處理しな

げればならない與件として、我々にとつて最も實際的なるものであり、且つ我々の精神の力を以て、如何ともする事が出來ない點に於いて、最も外部的なるものである。故に我々は何事に當つても、此の實際的、且つ外部的なる條件が滿されざる限り、其の實行不可能なる事を知るが故に、其他の點に於いて、如何に價値ある願望或ひは計畫であつても、此れを「浮いたもの」若しくは「空想的なるもの」として考へる。此れは確に當然の根據を含んで居るものである。如何なる願望や、計畫も、其れが實現不可能のものであるならば、其の實現せられたる曉に於てのみ生ずる價値を目的とする限り、其の願望や計畫には意義がないからである。從つて眞摯にして、實意ある願望者、若しくは計畫者は、必ず此の經濟的條件を充たし得る自信、少くとも關心を持つて居る筈であるからである。然し乍ら茲に明らかに辨別しなければならない事は、此等の經濟的制約が、我々にとつてかく迄意義を持つのは、何處迄も其の願望と計畫とが我々にとつて價値あるものであるからであつて、其れ自身の爲ではない。此の願望と計畫とが價値がないならば、如何なる經濟的制約も意義のないのは無論の事、從つて其の經濟的制約を處理する如何なる優れたる手段も亦何等の價値もない。故に願望と計畫との價値は本質的であつて、經濟的制約の意義は、從屬的

のものである。從つて如何に實現し得る願望や計畫であつても、其れ自身の價値が少いならば、其れ自身に價値大なる願望と計畫であり乍ら、實現不可能なるものよりも必ずしも勝つて居るとは云へない。此の二個の視點は、明らかに區別しなければならない。此處に實現不可能なる場合を後に讓つて、先づ實現困難なる場合に就いて考へるならば、恐らく何人も實現容易なる價値少き計畫や、願望よりも、實現困難ではあつても價値大なる願望と計畫とを以て、より優れたるものとなすであらう。然し乍ら此の場合に於いても、我々は現實生活に於いて、順序上先づ前者を選ばなければならない場合がある。例へば理想的社會を建設せんとする時、無政府主義と集中的社會主義とに於いて、理論上明らかに前者の方が價値大なる計畫であるが、其の實現の難易に於いては、後者は前者よりも遙かに勝つて居る。此の場合我々は、先づ後者を撰ぶであらう。然し乍ら此の場合後者が前者を其の實現困難なる故を以て、空想的として排斥する根據は何處にあるか。其れは本質的意味に於いては、存在しないと云はなければならない。其れは只便宜上の若しくは、順序上の根據にすぎない。然し如何に便宜上の根據であつても、結果より考へる時、一つの計畫が其の實現せられたる曉に齎らすべき價値を目的とする限りは、決して此れを無視する事は出來ない。故に此處

には明らかに二つの視點を必要とする。即ち計畫其れ自身の價値と、其の實現の手段に從屬して生ずる價値とを區別しなければならない。嚴密に同じ理由に依つて、教會的共產主義（カソリシズム）が無政府主義よりも更らに遙かに實現困難なる計畫であつても、本質的價値に於いては、最も優れてゐると云はなければならない。若し其の實現困難なる故を以て、集中的社會主義者が、教會的共產主義者を、空想的として排斥するならば、同じ權利を以て今日の國家主義的改革主義者は、集中的社會主義者を空想的として排斥し得るであらう。此の不合理を除去せん爲には、我々は本質的價値と從屬的價値とを區別する他に道はない。又例へばバラックの家と大理石の家とが存在する時、其れを如何に人類の多數が享受し得るかと云ふ視點より見る時、勿論前者は後方より優るであらう。然し一つの家として其れ自身に於いては、何人も後者が前者よりも勝つて居ると為すのであらう。此の二つの視點は區別しなければならない。若し我々に大理石が無限に存在するならば、無論我々は後者を撰ぶのである。我々が現實生活に於いて前者を撰ばなければならないのは、經濟的制約の爲に餘儀なくされるのにすぎない。此の辨別をなさずして、本質的に價値あるものを經濟的制約の爲に從屬的に生ずる價値を以て排斥し去る事は誤謬である。大なるもの、美なるもの、强きもの、豐富なる

もの、高貴なるもの、凡そ――其れ自身に價値の勝れたるものは、其の實現の難易、享受の機會の多少、因果的順序の前後如何に關はらず、尊重されなければならない。然し乍ら如何に從屬的なる價値と雖も、我々が實際に事實として、經濟的制約の下に生きてゐる限りは、或る一つのものを生み出ださんとする時、或ひは一つの行爲を決定せんとする時、我々は此の制約を無視する事は出來ない。例へば一つの演劇を試みんとする時、演劇として理想的なる演出をなす事が、他の隣人の飢餓を傍觀する事を條件とするならば、今一人の藝術家が如何程の物資と時間と勞力とを此の演出に捧ぐべきかは、一つの考慮さるべき問題である。此の場合此の藝術家の心中には同時に矛盾なく、願望としては、完全なる演出と、隣人の救助とが並立し得るのであるが、經濟的制約の爲に、此の二つが矛盾するのである。此の場合其の藝術家の正しき態度を決定するものは、何等かの他の原理でなければならない。完全なる演出を只單に贅澤として斥け、若しくは隣人の救助を、單に藝術的良心の不足として排斥する事は出來ない。只此處に我々は、如何に隣人の救助の爲とは云へ、一つの演劇として、完全なる演出を、不完全なる演出よりも尊重する事を忘れてはならない。故に現實生活に於いては、我々の前に我々の目的たる本質的價値を生かす爲に如何に經濟的制約を處理す

べきかの問題が置かれる。我々の正しき態度とは此の問題の合理的解決と云ふ事に他ならない。

然らば此の問題を合理的に解決すべき原理は何であるか。其れは其の行爲を決定せんとする時に於いて、最も良く自己の人格價値を生かし得るやうに行爲する事の他にはない。我々にとつて眞に固有なる價値は、即ち其れ自身に價値あるものは、人格價値である。(リップス倫理學の根本問題參照) 我々にとつて人格價値とは、自己に與へられたる本能の全體を意味する。此れを離れて何處にも人格價値の内容は存在しない。此の意味に於て、凡ゆる個々の本能的欲望は、それぞれに悉く自分を主張する權利を持つてゐる。只然し此等の諸々の本能的欲望は其れが人格全體の價値を如何程生かすかに從つて、上置と下屬との關係に於て、一つの體系を作らなければならない。そして我々が二個以上の動機の中から一つの行爲を決定せんとするに當つては、我々は主人的制約を離れて、人類的見地に立つて、客觀的に重要なる動機より先きに選擇しなければならない。(同書道德的正の項を參照せよ。)即ち其の動機が自己のためのものであるか、他人のためのものであるかに關はらず、客觀的に重要なるものより先きにするのである。例へば自己が花見にゆかんとする時、隣人の家が火事であるならば、花見は自己のためであつて、消防は他人のためである、と云ふ個人的制約を離れて、消防と花見が何れが客觀的に重要であるかに依つて、先きにすべきものと後にすべきものとを決定するのである。然し乍らかゝる動機も結局自己の本能を離れては意義を持たない。即ち自己の内なる花見の欲望と、消防の欲望との間の選擇である。一般的に云へば、自己の内なる個人的本能と、人類的本能との間の撰擇である。此の二つの本能は、共に自己の本能として、人格價値の内容をなすものとしては同一であるが、此の二つの本能を其の重要さの度に從つて、上置と下屬との關係に於いて、人格全體の要求の中に抱攝するのである。故に善とは、自己の凡ゆる本能の間の調和である。此處に忘るべからざるは、其れは調和であるが故に、凡ゆる本能が多少の度合に於いて必ず攝り容れられなければならない。上置する本能のみを肯定して、下屬するものを全然否定する事は調和ではない。例へば、自己の内の人類的本能が、如何に凡ゆる本能の中にて上置さるべきものであつても、其れのみを生かさんが爲めに、例へば、純粹に個人的なる享受の本能を無視してはならない。個人的享受の本能も必ず其の正しき度合ひに於いて、即ち人格全體を生かすのに最も適當なる度合ひに於て生かされなければならない。素より此等の凡ゆる本能は、此の人格全體の調和的關係に於いて、同時に生かされん事を要求する

ものである、我々は今此の體系をなせる要求を以て、經濟的制約に對するのである。此處に於て當面の問題は、其の經濟的制約を此の體系的要求に依つて、處理する事によつて、解決されなければならない。所謂希臘主義と基督教主義との對立の調和の道は　此の方法の外には考へられない。前の例に就いて云へば、完全なる演出をなさんとする欲望と、隣人の飢餓を救濟せんとする欲望とは、兩者共に生かさなければならない。只然し此の二つの自己の欲望を、自己の人格全體の要求の中に、其の重要さの度に從つて、適當の度合ひに於て、攝り容れねばならない。故に此の場合に於いては、此の二つの欲望が其の人の人格内に於いてそれ丈けの重要さを占めて居るかに依つて、決定されなければならない。例へば其人が藝術家であるならば、彼にとつては完全なる演出は、自己の使命である。即ち自己の内なる人類的本能である。隣人の飢餓を救濟せんとする欲望は、一人の個人に對する、自己の個人的愛の本能である。此の二つの本能は、其の藝術家の人格内に於て、主觀的制約を離れて、其の客觀的重要さを比較する時に、前者の方が大であるが故に、其の藝術家は、完全なる演出の爲の努力を先きにしなければならない。此れに反して、若し其の演劇が自己の使命でなくして、自己の個人的享受であるならば、我々は隣人の飢餓の救濟を先きにしなければならない。何となれば、他人の飢餓は其の人の使命を維持する爲の必須の條件であつて、其人の使命即ち人類的本能を、生かす爲に缺くべからざる條件である。故に此の場合に於いては、自己の個人的本能と、他人の人類的本能との對立である。然るに主觀的制約を除去するが故に、此の對立は結局自己の人格内に於ける個人的本能と人類的本能との對立に歸する。然して後者は前者よりも上置するが故に、此の場合其人は後者を先きにしなければならない。然らば何故に自己の人類的本能は、自己の個人的本能より上置されるのであるか。其れは我々が生命を公物として意識する處より生ずる。即ち生命は自己の私有物に非ずして、「與へられたるもの」であり、我々に生命を與へたるもの――神のものであると意識する處より生ずる。此の受身の意識を肯定しない限り、人類的本能が個人的本能より上置する事は我々にとつて、理解し難きものとなる。即ち人類的本能は、生を與へたるもの、神に對する義務の意識に外ならない。生命は神より與へられたるものであるが故に、自己の生命たるとを問はず、公物である。即ち人類的本能とは、神の前に於ける、生命を與へられたるものゝ連帶の意識である。即ち神が「人」を造つた時、其の「人」の上に課した處の使命の意識である。我々は神に對して個人としてのみならず、

人間一般として此の使命を果す義務を負うて居る。此れ我々があらゆる人間を同類として意識し神の前に連帶の觀念を持つ根據である。神が人間を造つた時、人間に意匠したところのものを人間は實現しなければならない。此の意味を離れて、人類意識と連帶の觀念とを說明する事は出來ない。故に我々が我々の天命を完うし、與へられたる本能を生かさんとする時、我々は公けなるものを私なるものより自ら上置する。只然し如何に私的なる本能と雖も、其れは與へられたるものであるが故に、必ず適當の度合に於て生かされなければならない。此れを全然滅却する事は生命を與へたるものに對する不從順である。例へば、自己の使命は、自己の個人的享受より重んじなければならないが、其爲に個人的享受を全然捨て去る事は正當ではない。例へば、一人の藝術家に於て、其の制作の努力は、花鳥風月を樂しむ個人的享受よりも素より重んじられなければならないが、其爲に全然花鳥風月を樂しむ事を捨て去る事は、藝術家的使命に對して如何に熱誠であるとは云へ、正當な事ではない。假令花鳥風月を樂しむでも、只制作に役立つ爲にのみ此れをなす事も寡正當ではない。此の場合其の藝術家の最も正しき道は、制作に專ら力を注ぎながら、又純粹に——制作の爲でなく、個人的享受とし、花鳥風月を樂しむ餘裕をも殘す事である。此の意味に於

て、神に對する我々の義務とは我々の人格を完成すると云ふ事の外にはない。我々の使命は如何に重要であつても其の義務の一部である。人格を完成するとは與へられたる凡ゆる本能を、其の調和せる體系に於いて、生かす事の外にはない。故に個人的本能を無視して、人類的本能のみを生かす時、其の人格は完成されない。神への義務は完全に果たされない。實際に我々は、かくの如き人格に對する時、悲壯なる感動を受けても、圓滿なる滿足を得ない。人事の總ても制作欲望の爲の手段となす藝術家は、如何に仕事に熱心であつても、完成品を作り出す事は出來ない。

前述の如く人類的本能は、個人的本能より正しく上置されなければならないが、然らば同一の本能に於いて、若し主觀的制約を拂拭するならば、自他の先後は如何に定むべきであるか。例へば、自己の使命と他人の使命とは、何れを先きにすべきであるか。其れは自己の使命を先きにしなければならない。其れは權利の順序ではなく、我々の神への奉公の努力の發現する機會の自然の順序である。我々は一個の生命を神より依託されたのである。我々は此の生命を完うする義務を負うて居る。故に人類的本能と雖も、自己の本能としての他我々は意識する事は出來ないのである。已に主觀的制約を拂拭する以上、自己の使命も、他人の使命も同一である。故に、自然の順序と

して、自己の使命を先きにする迄である。主觀的制約の下に考へるが故に、我々は自己を他より
も先きにする事を何等かの「私」の觀念と結合して考へるのであるが、已にこれを捨て去つたれ
ばこそ、我々は何等の疾ましさなく、平氣で、自然の順序に從ひ、自己の使命を先きにし得るので
ある。自己の個人的享受と他人の個人的享受との先後も此れと同樣である。我々は他人の使命の
爲には、自己の個人的享受を後にしなければならないが、他人の個人的享受の爲に自己の個人的
享受を後にする必要はない。然し前にも述べた如く、他人の凍餒の如き生理的必需は、他人が其
の使命を果たす爲の必須の豫件であるが故に、其れを救ふ爲の努力は、自己の個人的享受よりも
先きにしなければならない。(此等の點に就いては、此の論文の直接の目的と離れるが故に、別に
「ギリシヤ主義とキリスト教主義との調和の道」と云ふ論文に於いて詳論するであらう。)

上述の如き順序は、我々にとつて與へられたる經濟的制約が避くべからざるものであつた時に、
其れに對して我々の、其れ自身には肯定さるべき二個以上の動機の間の選擇の原則である。然し
其れより別に經濟的制約を出來得る限り少くし、其の我々にとつて禍なる負荷の感を減ぜしめ、
更に反つて此れを生かす道、一言にして約せば經濟的制約を超克する道はないであらうか。第一に

我々は、此の制約を出來得る限り小ならしむる爲に節約しなければならない。物質と時間と空間と
を浪費する事を止めなければならない。素より一層大なる價値を生かす爲に必須なる材料を惜し
んで、より小さき價値にて滿足する事は排斥しなければならない。此の意味の消極主義は人生の創
造的本能を萎微せしめるものであり、最も厭ふべきものである。然し或る一定の價値を生かすの
に必要以上なる材料が費されてはならない。其れは我々の此の重荷たる經濟的制約を大ならしむ
る罪惡である。然かのみならず生かされざる材料は、只に無價値であるのみならず又同時に醜であ
る。かくの如き浪費されたる材料は、實に絕對的の損失である。殊に藝術品に於ては此の無駄は全
體の價値の積極的瑕瑾であつて、單に餘分なる附加物ではない。又節約は積極的な美と力とを生み
出す爲にも必要である。より高き價値を生かす爲には必ずしもより多くの材料を要するとは限ら
ない。例へば建築に於いて、素樸なる樣式の建築は、華麗なる樣式の建築よりより高き美を、演劇
に於いて簡素にして集中されたる表出は、複雜にして、纖巧なる表出よりもしば〳〵より強い力
を持つて居る。聖人を飾るに相應しき服裝は王者を飾るに相應しき服裝よりも質素である。故に
我々は出來得る限り少しの材料を以て出來得る限り大なる價値を生かさん事を努めなければなら

ない。又節約は我々の精神生活に缺くべからざる心の靜かさを保つ爲にも必要である。此の意味の節約は凡ゆる種類の節約の中にて最も尊きものである。宗教生活には殊に此の種の節約が缺けてはならない。物質的材料が多ければ多い丈け、我々の心は物に捉はれ、形の役となる。精神生活の獨立を保ち難く、他人の意を迎へ易く、己れを枉げ、種々の無理を企て、過失を作り易く、心をいら立たせて、淺ましき態度を取り易い。遺敎經にある如く、節約者に却つて憐愍さるゝが如き奢侈者は愚かである。我々は靜かな、うるほうた常に熟慮と觀照と奉仕とに用意した心を保つ爲には、節約しなければならない。又闘ひに於いて、事業に於いて、豫備を蓄へ、潛勢力を養ふ事は、最上の智略である。道德生活に於いて、謹しみ深き判斷や、他人に對する援助をなす餘裕を持つ事は、善事を行ふ爲の最高の智慧である。遺敎經にある如く「智慧の水の爲の故に漏失せざらしめ」る節約は、宗敎生活に於いて、禪定を保つに缺くべからざる道である。藝術生活に於ても、何よりも必要なる觀照の深さと、制作の爲の行き屆きたる仕上げに缺くべからざる、なみ〳〵と溢へた靜かな心を保つ爲には、凡ゆるものを節約して、常に餘力を殘しておかなければならない。殊に感情の表現を節約する事は、我々の人格を高貴ならしめ、眞實ならしめる爲に缺ぐべからざる條件である。或る種の感情耽溺は實に低く、或る種の贅澤は實に卑しい。此れに就いては「卑しむべきものに就いて」の中に詳論したから此處には再び繰り返へさない。

次に經濟的制約は我々にとつて必ず此れを重荷としてのみ感じなければならないであらうか。一面より見れば、經濟的制約は我々にとつて價値あるものゝ發現及び其の强調の機會である。例へば一つの都市計畫に於いて、此處にある一定の經費と年限と場所と其の他の經濟的制約があればこそ、多くのプランの中から優劣を決定する事が出來るのである。其の制約がないならば、數多のプランの中から、實際問題に於いては、優劣を決定する事が出來ない。競技に於いても同一の一定の經濟的制約が豫件として必要である。また俳句は十七文字を制限さるゝが故に、其の中に最も價値ある內容を盛り生かさんとして、其處に集中が行はれるのである。其の印象的な、强い効果は字數の制約がないならば、生れる事は出來ない。又富みたるものゝ高價なる贈物が我々を動かす事が少いのに、貧しき者の小さき贈物は其の眞心を遙かに生かして、我々を動かすのである。我々の愛や、誠や、實意は經濟的制約の大きい丈け强調されて現はれるのである。天的なる味が貧しきものゝ觀念と結合するのは其爲である。又我々は、個人意識以上の人類意識を生かす

事に依つて、人類の連帶の觀念から、此の經濟的制約の重荷を或る程度迄超克する事が出來る。例へば一人の天才が其の才能を生かす爲に、極めて多くの物質的材料を消費したとする。其時此れを單に一個の個人がかくの如き多大の消費をなしたものと考へる時、我々は其の不合理と、其爲に生ずる人類及自分の經濟的制約の增大とに對する不平と、及び人間的なる羨望と嫉妬との衝動に惱まされるであらう。然しかくの如き天才を人類の誇りとして讃美する時、其の消費は人類の消費であり、畢竟自己の消費として考へらるゝが故に、此等の苦惱を遙かに輕減する事が出來るであらう。又自分が仕事の爲に同樣の消費をなさねばならない時、同樣の人類意識に立つ事に依つて、同胞の經濟的缺乏に對する同情より生ずる苦痛から免れる事が出來るであらう。かくの如き超個人的なる人類意識は人類の文化の爲に缺くべからざるものであつて、此れなくしては人生の偉大なる積極的事業は成就する事は出來ない。共產主義的精神は此の意味に於いて、又一種の節約である。偉大なる公園や、寺院や、美術館の如き多大なる經濟的消費を要するものを、個人の經濟的制約を增大する事を出來得る限り少くして、然も享受の機會を均霑せしめるものは、共產主義の長所である。只此の場合に忘るべからざるは、其の創造が其の本來の性質上個人的なる約束を持ち、且つ其の享受に高き敎養を要するものであつても、其れがそれ自身に價値あるものである限りは、自己が此れを享受し得る機會と資格とを有すると否とに關はらず、人類の名に依つて、此れを自己のものと考へなければならない。共產主義をかくの如き高き連帶觀念に依つて高めないならば、それは畢竟人類全體の文化を低卑ならしめるものである。如何なる場合に於ても、我々は其れ自身に價値あるものを經濟的制約に依つて生ずる從屬的價値に依つて斥けてはならない。此の公明なる、崇高なる勇氣は實に人類の誇りである。

最後に經濟的制約に關する最も深き考察が殘存する。經濟的制約は、如何に我々の出來得る限りの努力を以てするも、其れは畢竟我々の存在の限界である事は免れない。我々にとつて願はしきものではなく、餘儀なきものである。我々は地上に於いては、此れを忍受する他はない。然し我々は其れ以上を願ふ事は出來ないのであるか。經濟的制約なき存在の方式を願ふことは出來ないのであるか。かく願ふことは我々の我儘若しくは忍耐の不足であらうか。勿論我々は我々の我儘と忍耐の不足から、なすべき事をなさずして、徒らに經濟的制約を、單に我々の欲望に對する障碍物として、厄介物扱ひする事は、稀れでない。節約すべきものを節約せず、無駄の爲に材料を